ガーディアン　Guardian　「守護者」　誕生

Guardian

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガーディアン　Ｇｕａｒｄｉａｎ　「守護者」　誕生

【Ｎコード】
Ｎ６０７６Ｍ

【作者名】
Ｇｕａｒｄｉａｎ

【あらすじ】
主人公早川浩輝は一見平凡なサラリーマンであるが、学生時代の恐ろしい体験が元でアメリカの指示を受ける暗殺者でもあった。主なターゲットはアメリカにとって邪魔となる政治家や大企業の役員などだ。浩輝の実績は世界でも３番に入るほど優秀であり、特に長距離射撃はナンバー１の実力であった。その早川浩輝の生い立ちと、恐ろしい体験とは何か、現在の仕事や今後の生き方までを追っていく

ワインディングロード

ガーディアン　Ｇｕａｒｄｉａｎ　「守護者」　誕生

１．ワインディングロード

昭和５８年４月午前４時過ぎ、埼玉県新座市野火止にオートバイチェーンが空回りしている音が、早朝の住宅街に不似合いな高い音を響かせていた。

パン屋の角を曲がり立教高校グラウンドの裏にある雑木林沿いの小道に入ったところで彼は立ち止まった。

スピードメーターとタコメーターの間にあるイグニッションスイッチに挿してあったキーを握り、アクセサリーポジションを通り越しゆっくりとオンのポジッションまで回す。

グリーンと赤のランプが点灯して彼のマシンは目を覚ました。

左手の人差し指と中指で少し重めのクラッチレバーを握り左足でシフトペダルを蹴り下げるとグリーンのニュートラルランプが消えた。

普通のオートバイはニュートラルポジションの下が１速のギアポジッションだが、このマシンはベースが一般の市販車だがサーキット専用のレーシングマシンと同様のシフトパターン、すなわち普通に市販されているオートバイのニュートラルポジションから数えてワンダウンファイブアップパターンとは逆のワンアップファイブダウン方式に改造してあるのだ。

つまり今、ギアは２速に入っている。

右手でガソリンタンクの下にあるフューエルコックを開けチョークレバーを引いた。

一度クラッチレバーを離すとマシンを前後に動かしてエンジン内のシリンダーにたまった空気を抜き、もう一度クラッチレバーを握りなおすと、右の腰をマシンのシートの横に密着させ全身を使ってマシンを押しだした。

5、6歩押して勢いをつけシートに横ずわりの体勢で飛び乗り、荷重がかかった瞬間左手の人差し指と中指で握り締めていたクラッチを離す、2サイクルエンジン独特のではあるが、まだやや湿った排気音が鳴り、エンジンに火が入った。
再びクラッチレバーを左手の人差し指と中指の2本で握りアクセルを少し開いてエンジンの調子を整えながらシフトペダルを左足のつま先でこじ上げてギアをニュートラルポジッションに戻したことをグリーンのニュートラルランプが点灯していることで確認してからクラッチから指を離す。
サイドスタンドを立ててマシンを自立させると微妙に開けていたアクセルグリップを戻した。
赤いモーターサイクル用ジャケットの胸ポケットを開け、中からセブンスターのパックを取り出すと1本抜いて口にくわえた。
スターリングシルバーのジッポライターでくわえた煙草に火をつける。
くっきりとした二重まぶたとやや彫りの深い顔が、暗い住宅街に映し出された。
彼の名は早川浩輝、高校春休み最後の水曜日午前4時30分、あたりは暗く気温も8度しかない。17歳、高校時代の春であった。
かじかみかけた手が少し痛いが、貪る様に煙草をふかして少し寝ぼけてぼんやりしている頭をハッキリさせると、モーターサイクル用ジャケットの下に着ている革ツナギのジッパーを首まで上げ、首のホックを留めた。
短くなった煙草を捨て、ブーツで踏みつけて火を消すと防寒用のフェイスマスクをかぶり、その上からフルフェイスのヘルメットをつける。
赤いモーターサイクル用ジャケットのジッパーを一番上まで上げて、両手に手首まであるレーシンググローブを着けると手首のマジックテープを留めた。
マシンに跨りサイドスタンドを蹴り上げてヘルメットのあご紐を締

める。左手の人差し指と中指でクラッチレバーを握り左足のつま先でギアのシフトペダルをこじ上げて１速に入れ右手でアクセルスロットルを開きながらクラッチレバーをゆっくりと離すとマシンはまだやや湿った排気音を響かせながら雑木林の中の小道をスムーズに走り出した。

立教高校グランド裏の細い道を１速のままゆっくりと進みながらヘルメットのシールドを下げると、土屋オートの前に出た。

浩輝はヘルメットの中で「ワコウさんはまだ寝ているかな」とつぶやいて左のウインカーを点滅させた。まだ車の走っていない大通りに出るとアクセルを開け加速し、独特の排気音を残して左折した。

国道２５４号線、通称川越街道に出る少し手前で浩輝はマシンを走らせながらチョークレバーを元に押し戻した。

川越街道にもこの時間にまだ車はほとんど走っていなかった。

Ｒ２５４川越街道を川越方面に向かって走り、浦和－所沢道路を越えて上り坂を上りきる。女子短期大学の前を通過し、中央に松林があり上下２車線がセパレートされたあたりでメーターパネルの水温計を覗くと、ようやく水温計の針はグリーンゾーンの端に入っている。

１度アクセルを空ぶかしさせタコメーターの針の動きを見た浩輝は、クラッチレバーを握りシフトペダルを２回左足のつま先でこじ上げてギアを２速に落とした。再度アクセルをふかしてエンジンの回転数を上げ、速度と２速でのエンジン回転数を同調させた瞬間クラッチレバーを離す。

浩輝のマシンは後ろから蹴飛ばされた様に、軽くフロントタイヤを浮かせながら強烈に加速した。

タコメーターの針はエンジンの回転数が５０００回転／分から一気に８５００回転／分に達したことを示した。

浩輝は上半身をやや前に伏せて前傾姿勢をとりフロントに体重をかけていたが、フロントタイヤはお構いなく上にあがろうとするし上体は後ろへと強い力で引っ張られた。浩輝は２サイクルエンジン独

特の強烈なGを感じていた。
排気音も今は、完全に乾いて弾ける様な2サイクルエンジン独特のものになっていた。
再びクラッチレバーを握り、素早くシフトペダルを上から蹴り下げて3速にギアを入れ、クラッチレバーを離しアクセルを全開に開けた。
浩輝はしばらくその強烈な加速Gを味わい、2サイクルエンジンに対する思い入れをさらに強くしていた。
スピードメーターを見るまでもなく完全に制限速度違反であるのは解っていた。メーター読みでは時速１５０ｋｍを超えたところだ。
左手でクラッチレバーを握り、左足のつま先でギアのシフトペダルを2度蹴り下げてギアを5速に入れクラッチレバーを離してアクセルグリップを閉じて効かないエンジンブレーキに任せながらスピードを時速８０ｋｍまで落とした。
そこからは平均時速７０ｋｍから８０ｋｍで遅いトラックを追い越す時だけ強烈な加速を見せたが他はおとなしく川越方面に向かって走った。
川越の街に入る手前の烏頭坂を上り、国道１６号線川越バイパスとの交差点を右折して川越の繁華街を避けて、大宮方面に少し走り途中で再び川越街道に戻り東松山方面に向かう。東の空が少しずつ明るくなってきた。
東松山を抜けて小川町の先で国道１４０号線を左に曲がり、長瀞を過ぎると目的の美の山公園はもうすぐだ。
浩輝は美の山公園頂上駐車場の一番奥にマシンを停めた。まだ一般の乗用車や浩輝以外のオートバイも見当たらなかった。
一度アクセルを空ぶかしさせてから浩輝はメインスイッチを切った。これは誰かがこうするとバッテリーの為に良いと言っていたので浩輝はいつも必ずエンジンを切る前に一度空ぶかしする様にしている。
ヘルメットのあご紐をはずしてヘルメットを取り、その下に着けていたフェイスマスクを引き剥がすようにして脱いだ。

サイドスタンドを立ててマシンを降り、脱いだフェイスマスクをヘルメットの中に無造作に突っ込んだ。赤いモーターサイクル用ジャケットのジッパーを全開に開けてからその下に着た革ツナギの首ホックをはずしてジッパーも胸まで下ろす。
浩輝のクシャクシャになった髪の間や革ツナギの下に着ているＴシャツからうっすらと湯気が起っていた。顔は上気して少し赤くなっている。
両手のレーシンググローブを外してヘルメットの中にフェイスマスクと一緒に突っ込むとマシンのバックミラーに掛ける。
浩輝は髪の毛をクシャクシャと掻きながらジャケットのポッケットから小銭を取り出して公衆トイレの脇に設置された飲料の自動販売機に向かって歩いた。
自動販売機でコカコーラを２本買って自分のマシンの横に戻り、駐車場と歩道の境目の段差に座り込んで冷たいコカコーラを飲んだ。上気した顔に早朝の空気を感じながら冷たいコーラを飲むと本当にうまかった。
ジャケットの胸ポケットからセブンスターのパックを取り出し、その中から１本口に挟みジッポのオイルライターで火をつける。肺いっぱいに煙を吸い込んでゆっくりと吐き出すと少しずつ先程までの興奮が冷めていくのが解る。
浩輝は、この公園の麓から頂上まで約３ｋｍのワインディングロードを限界まで飛ばして今日は１０往復していたのだ。
その時、４サイクルマルチエンジンに集合マフラーをつけた排気音が近づいてきた。黒いカワサキＺ４００ＧＰにヨシムラサイクロンマフラーを付けたマシンが浩輝のマシンの横に停まった。
アクセルを一度ふかしてからエンジンスイッチを切ったそのライダーが、ショウエイのヘルメットを脱ぎながら「相変わらずむちゃな乗り方するなあ、浩輝そのうち死んじまうぞ」と声をかけてきた。
この黒いカワサキＺ４００ＧＰの改造車に乗った長身の男は浩輝の中学時代の同級生で高校は別々だが今でも親友の松本洋二だ。２人

はちょくちょく示し合わせた訳でもないが、この美の山公園で遭遇し、ワインディングロードを攻めていたのだ。今日も偶然会ったというわけだ。
浩輝は隣に座った松本にまだ開けていない方のコカコーラを差し出した。
「おう、サンキュー」松本は笑った。
松本はうまそうにコカコーラを飲むと、自分のジャケットからセブンスターを出して1本くわえた。ポッケットを探っている松本に浩輝は自分のジッポライターを出して火をつけてやった。2人はしばらく無言で2人並んで煙草を吸いながらコーラを飲んでまどろんでいた。
「そういえば、お前エンジン新しいのに乗せ替えたのだって？調子よさそうじゃないか」松本は浩輝のマシンを見ながら聞いた。
「まあね、新しいエンジンといってもシリンダーから上だけ、つまりピストンとシリンダー、シリンダーヘッドを変えて排気量を１００ｃｃ増やしたのさ。当然キャブのセッティングも変えたけどこっちはまだこれからだな」と答えながら浩輝も自分のマシンに目を向けた。
「パワー出たか？」
「ああ、排気量１００ｃｃの差はでかいぜ」
浩輝のマシンはヤマハＲＺ２５０をベースに様々な改造を施してあった。つまり、元々２５０ｃｃだったエンジンだがＲＺには３５０ｃｃのエンジンもある。しかし、始めから３５０ｃｃエンジンのＲＺ３５０を買ってしまうと値段か高いのはもちろんだが2年に1度の車検を受けなくてはならない。そこで浩輝は車検を受ける必要がない２５０ｃｃエンジンのＲＺ２５０を購入してシリンダーから上をエンジンが無事な事故車から調達して３５０ｃｃエンジンに改造したのだ。
浩輝も松本のように４００ｃｃの4サイクルマルチエンジンのバイクにも興味はあったが2サイクルエンジンの強烈な加速が良かった

のと、本音は金がなかったのだ。ヤマハの生産過剰のおかげで大安売りをしていたＲＺ２５０は浩輝にぴったりであった。
当然排気量が２５０ｃｃから３５０ｃｃにアップしたのに従いマフラー、この場合２サイクルマシンなのでチャンバーも石井スポーツ製の３５０ｃｃ用の物に交換し、フロントブレーキにもＲＺ３５０のダブルディスクブレーキを移植してブレーキ性能を飛躍的に向上させていた。
「お前のマシンのリアタイヤちょっと溶けてるんじゃないか？」松本に言われて浩輝も良く見てみるとリアタイヤの左右のサイドに砂がついていて良く見るとその下にはゴムが溶けた跡があった。
「ちょっとだけ溶けたみたいだな」浩輝は軽く言った。
「ちょっとだけって普通そこまで一般道を攻めるかよ」松本はあきれていた
「今履いているのはダンロップのＴＴ１００だけど、今度ブリジストンから出たバトラックスにしたらこうはならないと思うよ、だけど高くて俺には買えないからしょうがないさ。それにこいつはいきなりドカンとパワーが出るからタイヤに負担がかかっちゃうんだ」
「パワーの上げ過ぎで有効パワーバンドが狭いことはないのか？」松本は２サイクルエンジンのジレンマすなわちトップパワーを上げることによって十分なトルクを得られる有効パワーバンド（エンジンの回転域）が狭くなり、パワーバンドを広げてフレキシブルなセッティングにすれば乗りやすくはなるがトップパワーが下がってしまうということを良く知っていた。
「前の２５０ｃｃの時は苦労したけど排気量を３５０ｃｃにしたら今のところはまったく問題ないね、だけどこれに慣れてもっとパワーが欲しくなったらまた同じ様に悩む事になるかもね」
先程から何台か浩輝達と同じ様なバイクが集まりだし、一般の乗用車も２台入ってきた。松本がふと腕時計を見ると時間は午前８時３０分だ。
「なあ、今日はもう走らないだろう？いつもの立ち食いそば屋に行

こうぜ、俺腹減っちまったよ」松本が笑いながら腹をさすって浩輝を誘った。
「オーケイ」浩輝は答えると勢いをつけて立ち上がり、横の灰皿で吸っていた煙草を消す。
浩輝と松本の２人はそれぞれのマシンに跨り駐車場を出て行った。

白い息を両手に吹きかけながら「あの時も寒かったなあ」とつぶやきながら浩輝はじっと閉じていた目を開き腕時計を見た。
左腕にはめたカシオのＧショックには２００１、４、１３、Ｆｒｉ、ＡＭ７：１８と表示されている。
気温の寒い所で待つのはつらいが、今日ぐらいは過去の経験から比べればどうという事はない。せっかく昨日の夜にここでサイト調整を行ったライフルが気温の変化で狂ってしまうのは困るしスコープが曇って見えなくなっても困るからここで待つ以外にないのだ。
今回のターゲットは外資系の会社役員で今、浩輝はその役員室が見える東京駅から京橋方向に１０分程度歩いた所にあるビジネスホテルの屋上にいる。
エレベーターの機械室の脇に座り時々双眼鏡を覗き込んでターゲットの出勤を待っている。
左腕のＧショックが７時３８分を示した時にターゲットが現れた。
浩輝はターゲットを確認すると素早くライフルを構えてボルトを操作し弾丸を薬室に送り込むとスコープを覗きターゲットに合わせた。
風と光を計算して呼吸を整えて静かにトリガーを引く。右肩に衝撃を感じスコープが跳ね上がった。
ライフルを双眼鏡に持ち替えて確認すると、ターゲットは机の上に倒れ頭の半分は消失していた。
浩輝は念のため双眼鏡を使って周囲も確認したが出勤するサラリーマンの中で消音器のついたライフルの発射音に気づくものはいなかった。もっともアメリカ映画の誇張された銃の発射音しか知らない日本人では消音器なしの発射音を聞いてもライフルの発射音だと気

づくものはいないであろう。
手早く空の薬きょうを抜きポケットにしまうとライフルをハードタイプのギターケースに入れて何食わぬ顔で非常階段を降り、出勤するサラリーマンの流れに逆らって東京駅方面に歩いていった。

第一部　完

ＭＲ：医薬情報担当者

２．ＭＲ：医薬情報担当者

２００１年４月１６日月曜日午前８時３５分

仙台市青葉区本町の地下鉄勾当台公園駅を出て目の前にあるオフィスビル、浩輝は自分専用の営業車をビルの裏手にある立体パーキングに入れ、裏口からビルの中に入って行った。

１階のエレベーターホールで数人の顔見知りにばったり会った。

「おはようございます」浩輝はいつもと変わらない口調であいさつし彼らと共にエレベーターへ乗り込む。

いつものように３階でエレベーターを降り、左側にある日本レイダー製薬（株）東北支店と書かれたドアを開け、再び明るい声であいさつした。

オフィスの中では事務担当の派遣社員である佐々木がコーヒーメーカーでコーヒーを入れているところで、コーヒーの香りがわずかに香りだしていた。

「おはようございます、早川課長」と少しほほを赤くしながら麻紀が早川にあいさつした。

浩輝は今朝のベッドの中での佐々木麻紀の姿を思い出してニヤリと笑った。

浩輝は足早にレターケースの前に移動して、自分の名前が書かれたレターケースを開き、中に入っている郵便物や自分あての書類などを取り出してから数人の同僚とあいさつを交わしながら自分のデスクについた。上司である営業所長と支店長はまだ出社していなかった。

浩輝はデスクの隅にレターケースから出したものを置くと、自分の持ち物であるＴＵＭＩのブリーフケースからノートＰＣを取り出して電源プラグとＬＡＮケーブルを接続してから電源スイッチをおしてＰＣを立ち上げた。

いつものように暗証番号を入力してオペレーションシステムを起動すると最初に電子メールをチェックするためにメールソフトを送受信した。メールソフトが送受信している間にメールボックスの中に入っていた書類などにざっと目を通しているところに派遣社員の佐々木がいれたてのコーヒーを運んできた。

「ありがとう」とだけ言って浩輝はそのコーヒーを受け取り「そうそう、先週の出張でみんなに土産を買ってきたのだけれど、後で配ってくれませんか？」と他人行儀な口調で尋ねながら、紙袋から今はやっているバナナの加工菓子を取り出し、佐々木麻紀に手渡した。

「いいですよ。わかりました」と言って麻紀も他人行儀な口調で答え、浩輝からバナナの加工菓子を受け取り、コーヒーカップの乗ったお盆を持ってほかのデスクにコーヒーを再び配り始めた。

浩輝のＰＣ画面には電子メールの送受信が終わり、浩輝宛に３７通の電子メールが配信されていることが表示されていた。

一旦メールソフトのウインドウを最小化してデスクトップを表示させて、様々な業務管理を行う専用ソフトを起動し、最新情報データを取り込むための送受信ボタンをクリックし、データのアップデートを行う。

麻紀が運んでくれた淹れ立てのコーヒーをすすりながら、メールボックスに入っていた手紙や書類にじっくりと目を通す。ほとんどは飲み屋の女の子からの手紙や料理屋からのダイレクトメールであった。

そこへ日本レイダー製薬東北支店長である大山彰が出社してきた。大山はやせ形で神経質そうな表情ではあるが根はやさしい男であった。「おはようございます」と周囲から少し大きめの声であいさつされた大山はいつものように「おはよう」とつぶやくように言うと、少しうつむきながら、パーテーションによって区切られた支店長席である自分のデスクに向かった。

浩輝は立ち上がって支店長席へ行きパーテーションの切れ間から大山に向かって声をかけた。

「おはようございます。大山支店長」
「おう、おはよう早川君、先週の学会はどうだった？」
大山はパッと明るくなり浩輝に笑顔で答えた
「ええ、助教授につかまって大変でしたが良い連絡もあるので、岡本所長が出社されてからご報告したいのですがよろしいでしょうか？」
「ああ、いいよ。それじゃあ9時３０分ごろにしよう」
と大山は言いながら自分のＰＣを起動していた。
「はい、わかりました。失礼します」
浩輝は大山のデスクから自分のデスクに戻り時計を見た。
時間は9時１０分を指していたが岡本はまだ出社していなかった。
メールソフトを開いて、送信されていた電子メールに1通ずつ目を通して、必要な先には返事を入力し返信していたところに、浩輝の上司である営業所長の岡本が出社してきた。
「おはよう」岡本が低く重い声であいさつしたが皆の返事はなかった。
岡本は素早く支店長のデスクへ向かい少し高い声で「大山支店長おはようございます。週末のゴルフはどうでしたか？天気は良かったけど少し寒くはありませんでしたか？」などといった、周りで聞いているほうが恥ずかしくなるような、ごまをすりながら作り笑顔を浮かべていた。
「岡本所長、９時３０分ごろ早川君から先週末の学会での報告を聞くから君も同席しなさい」と大山がすこし強い口調で言い放った。
実は大山は週末のゴルフでスコアが悪く、思い出したくない話題に触れられて機嫌を損ねてしまったのだ。
「はい、わかりました」岡本所長はこれはヤバいと感じたようで飼い主に怒られた飼い犬のような格好で自分のデスクに向かうと、周りの同僚からはクスクスと小さな笑い声が聞こえた。
岡本は営業所長である自分の威厳を示すように「早川君、９時３０分から先週の学会出張の報告を聞くから用意してくれ、大山支店長

も同席するからそのつもりで用意しろ、いいな」と八つ当たり的な感じで命令した。
浩輝はそんなことはお構いなしに「はい岡本所長、先ほど大山支店長から言われましたので、準備はできています。」
「何、大山支店長とこの件ですでに話をしたのか？」岡本は驚いたように言うと
「はい、大山支店長が出社されてすぐに報告したいが、岡本所長も同席でいいかと伺いましたところ９時３０分に岡本所長同席で報告するよう指示されました。」と浩輝は答えた。
「こまるねえ、早川君、直接支店長と僕がいない間に勝手にそんな事を決められては、私のスケジュールもあるんだから、そういうことは私から支店長に話をして時間の調整をするから、次からは勝手に話を進めないでくれ、解ったな。」
浩輝の瞳がスッと細まり、瞳の奥に小さな炎がかすかに揺らめいたが、その炎をすぐに消し、心の中で「また八つ当たりかよ、こいつはケツの穴が小さすぎるな」と呟きながら、「はい、申し訳ありません。」と頭を下げた。
「まあ、俺の本当の上司でもないし、我慢できなくなったら取り替えてもらうか、消えてもらえばいいや」と浩輝は考えていた。
再び自分のデスクでＰＣを操作してルーチンワークをこなしていた時岡本が浩輝に声をかけた。
「早川君、そろそろ時間だ」
岡本が安物のデジタルクオーツ時計を指さしながら声をかけた。
浩輝は自分の腕にはめているロレックス社製デイトジャストターンベゼル付き、通称サンダーバードモデルに視線を落とした。時間は９時２５分を示していた。「まだ早いがケツの穴が小さい奴は心配なんだろうな」と頭で考えて席を立った。
ちなみに浩輝はプライベートにはロレックスのデイトナ、リファレンスナンバー１６５２３、つまりステンレススチールとイエローゴールドのコンビモデルの黒文字板を使っているが普段の表向きの仕

事である医薬情報担当者（通称ＭＲ）に豪華すぎて不向きなので少しシックなデイトジャストを使っているのであった。さらにいえばロレックスデイトナはその希少性と人気の高さからステンレススチールモデル、つまりリファレンスナンバー１６５２０の黒文字板が一番人気であり、日本ロレックスがつけている定価の倍以上の高値で並行輸入業者が販売しているが浩輝はこの自動巻きタイプのデイトナが発売されて以来このステンレススチールとイエローゴールドのコンビで黒文字板のデイトナが大のお気に入りであった。

デイトナは自動巻きモデルのデイトナのムーブメントをゼニス社から供給されていたので、その供給量には限界があった。

発売当時は当然定価が最も高いゴールドモデルが市場価格も最も高く、次いでコンビモデル、ステンレススチールモデルの順であったが、おそらくロレックス社が値段の高いゴールドモデルやコンビモデルを多めに作り、一番値段の安いステンレルスチールモデルの生産量が少なくなった事や、日本人がゴールドモデルに成り金趣味なイメージを持っていた事、ロレックス社が金利なしでの６０回払いローンを推奨したことなどから若者の間でこのデイトナステンレススチールモデルブームが起き、市場価格は定価の倍以上となった。

さすがにイエローゴールドモデルは金自体の値段もあってあまり値崩れしてないが、コンビモデルはロレックス社が大量に作った事と、ステンレススチールモデルの人気に押されて、浩輝が購入した日本ロレックスの定価より安い値段で並行輸入業者から販売されていた。

もちろんそのような高い腕時計を浩輝が自分で購入するはずもなく、特別なサーヴィスをしていた女医からプレゼントされたものであった。

「はい、小会議室に準備してあります。」と浩輝は言うと机の上のシステム手帳を取り、学会の抄録集を持って立ち上がった。

「ちょっと待ちなさい」岡本は浩輝に向かって言うと支店長席のパーテーションの中に消えた。

パーテーションの中から支店長の大山と岡本が並んで姿を現し、「

早川君、応接室を使おう」と支店長の大山が応接室を指さした。
準備といっても机といすの配置を少し変えただけだったので浩輝もすぐに応接室に向かった。
支店長の大山、岡本、浩輝の順で応接室に入ると、一人掛けのいすが2つ並んでいる右側に大山が座り、その隣の入口に近いほうに岡本、岡本の正面の3人掛けのいすの左側に浩輝が座った。
椅子に着くなり岡本が自分のシャツの胸ポケットに入れてあったマイルドセブンのパックを取り出して大山に差し出し、１００円ライターでスナックのホステスのように火を付けた。
岡本自身も1本取り出して自分で火を付けた。
会社のオフィス内はすべて禁煙であり、喫煙するためには一度オフィスの外へ出て、同じフロア内にある喫煙室へ行かなければならないのだが唯一の例外が応接室であった。
製薬会社の応接室を訪ねるのは主に医者ではなく、特約店、つまり医薬品の卸問屋の幹部であったので、禁煙にするのは難しかったのだ。
大山も岡本も愛煙家だったので応接室で喫煙しながら報告が聞きたかったというわけだ。
ノックの音がして佐々木麻紀が再度淹れ直した淹れ立てのコーヒーを3つ持ってやってきた。
「ありがとう佐々木君、いつも君の淹れたコーヒーはうまいねえ」
岡本がいやらしい目つきで佐々木に声をかけると佐々木は嫌そうな顔をして直ぐに出て行った。
佐々木は派遣会社から派遣されてきたばかりのころ、会社で岡本と二人っきりになった時に言い寄られたことがあったのだ。
その時はうまく言い訳をして逃れたのだがその後もちょくちょく食事に誘われたりしていた。
「早速だが今回の消化器外科学会はどうだった？」支店長の大山が煙草の煙を鼻から出しながら口火を切った。
「まず」、今回の日本消化器外科学会での発表に関しては、消化器

がんの中でも当社と関連の強い大腸がんの化学療法に関連する演題を中心に聴講しましたが、癌化学療法学会に比べてまだまだ外科医中心の消化器外科学会では化学療法は所詮外科療法、つまり手術療法の補助であり、薬で癌は治せないという今までのイメージはまだ変わっていないようです。まあ、少しですがよい発表もありましたがその辺の詳しい報告は後ほど報告書を作成して報告しますし、本社からも学術担当者が来ていたので正式なレポートもあると思います。」と浩輝は答えた。

「まあ、まだそんなところだろうなあ、それで他には？」支店長の大山が煙草を灰皿でもみ消しながら鋭い口調で聞いてきた。

「はい、実は2日目の学会終了後に第一外科の関田助教授と講師の吉岡先生と一緒に会食したのですが、その際に第一外科の癌グループでは今後、ヘッドの関田先生が中心となって医局医師の派遣先５１病院全てと協力して大腸がんに対する化学療法と、予後予測因子として４つの酵素に着目した医局独自の自主研究を行う予定だということです。」

浩輝はできるだけゆっくりと言葉の一つ一つを丁寧に説明した。

「何だって、ということは今後第一外科とその関連病院ではその研究プロトコールに入らなかったら大腸がんの症例は一切獲れなくなるじゃないか！」大山が叫んだ。

「大山支店長、その通りです。しかも４つの酵素それぞれについてある一定の有意差を検証するとなると１つのアームに最低５０例、４アームで少なくても２００症例、多い場合は５００症例位が必要になる様です。」浩輝の説明に続いて大山が

「プロトコールは決まったのかね」震えながら聞いてきた。

抗がん剤の世界では自社の医薬品で治療する症例を１症例獲得するのに各抗がん剤メーカーは毎日大学などの医局へ医薬情報担当者を派遣して凄まじい競争を繰り広げている。

「いいえ、まだ完全に決まったわけではありません。しかし、進行・再発症例での化学療法では完全にわが社のレイコボリンと恒和発酵

の５Ｆｕ併用療法が世界的な標準治療ですからこれは問題ありません。関田先生にも確約してありますから安心してください。問題はその倍以上症例が必要な術後補助化学療法、いわゆるアジュバントケモテラピーですが、こちらに関してはわが社のレイコボリンと５Ｆｕ併用療法を施行するかしないか、施行するとしても何クール施行するのか、また施行しない場合経口抗がん剤のみで治療するのかなど世界的にも意見が分かれています。関田先生もまだ悩んでいる様子でした。」

「早川君、多少金は掛かってもいい。必ずアジュバントにもわが社のレイコボリンと５Ｆｕの併用療法をプロトコールに採用させるんだ。」岡本が身を乗り出して叫んだ。

「早川君、他社はこの情報を掴んでいるのかね？」大山が岡本を遮るように浩輝に聞いた。

「いいえ、関田先生と吉岡先生の話では医局内でもこの話は公になっていないのでまだ誰にも話していないと言っていました。私に話してくれたのは進行再発症例のプロトコール組み入れが決まっているからだそうです。これから５Ｆｕの販売会社である恒和発酵にも話が行くと思いますが恒和発酵にとって古い５Ｆｕは薬価も少なく営業メリットが小さいのであまり興味を示さないと思いますが、内服の５Ｆｕをアジュバントに採用する活動をすると思います。」

「早川君、関田先生の希望はどれ位だと思うかね」さすがに大山は大学病院の担当経験も豊富なことから相手が研究費（研究助成金・奨学寄付金などの名目で主に製薬企業から大学病院に対して支払う寄付金）の増額を要求してくることを察していた。

「なんだって、研究費の増額だって、おいおい早川君、第一外科には毎年５０万円ずつ研究費を納入しているんだぞ、これ以上増額なんてできる訳無いだろう。」

岡本が煙草の煙を吐きながら口をはさんだ。

「岡本所長、少し黙っていてくれ」大山がぴしゃりと岡本に対して言った。浩輝は心の中で舌を出していた。

「大山支店長、これは関田先生ではなく講師の吉岡先生に聞いたのですが、現在第一外科では各製薬メーカーから４つの治療グループ、すなわち関田先生の癌グループ、肝グループ、膵グループ、ＩＢＤ（炎症性腸疾患）グループに入金されていた研究費のうち２５％、例えば１００万円の納入に対し２５万円が無条件に医局費として医局に吸い上げられます。各グループが自由に使えるのは残りの７５％です。最近は癌グループで使える金額はだいたい４００万円程度だったようです。関田先生としては今回の自主研究を進めて４年後の教授選挙に出ることを考えるとこれまでの倍、つまり５００万程度の金額が希望だと思われます。」

「５００万だって、とんでもない、無理無理、わが社ではとてもそんな金額は出せないぞ」岡本があまりに驚いて、先ほど大山から黙っていろと言われたことも忘れてまた口をはさんだ。

支店長の大山は腕を組みながら岡本を黙っていろと睨んだ。

「確かに我社だけで毎年第一外科に５００万納入するのはできない相談だ、早川君ほかのメーカーとの協力を君が主導してまとめ上げて関田先生にぶつけてみてはどうかね」

大山は落ち着いた口調で話した。

「実は支店長、関田先生からも金額こそ言われなかったのですが、他の抗がん剤メーカーとの接触を打診されています。まずは医局が動く前にメーカー同士でどこまで協力できるかを探ってくれと言われました。」早川が答えると大山が

「それは本当か、さすが早川君だ、我社のレイコボリンがアジュバントのプロトコールに採用されれば間違いなく年間２０億の販売増が見込めるぞ」大山は早くもソロバンをはじいていた。

「岡本君、今回の早川君の出張での飲食関係の清算は君がしなさい。もちろん東京の領収書は使うな、仙台の領収書で精算するんだぞ。早川君は疲れているだろうが報告書を今日中に出してくれ、もちろん関田先生や吉岡先生と会食した件は伏せておくように、いいね。」

「はい、支店長」浩輝が答えると岡本も小さな声で「了解しました」

と答えた。
３人はそれぞれ自分のデスクに戻り業務に戻った。
浩輝は昼に岡本に断ってから担当先である東北医科大学へ会社から支給されている白いマツダファミリアに乗って向かった。

第２部　完

ジゴロ

3．ジゴロ

早川浩輝は日本レイダー東北支店から北西に約１０分車を走らせ、東北医科大学医学部附属病院の外来者専用駐車場に自分のマツダファミリアを乗り入れた。

左腕にはめたロレックスデイトジャスト　サンダーバードモデルを覗くと針は１２時２５分を指していた。

「少し早かったかな？」浩輝は呟きながら車を降り、トランクを開けると中から黒いＭＲ用の拡張かばんを取り出す。

拡張かばんとは、製薬会社の営業マンである医薬情報担当者（通称ＭＲと呼ばれている）が自社製品である医薬品のパンフレットや世界中で発表された学術論文のコピーなどを入れた黒い大きなかばんで会社から支給されている。

浩輝は会社に出る場合はＰＣやノートなどを入れたアメリカ製のＴＵＭＩのブリーフケースを愛用しているが、病院を訪問する時には会社支給で全くセンスのない拡張かばんを使うことにしていた。

浩輝は東北医科大学の専任担当者であるので、同じ日本レイダーのＭＲでも他の開業医担当者などと違いあまり多くのパンフレットは持つ必要はなかったが、元々少し目立つタイプの顔立ちなので、服装やかばんは地味なものにしているのであった。

東北医科大学附属病院の外車者専用駐車場はさすが杜の都仙台らしく、杉やソデなど幹の太い木が葉を繁らせており、この季節は新緑でまばゆいばかりであった。

浩輝は、いつも使っているシステム手帳をポケットに突っ込んだ拡張かばんを左手に下げ、病院の外来棟とは別の研究棟へ向かっていつものようにゆったりとした歩調で歩いていった。

研究棟の前では数名の医師が白衣姿でおり、医局内が禁煙のため研究棟玄関前に設置されている灰皿の前で煙草を吸っていたが浩輝の

知っている医師はいなかったので軽く会釈をして研究棟に入り、エレベーターで7階に上がった。
7階は第二内科のフロアだ。第2内科は主に内分泌・腎・高血圧、免疫、血液疾患が専門であり、浩輝が勤務している日本レイダー製薬の主力製品である抗リウマチ薬のリウナインを多くのリウマチ患者に処方している主要医局であった。
関節リウマチ外来を受け持つ免疫グループの医師たちのデスクがある第一研究室の前で左手に持っていた拡張かばんを廊下の床に置き、その中からいくつかのＡ４版の書類封筒を取り出した。
ドアが開いたままの入口から第一研究室の中をのぞくと、講師の山本　剛医師が自分のデスクに座りＰＣに向かって何か考え事をしていた。
浩輝は少し遠慮して弱めに開けっ放しのドアをノックした。
すると山本が振り向き「おう、早川君か何だい？」と機嫌よさそうに声を掛けてきた。
浩輝は先ほど拡張かばんから取り出した封筒を胸に抱えて「こんにちは山本先生、先日先生からご依頼いただきました弊社の抗リウマチ薬リウナインと他の抗リウマチ薬との併用効果に関する最近の発表論文をお持ちいたしました。」と話しかけた。
「ああ、早かったな、どれ見せてくれ」山本はそういうと自分のデスクから立ち上がり、浩輝に中へ入るように手招きした。
「こちらです。今年発表されたものだけで5報ありました。その中には大規模な臨床試験成績もあり、どれも結果は素晴らしいものでした。」と言いながら浩輝は医局の中へ入り、山本に封筒から出した医学論文のコピーを手渡した。
山本はしばらく数報の論文に目を走らせていた。
浩輝はじっとして何も言わず山本の論文の確認が終わるのを待っていた。
山本は素早くページをめくりながら、いくつかの試験結果を示すグラフを確認していた。浩輝はその山本が確認しているグラフの内容

を素早く思い出していた。
もちろん今山本が見ている医学論文は全て英語で書かれており、専門用語も多数使われているので慣れない人ではたとえ製薬会社のMRであってもとても内容を理解することはできないが、浩輝にとって英語は表現方法としては単純であり、複雑な日本語よりもかえって簡単に思えるのであった。しかも、専門的な医学用語でさえも多数の論文を読んだり、学会で海外演者の講演を聞いたりしてきた経験ですっかり覚えてしまっているので全く苦にならずにその内容を理解できていた。
山本はしばらく文献に目を走らせ、時折考えるしぐさを見せながらページをめくっていた。
「この大規模試験の結果はとてもいいですね」と山本が浩輝に向かって言った。
「はい、山本先生、この試験では多くの抗リウマチ薬が弊社のリウナインと併用した事で有意な効果の上昇が認められています。しかしながら有害事象の増加も上昇傾向が確認されていますので筆者は慎重な検討が今後も必要だと書いています。」続けて浩輝は「それに、この試験で使われている抗リウマチ薬はいくつか日本では未承認ですし、日本で汎用されているリマトルは欧米では未承認なので日本での大規模な試験が必要ではないでしょうか？」と話した。
「確かにその通りなんだけれども、僕たちは今、教授からリウナインが効果不十分な場合のクリニカルパスの作成を求められているので、その方策をすぐに考えなければならないんだよ」山本は困った様子で浩輝にそう話した。
「山本先生、日本ではまだ治験中ですが、欧米で画期的な新薬として注目されている生物学的製剤はご存知ですよね。」
「もちろん知っているとも、お宅のエタネルセプトとライバル会社のインフリキシマブだろう。うちでもエタネルセプトに3例エントリーしてその効果の高さに驚いているんだ。」山本の声が少し大きくなった。

「しかし早川君、これはまだ治験中で一般に使えるようになりにはまだ2ー3年掛かるんじゃないのかな？」
「はい、確かにそうなんですが実はエタネルセプトは弊社のアメリカ本社が日本の厚生労働省に働きかけて、早期承認品目に入りそうなんですよ。」早川は先日開発担当者から聞き出した情報を山本に伝えた。もちろん山本が大学一口の堅い信頼できる人物だからこうした情報も出せるのであった。
「もしそうなれば、日本のリウマチ治療はすごいことになるよ。この間発表された試験成績ではエタネルセプトとリウナインの併用で全く関節の破壊が進行しないという結果が出たからね。」山本は自分で話しながら興奮していた。
「山本先生、その試験結果の詳細が入手できるようですので、入手次第お持ちしますね。」浩輝はこの試験結果を発表した医師が台湾で講演した際に使ったスライドを入手していたのだ。
「それは凄いな、早川君の情報にはいつも助けられてるよ。じゃあ頼んだよ。」山本の顔がすっかり明るくなっていた。
「はい、任せてください。」浩輝も自信たっぷりの口調で答えた。

山本と別れて第一研究室を出ると廊下で、高級ブランドの服と純白のブラウスをそれとは不釣り合いな安物の白衣の下に着た年齢の若さを無視すればエレガントな雰囲気の女性と目があった。
「あら早川さん、先週は学会で出張なんて言って、実は彼女と婚前旅行でも行ってたんじゃないの？」と斜めに浩輝を見つめながらいたずらっぽく声を掛けてきた。
彼女はこの第2内科教授、服部徳久先生の秘書を勤めている目黒由紀子だ。そのプロポーションはバストが大きすぎることを除けば見事な均整が取れていた。
「とんでもありませんよ目黒さん、丸3日間学会会場に缶詰にされて、大きな声では言えませんが夜は夜で先生方のご接待で大変でしたよ。しかも帰って早々学会の聴講レポートを今日中に提出しろな

んて言われてしまって・・・もう今晩は徹夜ですよ。」浩輝は泣き真似をしながら目黒にそう訴えた。
「またそんなこと言って、怪しんだから。」目黒は浩輝の顔を覗き込んで真偽を確かめるように見つめると「教授から伝言があるからちょっと来て頂戴」と言って浩輝に有無を言わせず先に教授室のほうへ向かって歩きだした。
目黒はさすがに21歳だけあって引き締まったヒップをしていた。浩輝はその目黒の引き締まった形のいいヒップを見ながら後をついて〈第2内科教授室〉とドアに書かれた部屋の前にある目黒のデスクの脇に来た。
目黒は胸のポケットに差してあったボールペンで自分のデスクの上に置いてあったメモ用紙に“今日7：00”とだけ書いて浩輝に渡した。
「教授からの伝言です。よろしいですか？」と少し威厳を現した言い方で浩輝に言った。
「はい、了解しました。」と浩輝はかしこまった言い方で返事をして、他から解らないようにウインクして目黒に合図した。
先ほどまでいた第一研究室に戻ってみたが、部屋の前に数社のMRがいる以外は先ほどまで話していた山本が浩輝によって届けられた論文のコピーを読んでいるだけで、他の医師は誰もまだ戻っていなかった。
浩輝は第一研究室の奥にある非常階段の扉を開けると非常階段を使って9階に移動した。
9階は第一外科のフロアである。
第一外科は4つのグループで構成されていた。第一グループが浩輝の主要顧客である関田助教授率いる癌グループ、第二グループは肝グループで第三グループが膵グループ、そして第四グループはI・B・Dグループといって炎症性腸疾患グループであった。
浩輝は医局受付の秘書に明るい笑顔で「こんにちは」とあいさつした。

医局秘書で受付担当の田村さんは、それまで読んでいたファッション雑誌から目を離すと浩輝の顔を見るなりパッと明るい笑顔を作って、「あら早川さんじゃないの、先週は学会で大変だったらしいわね。ご苦労様でした。あとお土産の“東京バナナ”ありがとうございました。凄く美味しかったです。私食べたことなかったのでとっても嬉しかったわ。関田先生は自分でみんなに買ってきた様な顔していたけど、吉岡先生から早川さんが買って関田先生に渡したんだって内緒で聞いちゃったのよ。もちろん関田先生はそんな事知らないけどね。」受付秘書の田村はペロッと舌を出した。

「いいえ、僕は知りませんよ。吉岡先生の勘違いじゃないですか？」と浩輝はとぼけた。

「またまたあ、とぼけたって無駄よ。」田村は浩輝とのおしゃべりが嬉しそうであった。

「ところで今日は誰に用事？」

「関田先生はいらっしゃいますか？」

「ええ、先ほど部屋にお戻りになられたからいらっしゃると思うわ。ちょっと待ってね。」

田村はデスクの上に置いてある電話の受話器を取り上げると関田部屋の内線番号に電話をかけて、少しの間言葉を交わした後、受話器を電話機に戻した。

「早川さん、いいわよ。」

「いつもありがとうございます。」と言って浩輝は関田の部屋である第一外科助教授室へ向かった。

今までいた医局受付から左へ５メートルほど行くと第一外科教授室・助教授室・講師室と記載されたプレートが貼ってあるドアに突き当たる。そのドアをノックして開けると中に数人の医師がＰＣに向かって仕事していた。

「失礼します」浩輝が誰ともなしに声をかけて中に入ると、「早川君、先週はご苦労様でしたね、今日は何だい？」と講師で関田と同じ癌グループの吉岡が声をかけた。

「吉岡先生こんにちは、先生こそ先週は学会発表お疲れ様でした。今日は関田先生にちょっと・・・」浩輝はそういうと視線をそこだけ特別な部屋である事を示すように“助教授室”と書かれたプレートがドアに嵌め込んである方に視線を向けた。

「ああそうか、関田先生なら今部屋にいるよ。」と吉岡は浩輝に言った。

「ありがとうございます。では失礼します。」浩輝がそう言って助教授室へ向かって歩き出したところで吉岡も自分の仕事に戻った。浩輝は吉岡のデスクの脇を通る際に軽く頭を下げながら助教授室のプレートが嵌め込んであるドアの前に立つと右手で3回ノックをした。

「どうぞ」部屋の中から関田の低い声が聞こえてきた。

「失礼します、日本レイダー製薬の早川でございます。関田先生先週は日本消化器外科学会での座長やご講演など大変お疲れ様でした。また、本日はアポイントもいただかずに突然お邪魔しまして申し訳ございません。」

「はい、お疲れ様でした。早川君にはまた世話になってしまったねえ。それにいつも言っているように、君はアポイントなんかなくても、いつでも用があれば秘書に言って、私の部屋に来てくれていいんだよ。」助教授の関田は他の製薬会社のＭＲから製薬会社に対して厳しい態度をとる助教授だと恐れられているのだが、浩輝に対してはいつも温和な態度で接していた。

「それにしても、東京って往復するのは近くて楽なんだけれども、楽しみが少なくてつまらないねえ。そうそう、去年日本レイダーさんの講演会で大阪に行った時は楽しかったねえ、あの店は早川君が探してくれたんだろう。」関田は自分のデスクから立ち上がり、応接セットの方に歩きながら浩輝に座るように合図した。

「関田先生、昨年先生とご一緒させていただいた通天閣周辺の新世界やジャンジャン横丁なんてＭＲが先生方をお連れするような場所ではありませんよ。でも関田先生がどうしても行ってみたいとおっ

しゃるので恐る恐るお連れした次第です。先生がああいう場所がお好きとは知りませんでした。」
「実は僕はかしこまった料亭なんかよりも、ああいった場所で気兼ねなく飲むお酒が大好きなんだよ。」関田は思い出して嬉しそうにそういうと、「あの時食べた串カツやドテ焼きの味が忘れられなくてね。それに次の日に行った黒門市場で食べたフグなんて、安くて腹いっぱい食べられて最高だったねえ。」と続けた。
関田はスーツの上着を脱いで白いワイシャツの上から自分の腹のあたりをさすりながら笑顔でそういった。
「関田先生、私も大阪に行った際にはよく新世界やジャンジャン横丁で串カツやドテ焼きを食べます。黒門市場のフグもよく行きますよ。味に関してはよくわかりませんが、支払いを気にしないで食べれるのがいいですね。」浩輝の言葉にウソはなく、本当に大阪に行った際には何とかしてそこに一度は足を運んでいた。
「今年は大阪での学会はあったかなあ？」関田がつぶやいた。
「関田先生、今年も弊社で昨年同様のシンポジウムを東京と大阪で行う予定です。もちろん先生にもご案内しますのでご予定が合えば大阪会場へご参加されてはいかがでしょうか？会社にはうまく言い訳を付けておきますので大丈夫ですし私も同行させていただきます。」
「本当かい？それは楽しみだなあ。」関田は本当に楽しみといった顔で天井を見上げていた。
その時ドアをノックする音が聞こえた。
「はい、誰ですか？」関田が口調を元に戻して低い声で答えた。
「関田先生、田村です。コーヒーをお持ちしました。」先ほどの受付秘書の田村であった。
「どうぞ」関田が相変わらず低い声で答えた。
「失礼します」と言って田村がスチールのお盆に関田用のマグカップと来客用のコーヒーカップを乗せて部屋に入ってきた。
「田村君、いつもありがとう」関田がそういうと

「早川さんは関田先生と同じブラックでしたね」と田村は言って浩輝の前にコーヒーを運んだ。
「はい、ブラックで結構です。ありがとうございます。」浩輝は何度もここへ来ているのでコーヒーの好みもすっかり覚えられてしまっていた。
浩輝は関田に次いでコーヒーに口をつけた。
田村が部屋を出てドアを閉めたのを確認すると関田が真剣な口調で切り出した。
「今日の用はこの間の話だよね。」
「はい、その通りです。先日は細かい事まで伺っていませんでしたので、もう少し詳細をお聞きしたくて参りました。」
「いいでしょう。何からお話ししましょうか？」
「まず試験期間と各群の症例数を教えてください。」
「うむ」関田は応接セットのいすから立ち上がり、自分のデスクの脇にあるスチール製の本棚の中から1冊のファイルを取り出して応接セットの元の席に戻った。
ファイルを開いて中の書類をめくりながら目的の数字を探し出して、そのページをテーブルの上で開いて浩輝に見せた。
「まず進行再発症例は観察機関５年で合計５００例を目標とするが最低でも２００例は登録する予定で、登録期間としては2年間だな。」
浩輝は持ってきたシステム手帳にメモを取りながら関田の話に耳を傾ける。
「次にアジュバント、つまり術後補助化学療法は目標症例数が２００例、最低でも５０例は登録するつもりだ。それからプロトコールだけれども、進行再発例のレイコボリン／５－Ｆｕ　は当然無病期間はずっと投与を継続するが再発した場合の治療に関してはまだ決定していない。今後ＦＯＬＦＯＸなど新しい治療法が出てくるので現時点では決めないでおこうと思う。アジュバントに関してはこれから決めるが、早川君のところのレイコボリン／５－Ｆｕ　を何ク

ールかやって、その後に経口抗がん剤を投与しようと思っているよ。」関田は一気に説明した

「関田先生、ありがとうございます。」浩輝はほっとした。

「しかし、症例数はまだ確定したものではありませんよ。実は今、統計学教室にお願いして有意差を出すために必要な最低必要な症例数を問い合わせているんだ。それから症例の登録やデータの解析などは、うちの統計学教室にお願いする予定だから近いうちに早川君も向こうのスタッフに紹介するよ。」

「はい、よろしくお願いします。」

「ところで早川君、まだ決まっていないので喜ぶのは早いんだが、もしアジュバントにレイコボリン／５－Ｆｕを施行したら何クール施行するべきだと思いますか？」

「はい先生、アジュバント症例に対してははっきりとしたエビデンスがないのが正直なところですが、私はたとえ手術によって取りきれたと思われる症例でも、相手が癌である以上は慎重を期して最良の治療が必要ではないかと考えます。レイコボリン／５－Ｆｕ　療法の進行・再発癌に対する開発治験プロトコールでは最低３クール施行した後に効果判定を行っていますので、やはり３クール施行すれば効果の見込まれる症例のほとんどに効果が確認出来る、すなわち癌細胞に対する殺細胞効果が表れる３クール施行するプロトコールが良いと思います。」浩輝は言葉をなるべく丁寧にゆっくりとそして自信を現した口調で関田に向かって訴えた。

「３クールだね」関田は浩輝に向かって確認し、浩輝が頷くとファイルの中の資料に何かを書き込んだ。

「関田先生、アジュバントにレイコボリンを入れていただく条件を教えてください。」

「早川君、そんなにハッキリ言ってもらっては困りますよ、僕の立場も考えてくれなくっちゃ。」関田は少しおどけた態度で冗談っぽく言った。

「すいませんでした。つい興奮してしまって…」浩輝は頭を下げた。

「まあ、はっきりいってレイダーさんはこの位でしょう。」関田が腕組みをした手で指を2本出して浩輝に見せた。」
「はい、解りました。」浩輝はこの試験の期間中（おそらく7年ぐらい）毎年２００万円の寄付金を要求されたのだ。
「関田先生、経口抗がん剤はもう何を使うかお決めですか？」
「うーん、そこなんだよ。普通ならＵＦＹなんだろうけど僕はフルチロンにしようかと思っているんだ。」
「成程、解りました。抗癌剤以外の薬剤、つまり制吐剤などはお決めですか？」
「制吐剤か、確かにこのプロトコールだと吐き気止めの制吐剤も必要だな、制吐剤は薬価も高いから競争も激しいよね。」
「ええ、その通りです。このプロトコールに入るか入らないかで今後の売り上げに大きく差が出ると思います。」
「制吐剤に関してはまだ決めていないので早川君の推薦する物でもいいですよ。」
関田はこの大学を担当するＭＲの中では非常に怖い存在として恐れられていた。それは実際今までに関田の逆鱗に触れてしまい、主要な薬剤の口座カット（口座カットとはその大学病院で使用する薬剤リストいから削除され、今後一切その薬剤はその大学病院で使用されなくなる事を指す）されたり、上司を呼び出されて直接厳しいクレームをつけられたりした事が1年に1回位の頻度であった事や、普段大学内での態度が非常にクールで笑顔を見せる事もなければ、廊下などで話しかけてもほとんどの場合相手にしてもらえないのだ。したがって、ほとんどの製薬会社のＭＲは関田を恐れていて薬に関するインフォメーションも行わず、医局前の廊下で見かけた際にあいさつする程度なのだ。
そうでなければ激しい製薬会社の口激によって抗癌剤や制吐剤だけでなく、点滴用の補液や抗生物質など、あらゆる薬剤が既に決まっていたはずである。
浩輝にしても今でこそ関田と親しく話を出来るようになっているが、

昨年のシンポジウム
の際に大阪で関田を様々な場所へ案内して、関田の意外な秘密を知るまでは他社のＭＲと似たようなものであった。

「関田先生、今度の自主研究はこの第一外科の関連病院全てで行われると考えてよろしいですね。」
「そう、北は北海道の帯広から南は茨城県の水戸までだが全部で５１病院ある。それらの関連病院全てにおいて大腸がんに対する化学療法は今回のプロトコールで統一されることになる。もちろん研究途中で１回、終了後に１回の計２回それなりの雑誌に論文投稿し、最終的にはＡＳＣＯ（アメリカ癌化学療法学会）で発表しようと思っています。」
「解りました、それでは先生は今回の自主研究に関連する製薬会社、おそらく５－６社になると思いますが、寄付金の合計はどれ位をお考えでしょうか？」
関田は黙って考えるふりをしながら組んだ腕の下から指を１本差し出した。
「それは１年間ですね、そして５年から７年それを継続するのが条件と考えてよろしいですね。」浩輝が尋ねると関田がほほ笑みながら言った。
「さすが早川君は物分かりがいいね、この手の交渉はさすがに僕や医局の関係者がする訳にはいかないからね、早川君にお願いしてメーカー間の調整をしてもらいたいんだよ。」
２人は再びコーヒーに手を伸ばすと先週行われた学会での演題などについて意見を交わし、浩輝が関田の部屋に入ってから１時間ほどした後浩輝は研究棟の外へ出てきた。
左腕のロレックスデイトジャスト・サンダーバードモデルに目をやると時間は既に午後２時を過ぎていた。
駐車場に停めてあったマツダファミリアに戻り、大学病院を後にすると１０分ほど車を走らせて支店に戻る途中にある蕎麦屋に立ち寄

り、軽めに昼食をとってから支店に戻ったのが午後３時を少し過ぎた頃であった。
浩輝は自分のデスクでＰＣに向かって先週の学会聴講報告を書く、しかし浩輝は裏ビジネスがあったので今回の日本消化器外科学会には実はあまり会場にいなかったである。まあ会場にずっといたとしてもあまり変わらないのだが、学会場で購入した抄録集を読みながら自社製品に関連がありそうな演題をピックアップして適当に報告書を作成していく。これは表向きの報告書であって、今朝支店長に報告した部分は別に作成していた。
浩輝の作った表向きの報告書は同じ支店内で回覧され本社に送付されるが、全社員向けには本社の学術担当者が業者に作成させた学会レポートが配布される予定なので浩輝は気軽にうその報告書を作成していた。
浩輝は１時間程度で報告書の作成を終え外出しようとしていたが、所長の岡本とまた一揉めした。それは、先週のように学会開催期間中に学会開催地でＭＲが医師を接待することは主要製薬会社で構成されている公正取引協議会で規定された公正競争規約で禁止されているのだ。だから支店長の大山は浩輝が関田たちを接待した際に掛かった経費を岡本に処理するように命じたのだが、浩輝が現地で助教授の関田や講師の吉岡と行ったステーキ店、キャバクラ、バーなどで使った領収書を岡本に差し出し合計金額である約３０万円を立て替えている事を告げると営業所長の岡本は浩輝に難癖をつけ始めたのだ。
最後には浩輝が医師との面会アポイントに遅れそうだと言い、これ以上何かあるなら支店長の大山に相談するとまで言って領収書の束を取り返そうとするとようやく岡本も折れて浩輝の経費口座に現金を振り込む事を約束した。ただし振り込むのは自分で経費精算してそれが会社から振り込まれる約１ヶ月後だと言った。
今夜岡本は、一人で国分町のなじみの店をはしごして白紙領収書を集めるのであろう。

再び立体駐車場から自分の拡張車であるマツダファミリアを出していると、そこに同じ白いマツダファミリアが入ってきた。
運転席のウインドウが下がり、車の中から運転していた男が声をかけてきた。
「やあ早川君、東京はどうだった？また楽しんできたんだろう？」
浩輝と同じ会社だが主に開業医を担当している宮城病診営業所の所長をしている鈴木の顔が見えた。
「鈴木所長とんでもありませんよ、もう毎日先生方の夜のお付き合いでくたくたでしたよ。おっとこれは内緒ですよ、ところで鈴木所長お顔が真っ黒じゃないですか？幾つで回ったんですか？」
「そっか、関田先生だな？相変わらずがんばってるねえ、僕の方は先週末１．５ラウンドやってね３９・４０・３８だったよ。」
鈴木は主な得意先が開業医なのでゴルフ接待が特に多いのだ。もちろん鈴木自身が大のゴルフ好きである事は言うまでもない。
「相変わらず安定したスコアでうらやましいですね。またご一緒する機会を作ってくださいよ」浩輝もたまにゴルフをする機会があり一時はレッスンスクールにも通っていたが東北医科大学の担当となると仕事が忙しくゴルフもあまりできなくなっていた。特に裏ビジネスの方が少しずつ忙しくなっていたのであった。
しかし、浩輝はこの鈴木とは妙にウマが合うのであった。年齢は１０歳違うのだが鈴木の穏やかな物腰や人に対する心遣いが浩輝には大変心地よく、別々の営業所ではあるが度々二人で酒を飲むのであった。
「それでは鈴木所長、お先に失礼します。」浩輝は駐車場から車を出すと表通りに向けて走らせた。
バックミラーの中で鈴木が何か言ったようだったが浩輝には聞こえなかった。
マツダファミリアのダッシュボードに埋め込んである時計は午後５時０３分を示していた。
本来であれば東北医科大学へ向かうのだが浩輝は反対の上杉方面に

車を向けた。
レジェンド上杉と大理石で作られたプレートに彫ってあるマンションの駐車場に自分の車を乗り入れてＰＣが入ったカバンを右手に下げ正面玄関に向かった。
正面玄関の最初の自動ドアを入った場所にあるセキュリティーボードで暗証番号を入力して内側にある２番目の自動ドアを開けた。
最近のマンションはどこもこの手のオートロックシステムを採用していた。
内側の自動ドアを入った右手にメールボックスがあり、浩輝は自分のメールボックスから中に入っていたダイレクトマールなどを取り出すとエレベーターに乗って１１階に上がった。
浩輝の部屋は１１階のエレベーターホール脇の１１０３号室だ。
鍵を開けて自分の部屋に入り、チェーンロックと鍵をかけた。
持っていた鍵束は下駄箱の上に放り出し、ポケットの小銭を掴み出して同じ下駄箱の上にある籠の中に放り込んだ。
ダイニングルームにあるダイニングテーブルの上にメールボックスから出した手紙を置くとベランダに面したカーテンを開くと、外はまだ少しだけ明るかった。
右手の寝室兼仕事部屋に入りパソコンデスクの上に仕事用のかばんをのせてスーツを脱ぐとシャワーを浴びた。
浩輝はシャワーで丹念に全身を洗い、バスローブ姿のまま冷蔵庫からトマトジュースの缶を取り出すと一気に飲み干した。トマトの酸味とわずかな塩味がとてもうまかった。
テーブルの上に置いておいた手紙をとって、今はソファにしてあるソファベッドに座りくつろいで１通ずつ目を通したが必要なものはなく、全てダイレクトメールであった。それらをすべてゴミ箱に放り込んだ。
洗面台に向かってドライヤーで髪をセットしてから軽くヘアトニックを付けた。
寝室でバスローブを脱いだ姿が姿見の鏡に映った。

浩輝は中学時代に陸上競技部に入っていたので太ももはボリュームがありウエストは締まっているが胸囲は１１５ｃｍもあった。首回りも４４ｃｍあり、スーツはもちろんワイシャツもオーダーして作っていた。
右膝には大きな傷跡が残り、背中一面に傷跡が多数残っていた。
チェストから出したシルクのボクサータイプの下着をつけ、白いＴシャツを着てからドッカーズのチノパンを履いてＴシャツの上に薄手のハイネックセーターを着た。
今度はロレックスのデイトナを左腕につけて財布を右の尻のポケットに突っ込むとブラウンのバックスキンで出来たショートブーツを履いて玄関を出た。
まだ少し肌寒い感じだったが、浩輝は汗をかきたくなかった。
駐車場では自分の自家用車であるトヨタのハイラックスサーフ（もちろんエンジンやサスペンションなど外観以外は浩輝自身がチューンナップしてあり、最高時速２８０ｋｍ／ｈに達するマシンに仕上げてあった）に乗ってマンションを出た。
浩輝はそのスペシャルハイラックスサーフを定禅寺通りに出して国分町の入口に一度止めて車を降りた。
国分町通りの入口にある花屋で５０００円分の花束を買い求めてから車に戻り、再びハイラックスサーフを走らせる。道路は夕方のラッシュで少し混んでいた。
浩輝は車列に並んで目立たないように車を走らせ、西公園の交差点を左に曲がって高速道路へ向かうバイパスを通り過ぎてから道なりに左にカーブして五ッ橋方面に向かった。
東二番丁通りの手前で右折するとすぐに第二内科教授秘書である目黒由紀子が住むマンションがあった。
このマンションは地上２４階建てで仙台では珍しいタワーマンションと呼ばれていた。
浩輝は来客用の駐車ロットにハイラックスサーフを入れると一度玄関脇のブザーを押して管理人に車のナンバーと訪問先である由紀子

のルームナンバーを告げた。
マンションの管理人は由紀子に確認した後、駐車許可証を持って玄関から出て来て浩輝のスペシャルハイラックスサーフのフロントガラスにその駐車許可証をワイパーで挟んだ。
「ありがとう」と浩輝が言うと中年女性のその管理人は少し顔を赤らめて「いいえ、どういたしまして。」と言った。
浩輝は車の中から先ほど国分町通りの入口で購入した花束を取り出し、管理人に開けてもらった玄関を通ってエレベーターへ向かう。
さすがにこれだけのマンションになると内部も豪華で、１階から最上階である２４階まで中央部分が吹き抜けになっておりその吹き抜けの周りを各部屋が並んでいた。
北側はエレベーターが４基並んでいて、吹き向け側がガラスでエレベーターの中が見えるようになっていた。
管理人は３交代制で常に２人おり、オートロックで外部からの不審者は一切入れなかった。また、１階には住人専用のコンビニエンスストアがあり、クリーニングや写真の現像、宅配サービスまで電話一本で済ませる事が出来た。
浩輝はその２４階建マンションのエレベーターに乗り２３階のボタンを押した。
最上階である２４階には住人専用の展望ルームと５部屋のパーティールームになっていた。
エレベータにはだれも乗っておらず途中で止まることもなく、２３階までスムースに移動した。
浩輝が２３階でエレベーターを降りると他のフロアは６－９部屋で１フロアなのに対しこの階だけは３つしか玄関がなかった。
その３つの玄関のうち左側（東側）の部屋が由紀子の部屋だ。
浩輝は由紀子の部屋の前まで行くと後ろを振り返って手すりから吹き向けの下を見下ろした。一番下の１階の中央には吹き抜けと同じサイズの池があった。
万が一、物が落ちた時に人に当たらないようにするため、吹き抜け

の下に人が入れないようしているのだ。
由紀子の部屋の表札には“目黒”とだけ書いてある。
浩輝が呼び出しのチャイムのボタンに手を伸ばした瞬間、突然玄関のドアが開いた。
「もう何やってるのよ、待ちくたびれたじゃないの！」と由紀子が勢いよく出てきた。
管理人から浩輝が到着した事を連絡されていたに違いない。
由紀子は薄いピンク色のブラウスにモスグリーンの膝丈のスカートを履き、パンティーストッキングは履いていなかった。
「ごめん、ごめん、こんなに高い場所は何か緊張しちゃうんで深呼吸してたんだよ」
浩輝は由紀子の眼を見ながらそう言うと、車の中から持ってきた花束を由紀子に差し出した。
由紀子は嬉しそうに花束を受け取って左手で抱えると、浩輝の後ろに回り込み、浩輝の背中を右手で押して自分の部屋に入った。
由紀子の部屋の玄関は畳で４畳分程あり左脇には下駄箱ではなくウォークインシューズボックスと言ってまだ珍しい靴専用の収納部屋になっていた。そこに由紀子はブーツだけでも５０足、ハイヒールやパンプスなど３００足程の靴を陳列していた。
玄関の天井も普通のマンションの１．５倍ほど高かった。
浩輝がその、かつて自分が学生時代に暮らしていたアパート程ある玄関でブラウンのショートブーツを脱ぎ玄関に上がると、後ろにいた由紀子が浩輝のショートブーツをきれいに揃え、自分のパンプスも脱いで浩輝のショートブーツの隣にきれいに並べた。
横幅がマンションとは思えないほど広いフローリングの廊下でイギリス製の不織布で作ったスリッパを履いて中に入ろうとした時、由紀子が後ろから浩輝に抱きついてきた。
浩輝からもらった花束は廊下の隅に置いてあった。
「ねえ浩輝さん、由紀子とても寂しかったわ」
由紀子がそう浩輝の耳元で囁くと、浩輝には由紀子の甘い体臭と透

き通った香水の香りが感じられた。
「僕もだよ、由紀子」浩輝は後ろを振り返り、そう囁くと由紀子の細い腰に両手を回して引き上げるようにして由紀子の唇に自分の唇を合わせた。
由紀子は自分から激しく舌を使って浩輝を貪るように求めてきた。
由紀子の豊満な胸の感触がセーターの上から浩輝の胸に伝わると、浩輝の凶器が反応を示した。
浩輝は3分以上そのまま由紀子の求めに答えながら片目を開いて、左手で由紀子の背中、腰、尻へとじらすように愛撫していくと由紀子の呼吸は乱れ、かわいらしい小鼻がピクピクと動いていた。
由紀子は自分で浩輝の手を自分自身の胸に押しつけて「ねえ、もう我慢できないわ」と目を閉じたまま浩輝の耳元で囁く。
浩輝は無言で由紀子を抱きかかえると広い廊下をまっすぐに進んでリビングルームのドアを開け、そのままリビングを突っ切ってリビング横の寝室のベッドの上に由紀子を運んだ。
由紀子は浩輝に抱きかかえられている間中、じっと眼を閉じたまま浩輝の首に両腕を回して動かなかった。
由紀子の寝室はまるでこうなる事を予想して準備してあったかのようにカーテンは閉じられ、ベッドサイドにあるライトの小さな明かりのみが灯っていて、ムードを盛り上げていた。
浩輝は寝室の中央にあるキングサイズのベッドのベッドカバーを足で器用に外し、上掛け蒲団の上にそのまま由紀子を降ろすと、再び由紀子と唇を合わせてブラウスの上から豊満な胸の感触を楽しんだ。
由紀子はブラジャーを初めから着けていなかった。
浩輝は唇を由紀子の耳たぶから首筋へと這わせながら、由紀子のブラウスのボタンを一つずつ丁寧に外していった。
由紀子も浩輝のセーターを脱がせ、その下のTシャツも脱がせた。
浩輝は由紀子のブラウスを床に落として、小さく色の薄い由紀子の乳首を口に含んだ。
由紀子は口から小さな声を漏らすと、少しだけ背中をそらせた。

浩輝は由紀子の乳首を口に含んで愛撫しながら右手をスカートの中に入れ、パンティーの上から由紀子の秘部に触れてみた。
パンティーはすでに限界まで水分を含んでいた。
パンティーの上端から指を入れて引き下げようとした時、由紀子は自ら腰を浮かせて浩輝に協力した。
浩輝の指が直接由紀子の秘部に筋に沿って触れると、そこはまるで洪水のように少し粘調度のある蜜で潤っていた。
指で由紀子の秘部を少しずつ開きながら愛撫し、唇を合わせると今度は浩輝の方から由紀子を激しく吸った。
由紀子は声を出して激しく喘いだ。
由紀子が浩輝のズボンのベルトに手をかけてズボンと下着をまとめて引き下げると、浩輝の凶器は既にいきり立ち、十分な硬度を保っていた。
由紀子は浩輝の凶器に触れ、思い切ったように口に含むと舌を使いながら自分で自分のスカートを脱ぎ棄てた。
由紀子に刺激されながら浩輝はしばらく枕の上に頭を乗せて由紀子の恥ずかしい姿を眺めていた。
由紀子が浩輝の凶器を咥えたまま視線を上げて浩輝と目を合わせた時、由紀子は自分から浩輝の上にまたがり、自分の手を添えて浩輝の凶器を自分の中へ迎え入れた。
初めは少し苦痛にゆがんでいた表情が、瞬く間に歓喜の表情へと変わってゆく。
浩輝は、はじめは由紀子の動きに任せていたが、体制を入れ替えて上になると、初めはゆっくりと浅く、時に速く激しく深く由紀子を攻め、そうやって約１時間かけて由紀子を可愛がり、最後は正上位で由紀子を上からきつく抱きしめたままたっぷりと注ぎこんだ。
由紀子は４度目の大波にさらわれ、そのままぐったりとして、意識が遠くなっていく自分を感じていた。
浩輝は由紀子から離れてベッドから降り、ティッシュペーパーを使って自分と由紀子の後始末を済ませて下着をつけ、キッチンの４０

ＯＬはあろう冷蔵庫の中からオレンジジュースのペットボトルを出すと食器棚からラージサイズのグラスを一つ出して、その中にたっぷりオレンジジュールを注いで由紀子のいる寝室へ持って行った。
由紀子は既に目を覚ましていて、浩輝と目が合うと恥ずかしそうに布団の中にもぐって隠れた。
「ジュース飲むかい？」浩輝は明るい声で由紀子の声をかけ隣にもぐりこんだ。
「ありがとう」由紀子は浩輝からグラスを受け取ると、半身を起してオレンジジュースを飲んだ。
半分ほど飲んだところでグラスを浩輝に渡す。
「浩輝さん、とても良かったわ。ねえ由紀子を愛している？」
「もちろん愛しているよ」浩輝はそう言い返すとグラスに残っていたオレンジジュースを一気に飲み干した。
浩輝からグラスをもぎ取るようにしてサイドテーブルに置いた由紀子が激しく唇を求めてきた。
浩輝は深く由紀子に答えてから身を離し、「さあ食事にしよう。今日は何を御馳走してくれるんだい？」
「もう、今日は水炊きよ！着替えるから少し待っていてね、下ごしらえは済んでいるから火にかければすぐに食べられるわ。浩輝さんも早く由紀子がこの間買ってあげたガウンを着てちょうだい」
由紀子はまるで女房気取りで浩輝に言った。
浩輝がガウンを羽織ってリビングにあるソファに座りくつろいでいると、由紀子がエビスビールの瓶と冷蔵庫の中で冷やしておいた先ほどと同じラージグラスを２個持って来て、浩輝の前に置き２つのグラスにぴったりとビールを注いだ。
「乾杯！」浩輝と由紀子は軽くグラスを合わせて良く冷えたビールで喉を潤す。
浩輝はグラスいっぱいのビールを全て飲み干した。
由紀子はグラスの中のビールを３分の１ほど飲むとグラスを応接セットのテーブルの上に置いて瓶の中の残りのビールを浩輝のグラス

に注いだ。
浩輝のグラスの半分ほどでビールが無くなった。
由紀子は「もう1本持ってくるわ」と言って台所へ向かい、直ぐにビール1本と仙台名物の笹かまぼこと長茄子漬をお盆に載せて戻ってきた。
それらを応接セットのテーブルの上に移して、ビールの栓を抜き浩輝のグラスへ注ぐと「すぐ支度するからこれを食べてまっていてね」と言って再び台所へ消えていった。
浩輝は由紀子を我儘に育った２１歳のお嬢さんの割には以外としっかりとしつけられている様だといつも感心させられていた。
由紀子の実家である目黒家は仙台の名士であった。
由紀子の父親は東北最大の地方銀行である八十八銀行の頭取で、将来県知事になろうかという人物であり、母親は仙台の老舗デパートである藤吉デパートの社長令嬢であった。
由紀子の父親である目黒正造は東北医科大学医学部第二内科教授服部徳久と仙台一高時代の同級生であり、東京の短大を卒業してそのまま東京で就職したと言った由紀子を無理矢理仙台に連れ戻して服部の第二内科で教授秘書として就職させたのであった。
由紀子には３５歳の兄がいるが、正造は年をとってから出来た由紀子が可愛くて、小さいころから溺愛し、由紀子が東京にいた2年間に５０回以上出張と称して東京を訪れていた。
由紀子が東京での就職を切り出した際にも、正造は絶対反対を貫き通し、このマンションを買い与えて由紀子を仙台に連れ戻したのであった。
由紀子は最初のころは不満感を表に出していたが、実際に教授秘書として仕事をしてみると以外と面白いと感じるようになっていった。
由紀子が短大時代に身に付けた英語が大いに役立ち、海外での学会や講演会などから医局員の留学や学術文献の手配など全てに英語が必要であった。
最初の半年は専門用語に慣れなかったが、今では海外からの電話は

全て由紀子が取り次ぐようになっていた。
また、由紀子が目黒家の人間であり、目黒正造の娘である事を医局内や大学医学部の関係者で知らない者はいなかったのでいつも丁寧に扱われていた事も気分が良かった。
特に上司である服部教授はとても紳士的でやさしかった。
今の由紀子は広いマンションで自由気ままな一人暮らしを楽しみながら仕事も充実しており、何より浩輝という恋人に夢中で、これまでの人生で一番の幸せを感じていた。
浩輝が2本目のビールを飲み終えた頃、由紀子が鍋の支度が出来た事を浩輝に告げた。
浩輝はソファから腰を上げ、畳に直せば３０畳はあるリビングから、１０畳ほどのダイニングルームに移った。
そこには8人掛けの大きなダイニングテーブルがあり、テーブルの上には今にも吹きこぼれそうな土鍋がカセットコンロの上で湯気を吹き上げていた。
巨大なテーブルの中央に浩輝が買ってきた花が花瓶に移されて飾ってあった。
「ねえ浩輝さん、お酒は何にする？」由紀子がエプロンを外しながら浩輝に聞いた。
「そうだなあ、スコッチの水割りにしようか」浩輝がそう答えると由紀子も「じゃあ私もスコッチにしよう」と言って氷とボルビックのペットボトルを冷蔵庫から出して用意しながら浩輝に「ウイスキーを出してくださる？」と浩輝に言った。
「いいとも」浩輝は由紀子に返事をしながらリビングルームのサイドボードの中にある数本の高級ウイスキーの中から、ジョニーウォーカーのブラックラベルを取り出してダイニングルームに戻った。
サイドボードには正造が持ってきた大量の高級ウイスキーがあるが、浩輝はこのジョニーウォーカーのブラックラベルが好きで由紀子がいつも用意しているのであった。
浩輝と由紀子は巨大のダイニングテーブルの正面に2人横に並んで

座り、浩輝が2人分の水割りを作っている間に由紀子が浩輝と自分の小鉢にポン酢や刻んだネギなどの薬味をいれて水炊きの具を移していった。
「じゃあ、あらためてカンパーイ」由紀子が少しはしゃいだ様子で水割りのグラスを浩輝に差し出すと、浩輝も「カンパイ」と言って自分のグラスを差し出して、美しい由紀子の笑顔を見ながら冷たいスコッチの水割りを口に入れた。
浩輝は時折唇を合わせたりしながら、由紀子の作った水炊きを食べ、大学病院での出来事などを話す由紀子に相槌を打っていた。
スコッチの水割りを5杯飲んだところで浩輝はオンザロックに変えて飲み始めた。
鍋の具が無くなった後に雑炊を作って、それを食べて日本茶で食事を締めくくった。
空腹を満たした2人はリビングに移って巨大な画面のプラズマテレビで有料放送の映画を見ながら、由紀子が用意したデザートのオレンジと夕張メロンを食べながら今度は正造が持ち込んだ高級ブランデーを楽しんだ。
若い由紀子はそうでもなかったが、浩輝は一般のテレビ番組が好きではなかった。
特にお笑い芸人が安いタレントと一緒にゲームをしたり、クイズをしたりして失敗した者を笑うようなバラエティー番組や、法外な賞金を餌に一般の視聴者に何かやらせるような番組は馬鹿にされている様でとても見る気にならなかった。
浩輝はたまに一人でいるときは本を読んでいたり、体を鍛えたりしていた。
女と二人のときはそうもいかないので、映画を見るようにしているのだ。
映画を見ながら二人はお互いにフルーツをお互いの口に運んで食べさせたり、ブランデーを口移しに飲んだりして夜を楽しんだ。
映画が終わる前に由紀子は自分が着ていた服を脱ぎ、浩輝の下着を

取って浩輝の股間に顔を埋めた。
浩輝もテレビの電源をリモコンで切ると、由紀子を再び抱き上げてベッドルームに運ぶ。
由紀子と浩輝の二人は再び甘い陶酔の世界に入り込んだ。

午前5時、目覚まし時計なしで浩輝は体内時計の力で目を覚ました。
浩輝は過去の忌まわしい体験から、何時に起きなければいけないかを強く意識することで、ほぼ正確に目を覚ます事が出来るようになっていた。
由紀子は浩輝の腕枕の上でまだ可愛い寝息を立てていた。
浩輝は由紀子を起こさない様にそっと腕を抜いてベッドから出ると、自分が着てきた衣服をつけてから、まだ昨日のブランデーグラスとフルーツ皿が残っているリビングルームに移り、応接セットのテーブルの上に“楽しかったよ”と書いたメモをフルーツ皿で挟んで残して由紀子の部屋を出た。
マンションの1階に下りると昨日会ったのとは別の管理人が受付カウンターで居眠りをしていた。
浩輝は音を立てず駐車場に出ると、まだ外は暗く気温も5度しかなかった。
浩輝は自分のハイラックスサーフに乗りエンジンをかけてからワイパーに挟んであった駐車許可証を外してマンションに戻り、管理人室と書かれたポストにそれを入れた。
表通りにハイラックスサーフを出した浩輝は全ての窓をパワーウインドウで開けて、仙台の早朝の空気を胸一杯に吸い込んだ。
そしてまだほとんど車の走っていない東二番丁通りを自分のマンションに向かって車を走らせた。
左腕のロレックスデイトナは午前5時25分を指していた。

第3部　完

サーキット

４．サーキット

昭和５８年（１９８３年）４月、埼玉県秩父にある美の山公園で早朝のワインディングロードを楽しんだ早川浩輝は、途中で友人の松本洋二とそばを食べてから自宅がある埼玉県新座市へ帰ってきた。空はすっきりと晴れ、早朝の寒さが嘘のようにまるで初夏を思わせるような天気であった。

浩輝はまっすぐ自宅へ帰る気にはなれず、行きつけのバイクショップである土屋オートに立ち寄った。

土屋オートは元々小さな自転車店であったが、折からのスクーターブームに乗って５０ｃｃスクーター、いわゆる原付を売ったり、パンクなどの修理を請け負ったりで大きな収益を上げた。

さらに自転車店を経営していた土屋和夫の長男である土屋和弘が、モトクロスレースの国際Ａ級ライダーとして活躍していたが、３５歳を過ぎて優勝する事が出来なくなり、ＹＡＭＡＨＡのファクトリーライダーとしての契約も解除された事から現役レーサーを引退して家業の自転車店を継ぐことになった。

そこで元の自転車店の向かいにあった空き地、約７０坪を買い取って中規模のオートバイショップを始めたのだ。

少し前までは社長の土屋和夫は自分自身もすでに６５歳を過ぎていて、早く自分の後を継いで欲しかったが、長男の和弘はモトクロスレースに夢中になり、しかも努力と才能によってレース界で成功したため小さな自転車店になんか全く興味を示さなくなってしまった。

しかし、レースの世界は無情で、デビュー以来世話になっていたＹＡＭＡＨＡが和弘との契約を解除すると通告してきて、これは後でわかった事だが和弘のライバルとして注目され始めた若い別のライダーとファクトリー契約を結んだのだ。

和弘のＹＡＭＡＨＡファクトリーレーサーとしての人生に終止符が

打たれた。
和弘に残された道は、他のメーカーのテストを受けて移籍するか、プライベートライダーとして自費でレースを続けるか、引退するかのいずれかであった。
和弘は若い頃からわが子のようにかわいがってもらったＹＡＭＡＨＡを裏切るような事が出来なかったし、プライベートで国際レースに参戦してもマシンの絶対的な差で勝てるとは思えなかった。
そんな時に長女が生まれ、和弘の父親であり土屋オートの社長である土屋和夫から自転車店の向かいにある菓子店が店をたたんでその土地７０坪を売りに出す事、さらにこれまで和夫がコツコツと貯めた金と最近のスクーターブームで儲けた金でその土地を買い、中規模のバイクショップを開店させ、２階に和弘夫妻のための住居にする事を聞かされ嫌とは言えずモトクロスレースから引退し、家業を継ぐ事を決めたのであった。
今でも土屋オートの壁際には、和弘が現役で活躍していた時代のシャンパンシャワーの写真や多数のトロフィーなどが飾られていた。
浩輝はそんな和弘に親しみをこめて、他の客と同じ様に「わこうさん」と呼んで、エンジンのチューンナップ方法やマシン全体のコーディネートについて、いつも相談していた。
浩輝は早朝通った道を逆に走って土屋オートに向かった。
土屋オートに近づくとエンジンの回転数を抑えて出来るだけ静かにスペシャルＲＺを走らせた。
店の前にある赤い大きなＹＡＭＡＨＡの看板が見えてきた。さらに店に近づくとホンダやスズキ、カワサキなどの看板や幟が見えた。
店の表側には赤や白、青など色とりどりのスクーターが歩道にはみ出す様に並べられていて、何人かの客が品定めしているように見えた。
浩輝は静かに自分のマシンを走らせ、土屋オートの裏側にある、修理途中のバイクや客が乗ってきたバイクを一時的に置く事が出来る駐車スペースに自分のＲＺ２５０改を頭から突っ込んだ。

浩輝と顔見知りの店員の井浦と矢口が客のバイクを修理スペースの中でエンジンを降ろして修理していた。
「あれ、浩輝また学校サボったのか？」井浦が浩輝を見つけて声をかけた。
「何言ってんですか井浦さん、まだ春休みですよ」
浩輝はヘルメットの顎紐を外し、マシンのエンジンを軽く空ぶかししてから止め、土屋オートの裏にある修理スペースから店の中へ入って行った。
「わこうさん、こんにちは」
「よう浩輝、今日はまた早くから出たなあ、どこまで行ってきたんだ？　奥多摩か？秩父か？」和弘は店のレジの脇で書類を書きながら浩輝に言った。
「えっ、今朝出て行ったのが解ったんですか？結構早かったのに！」
「バーカ、お前のマシンの音で目が覚めたんだよ！調子よさそうな音出てたな、シリンダーから上は新しいのだから少し抑えて走れよ。」
和弘は人懐っこい笑顔を見せて浩輝にそう言うと、書類に目を戻した。
「今日は秩父の美の山へ行ってきたんですよ。あそこは車や他のバイクも少なくて結構楽しめますね。奥多摩は最近変な連中が多くて走り難くなっちゃったから…」
「何言ってんだよ、お前もその変な連中の一人なんだぞ、まあそこは途中に民家が無いだけマシか！ところでお前先週秋が瀬のスクーターレースに出ただろう？」
「えっ、なんで知ってるんですか？」浩輝は驚いた。
「なんでじゃないよ全く、ＹＡＭＡＨＡの奴に写真見せられたら、メットの色で直ぐお前だって分ったよ。何で優勝したのに表彰式すっぽかして逃げたりしたんだよ。優勝者がいないんで大変だったらしいぞ。」
「いやあ、スクーターで優勝してもちょっとね、なんだかスクータ

ーでマジに走るのって恥かしいというか何というか…それで表彰式に出ると顔が出ちゃうんで逃げちゃいました。」
浩輝はペロッと舌を出しておどけて見せた。
「お前ＹＡＭＡＨＡのＪＯＧで出たみたいだけど一体だれのバイクなんだ？」
「ああ、あれは友達のを借りたんですよ。」
「借りたって云ったって写真ではほぼノーマルだったじゃないか。」
「そうですよ、少しだけいじったけどほぼノーマルのまんまですよ。えーっとエアフィルター抜いてキャブいじったぐらいかなあ、後半はブレーキが利かなくって大変でしたよ。」
「当たり前だ！あんなドラムブレーキでレース走ったらあっという間にホイールの内側がガタガタになっちまうだろう、それにタイヤだってボロボロだろう」
「そうそう、だから返す前にホイールの内側はやすりで削っときましたよ、それでブレーキは少し利くようになりましたよ。タイヤの方はどうしょうもないんで新しいのを買いましたけどね。」浩輝は秘密がばれてしまったんでバツが悪かった。
「しかし、お前が出たのはスペシャルクラスで他のはバリバリの改造車だったんだろう？」
「ええ、いろんな改造車がいましたねえ、スクーターばかりではなくて、ＲＺ５０の改造車もいましたよ、でも大して速くなかったですよ。でも凄い強敵がいて僕は中盤まで３位だったんですよ。ラストで相手がスタミナ切れで僕が勝てたんですけどね。その強敵って誰だったか解りますか？」浩輝は和弘に聞いてみた。
「知ってるよ、青木と桃子ちゃんだろ。」
「知っていたんですか？わこうさん！」浩輝は驚いた。
「お前なあ、先週のレースに出たのは青木健太郎ていって長男だけどな、下にまだ二人弟がいるんだよ、こいつらも早いぞ。それに桃子ちゃんはな女の子だけど歩くより先にポケバイに乗ったっていう程の子だよ！みんな小学生だけどポケバイレースでは大体この４人

のうち誰かが優勝するんだ。」
「そうだったんですか。しかし小学生は反則ですよ！５０ｃｃのスクーターですからねえ、体重差がもろに影響しちゃってあいつらの加速にはついていけませんよ。」浩輝は大げさに言った。
「はっはっは」和弘が笑い「それでもな浩輝、あいつらがスクーターだったからお前は勝てたんだぞ、もしポケバイだったらとてもかなわないぞ！」
「えーっ、ポケバイってそんなに早いんですか？」
「あたりまえだよ、ポケバイはな車体重量が軽いうえに乗り手も軽いんだぞ、しかも重心が低くてバンク角も深いからスクーターじゃあ手も足も出ないだろうなあ。」和弘が笑いながら言った。
「へえ、そうなんだ。でも僕はもうスクーターレースに出るのは止めるからいいや。」
「そうしろ、ＹＡＭＡＨＡもノーマルスクーターに改造車が負けたんじゃ格好がつかないから次からは、スペシャルクラスにノーマル車は出れないようにするって言ってたしな。」
「なんだそれ、変な話」
「まあそう言うな、高い金掛けて改造している連中の身にもなってやれよ。」
「はいはい」浩輝は少し投げやりな態度で言った。
浩輝は店の中央にある円形のテーブルの上にヘルメットを乗せて椅子に腰かけた。
「こら浩輝、また朝からうるさいバイクでうちの前を通ったね！大事な娘が起きちゃうからここは通るなって言っただろ！ほらコーヒー飲んだらさっさと帰って勉強しなさい。」
和弘の奥さんの朋子さんが、浩輝の後ろからコーヒーをテーブルの上に置きながら、まるで母親のような口ぶりでおどけながらそう言った。
浩輝はこの店に愛車であるスペシャルＲＺ２５０のチューニングパーツ代やオイル代などツケがたまっている事もあって、この朋子に

はどうしても頭が上がらないのであった。
「朋子さんありがとうございます。おいしいコーヒーいただきます。」浩輝は店中に聞こえるような大きな声で朋子に礼を言った。
店のあちこちからクスクスとした笑い声が聞こえた。和弘はあきれ顔であった。
その時、客のバイクを修理していた店員の井浦が浩輝のそばに来て
「浩輝、お前のＲＺ　タイヤがもうヤバいぞ」と言った。
「うん、解っているよ、今日が最後だと思っていたんだ。でも、もうすぐ学校が始まるし、バイト代も来週まで入らないからもう少しだけこのまま我慢しとくよ。ありがとう井浦さん。」
浩輝は金さえあればすぐにでもタイヤを交換したかったが、金が無いので唇をかんだ。
「井浦君、浩輝のタイヤ交換してやれ、バトラックス入れてやっていいぞ。」和弘が伝票から目を離さず井浦に向かっていった。
「えっ、わこうさん　いいんですか？僕は今、払う金がありませんよ」
「浩輝、商売べたなわこうさんの気が変わらないうちにさっさと取り替えちゃいな。まったくいつもこれだ。」朋子があきれ顔でそう言った。
「浩輝、お前が事故ってうちの借金が取っぱぐれたらそれこそ夜逃げだ、浩輝よ、タイヤだけは我慢するな、本当に命取りになるんだぞ。」和弘は最後は自分自身に言い聞かせている様な口調であった。
「わこうさん、ありがとうございます。」浩輝は立ち上がって和弘に礼を言うと深々と頭を下げた。
朋子は「もう」とだけ言って2階の住居スペースに上がっていった。
「井浦さん、交換手伝わせてください。」
浩輝はパッと明るい表情に戻って井浦と一緒に修理スペースの中に自分のスペシャルＲＺを押しいれた。
和弘はそんな浩輝の姿をほほ笑みながら見ていた。
浩輝と井浦がタイヤ交換を終えた時、時刻はすでに午後1時になっ

ていた。
朋子が2階の住居スペースから下に降りて来て「食事が出来たよー」と皆を呼びに来た。
「浩輝、あんたも一緒においで。」朋子はわざと冷たい口調で浩輝に向かっていった。
「わー、うれしいなあ。朋子さんのおいしい料理が食べられるなんて夢みたいだ。」浩輝はわざと大げさに叫んだ。
井浦が「わこうさん、僕こっちを先に片づけちゃいたいんで先に食べてください。」と言ってまた別の客のバイク修理に取り掛かった。
「井浦君、悪いけどそうさせてもらうよ、ほら浩輝も早くしろ、おーい矢口君、飯にするぞ！」和弘はそう言うと浩輝を先に階段を登らせて2階へ上がった。
「はいタオル、ちゃんと手を洗ってよね。」朋子がタオルを用意して洗面所で待っていた。
「すいません、いつも甘えてしまって」浩輝は工業用の石鹸を両手にこすりつけて手に付いた油汚れを落としながら恐縮した。
「何それ、遠慮した様な口きいて、いつもの事だろ。わこうさんの家で遠慮はするな、でも店は別だぞ、金は返せよー」浩輝を睨むように朋子が言った。
和弘と店員の矢口も手を洗ってから、それぞれダイニングテーブルについた。
「今日のお昼は中華ですよ。」朋子はベビーベッドで寝ている愛娘の望ちゃんに向かってそう言うと、両手で焼きそばを盛った大皿を持って来た。
浩輝は台所からチャーハンが盛ってある大皿と餃子の大皿を持って運び、矢口がわかめスープを鍋からお椀によそっている間に和弘はチャーハンを取り分けていった。
「いただきまーす」皆が一斉にそう叫ぶと後はいつものように無言でしかも凄い勢いで食べ始めた。
朋子が井浦の分を先に取り分けておかなかったら、間違いなく井浦

の分まで食べてしまうことだろう。
全ての皿が空になって、朋子がいれてくれたお茶を飲み、浩輝と矢口は、娘の望を抱いた和弘を2階に残して先に1階へ降りていき、井浦と交代した。
浩輝はしばらく矢口と一緒に、納車前のスクーターにバックミラーやかごを取りつける仕事を手伝った。
2階から降りてきた和弘が浩輝に話しかけた。
「浩輝、今度うちで筑波の走向会をやろうと思うんだけど走ってみるか？」
和弘の言った“筑波”とは筑波サーキットの事である。
筑波サーキットは茨城県結城郡に１９７０年（昭和４５年）に財団法人日本オートスポーツセンターによって開設された全長２０７０ｍ（二輪コース）からなる、首都圏に位置する日本を代表するサーキットである。
「本当ですか？絶対走ります！でも僕サーキットのライセンスを持っていませんよ、それでもいいんですか？」浩輝は興奮が抑えられない表情であった。
「もちろん貸し切りだから心配いらないよ、保安部品にテープ貼ってもらわなきゃいけないけどライセンスは要らないよ。」和弘もうれしそうであった。
「いつやるんですか？あと参加費はいくらですか？」浩輝が聞くと
「実はな、今筑波の貸し切り予約は大人気で全然取れないんだが、7月に予約していたショップが倒産してキャンセルになった枠があるんだ、それをうちで使わないかってＹＡＭＡＨＡの営業から話があったというわけさ。だから参加費はもらうけど別に商売でやるわけじゃないから儲けは無しで、３０人位集めたとすると一人５０００円位だな。」
「すごく安いじゃないですか、雑誌の広告だと大体一万円から一万五千円ぐらいしますよ、五千円で走れるなら絶対行きます。」浩輝はきっぱりと言い切った。

「よし、浩輝エントリーしておくぞ、バイト代が入ったらすぐ参加費払えよ、それからお前は未成年だから一応お袋さんにハンコもらって来てくれ。」
「わかりました、来週持ってきます。うわー夢みたいだ。平が走った筑波が走れるなんて。そうだ、今月号の月刊モーターサイクリスト誌に先月筑波で行われた全日本グランプリの特集が載っていたな、確かコース図のほかにライン取りの見本もあったはずだ、こうしちゃいられない早く帰ってチェックしなくっちゃ」浩輝は油の付いた両手を店の外の水道で工業用の石鹸を使って洗い流して、和弘たちへの挨拶もそこそこに自分のスペシャルRZにまたがるとエンジンをキックスターターでかけ、ヘルメットもかぶらず手にかけたままで店を後にして自宅に向かった。
浩輝は急いでいたので静かに走る事を忘れていた。土屋オートの2階の窓から「こらー、浩輝、うるさいって何度言ったらわかるんだー」と朋子が叫んだが浩輝には全く聞こえず土屋オートの店内で大爆笑が起こった。

浩輝の父親は元は新聞記者をしていた。ベトナム戦争の取材がきっかけで浩輝が小学校の時にフリーのジャーナリストになり、中東や南米など戦争地帯への取材が仕事となった。
そのせいで、浩輝には父親が家にいた記憶がほとんど無かった。しかし、浩輝が小学校から中学校時代には浩輝の家庭は裕福であった。浩輝が中学3年の夏休み、中東へ取材に行った父親が宿泊していたホテルに荷物を残したまま行方不明になったとの知らせが届いた。それから浩輝の父親に関する情報は何一つ無く2年たった今も行方不明のままであった。
死亡したのか解らないので生命保険金もおりず、現在は母親がパートタイムで働きこれまで蓄えた貯金を取り崩しながら浩輝と2歳年下の妹を養っていた。
しかし、浩輝はこの時そんな母親の苦労など少しも感じていなかっ

た。
浩輝は心の中で裕福だった暮らしが少しだけ貧乏になっただけさ、と思っていたが、浩輝はまだ本当の貧乏がどんなものであるか解っていなかった。
自宅に戻った浩輝は、玄関に履いていたブーツを脱ぎ棄てて急いで２階の自分の部屋に入った。
昨夜寝る前に読んで、そのままベッドの脇に置きっぱなしにしていたモーターサイクリスト誌がそこにあった。
革のツナギを脱ぎハンガーにかけてから、スウエットパンツとＴシャツ姿でベッドに横になって目当ての筑波サーキットで行われた全日本グランプリの特集記事のページを開いて読み始めた。
今までは何んとなく眺めていたサーキットを走るグランプリライダー達の姿やサーキットの様子が、自分が実際にそこを走るとなると様々な疑問が湧いてきた。
まず浩輝がいつも走っている峠道とは比べ様がない程道路幅が広く、対向車などはいないので道幅いっぱい使ったコーナーリングが可能な事や、セーフティーゾーンがあるので転倒しても一般公道に比べれば安全性が確保されている点、さらに記事によればサーキットの路面は特殊な舗装がされていて一般のアスファルトよりグリップがいい点などから、写真に写っているグランプリライダー達はレース専用のマシンに乗っている事もあるのだが、いつ転倒してもおかしくない位にマシンを寝かせてコーナーリングしている。
浩輝のスペシャルＲＺもシートの中のスポンジを抜いて重心を低くするとともに、バックステップといって、ノーマルのポジションではマシンを寝かせてコーナーリングする際に邪魔になるステップを、後輪ブレーキやギアのシフトペダルと一緒に後方上部に移動するパーツをつけてバンク角を稼いではいるが、サーキットのグランプリマシンには及ばない。
浩輝はコース図を眺めながら、こんな広いところを走るのであればもっと最高速度を上げる必要があると感じていた。

その後しばらく浩輝は、早朝に奥多摩や正丸峠、美の山公園やあまり時間が無い時には戸田ボート場の脇や西武球場裏のお伽電車コースへ出かけていき、スペシャルＲＺで走り込んでいた。
そしてアルバイトの帰りには毎日土屋オートに寄り道して、閉店した店の中で和弘と一緒にスペシャルＲＺのポートを広げてみたり、キャブレターのジェット交換をしたりして少しづつマシンを仕上げて行った。

昭和５８年（１９８３年）７月、浩輝は筑波サーキットのパドックにいた。
午前中のスポーツ走行終了後、午後のスポーツ走行が開始されるまでの１時間が土屋オートの貸切走行会の時間であった。
今はまだ午前１１時なので午前中最後のノービスクラスのスポーツ走行が行われていた。
ノービスクラスとは、レース初心者とも言うべきクラスの事ではあるが、当時は空前のオートバイレースブームであり、ノービスクラスのスポーツ走行券を手に入れるためには、発売日の前日から唯一の発売場所であるサーキットのパドックまで来て順番を取り、そのままパドックで一夜を明かさなければならないほど混んでいた。
そうして何回もスポーツ走行を繰り返してマシンとライダーを仕上げていき、ノービスクラスのレースにエントリーして予選を潜り抜け、決勝で入賞してポイントを稼ぐとようやく国内Ｂ級ライセンスが入手できる。
国内Ｂ級と言っても当時のレースは国内Ａ級と国内Ｂ級は混走レースだったので実質国内Ａ級ライセンスと同じである。
浩輝は激戦のノービスクラスだから速いライダーが大勢いると考えて、少し早めに筑波へやってきて速いライダーのテクニックを盗もうと思っていたのだ。
しかし、いざノービスクラスの走りを見ても浩輝には少しも速そうに見えなかった。

むしろ、「なんだこりゃ」と思う様な、まるで動くパイロンと言った方が良いような連中が大勢走っていた。そんな連中でも皮ツナギの背中に“ナラシ”とガムテープで書いて、エンジンのならし運転の為（ほとんどは言い訳かもしれないが）速く走れない事をアピールしているのましな方だった。
そのほとんどは恰好だけ超一流ライダーであるにもかかわらず、筑波サーキットの１周ラップタイムが１分３０秒以上で走り、スピードも出ていないのに無理してマシンを寝かせて無茶苦茶なラインでコース幅いっぱいに走ったり、後ろから来る速いライダーの邪魔をしてストレートだけ全開にスピード出しながらコーナーのはるか手前でブレーキをかけて、後ろに付いているマシンが追突しそうになったりしていた。
少し速そうに見えるライダーのラップタイムを持参したストップウオッチで計測してみたところ、素晴らしいタイムで走っている事が解った。
しかし、そんな素晴らしいラップタイムで走っているライダーであっても、浩輝は自分ならもっとブレーキングポイントを後ろにずらす事が出来るし、加速時のアウトラインももっとコース幅いっぱいに取る事でアクセルを開ける事が出来ると考えながら、最終コーナーや第一ヘアピンを走るライダーを観察していた。
スタート－ゴールラインにあるオフィシャルポストの上で係員がノービスクラスのスポーツ走行終了を告げるチェッカーフラッグが振られると、各コーナーの監視ポストの係員も一斉にイエローフラッグを振って終了を合図した。
コース上を走っていたライダー達が最終コーナーの入口にあるピットロード進入口からピットロードを通ってパドックに戻ってきた。
サーキットのクレーン付きの牽引車がコースを一周して、故障や転倒で自走不能となったマシンを回収してパドックに戻ると、いよいよ浩輝たちが走る土屋オート主催の筑波サーキット走行会だ。
参加者は３０人位と思っていたが、実際には５０人にまで増えてい

た。その中には浩輝の友人である松本洋二の姿もあった。
サーキット走行上の注意事項などは事前に配布された資料で参加者全員が解っているはずであったが、わこうさんから再度注意事項の説明が始まった。
「えー、みなさんいよいよコースを走っていただきます。この走行会はスポーツ走行ではありません、したがってレースに出るつもりで走っていない人が多いという事を理解して走行してください。速く走る必要はありませんので安全に走行しましょう。しかしながらここはサーキットです。自分は速くないと理解している人は後ろから来るライダーに気をつけてアウト側を走行してください。コーナーでもアウト側を走行してください。それから、イエローフラッグが振られた時は追い越し禁止ですから、前のマシンの後ろについて走ってください。本日は私の後輩で現在ＹＡＭＡＨＡファクトリーライダーとして２５０ｃｃクラスで走っている平田忠夫君が来てくれましたので、最初の３周だけ皆さんの先頭で走ってもらいます。最初の１周は皆さんと同じペースでゆっくりと、２週目はだいたいノービスクラスのスピードで、３周目はタイヤも出来上がりますから、平田君のスピード、つまり国際Ａ級のトップライダーのスピードで走ります。無理に付いていこうなんて考えない方がいいですよ。最後にゴールポストでチェッカーフラッグが振られると、各コーナーポストでイエローフラッグが振られます、これで今日の走行会は終了になります。イエローフラッグが振られていますから追い越し禁止です。前のマシンの後ろに続いて最終コーナーを回らずにピットロードに入ってください。なお、ピットロードのイン側にはガードレールが３段に貼ってあって視界が悪いうえにカーブがきついので十分に減速してゆっくり走るようにお願いします。それから浩輝、こっち来い」
和弘が突然浩輝に向かって手招きをした。浩輝が和弘の前に行くと、
「みんさん、こいつはこの中で一番のやんちゃ坊主ですからもし近くに来たらよけてください。マシンは青いＲＺです。転倒に巻き込

まれたら損しますからね！」
緊張していた一同が大爆笑して場がほぐれたが浩輝だけは憮然としていた。
「さあ、準備してください。パドックオープンです。」和弘が叫ぶと皆一斉に自分のマシンに走って行った。
浩輝も自分の愛車であるＹＡＭＡＨＡ　スペシャルＲＺ２５０改３５０にまたがり、ヘルメットを着けて顎紐をいつもよりきつく締めてから両手に皮のグローブをはめて、手首のマジックテープでこれもいつもより強めに締め付けた。
土屋オートのワゴン車に井浦や矢口など数名を乗せてから和弘が運転して先にコース内に入り、各監視ポストに監視員として降ろしていった。
貸切の走向会の場合、サーキット側からスタッフは出ないので、自分たちで全て用意する必要があるのだ。
和弘が運転するワゴン車がピットロードからパドックに戻ってきた時、浩輝の眼に間違いなく何度も雑誌で見て知っているヘルメットを持った平田忠夫とメカニックが押すＲＺ３５０が映った。
浩輝はてっきりファクトリーマシンに乗った平田と走れると期待していたが、どうやらマシンはノーマルのＲＺ３５０のようであった。
浩輝はまだファクトリーマシンとＡ級ライダーの実力を知らなかったので、なんだ平田に勝っても誰も驚かないやと思って悔しい気持ちになったが直ぐにその自分の考えが甘い事を思い知ることになる。
和弘が皆に平田を紹介し、ヘルメットを付けた平田がぺこりと頭を下げると、メカニックマンが支えていたＲＺ３５０にまたがり、キックスターターでエンジンをかけると直ぐにピットロードへ向かって走って行った。
まだ走ると思っていなかった数人があわてて後を追うと、浩輝はピタリと平田の後ろに自分のマシンをつける事が出来た。
ピットロードから第一コーナーをインベタで回り、ゆるいＳ字カーブを抜けて第一ヘアピンへ進入していった。

平田の走りはまるでツーリングでもしているかのようで、参加者全員が後をついて来ていた。
平田はコーナーを抜けるたびに首を回して後続の様子をうかがいながら、ハングオンスタイルも見せず、コース幅の半分程度でマシンを走らせていた。
先頭の平田のマシンは1周目の最終コーナーのクリッピングポイントからアクセルをワイドオープンしてメインストレートを一気に加速し第一コーナーへ向かった。
浩輝はその平田の後ろ約１５ｍで同じようにアクセルを開けて平田を追っていった。
メインストレートの後半から平田はマシンを左に寄せて第一コーナーの侵入へ向かいながら後ろを振り返ると、数台のマシンが追ってくるのが見え、その先頭に浩輝の青いマシンを確認した。
平田はヘルメットの中で「あいつか、わこうさんが言っていたやんちゃ坊主は、おもしろそうだな」とつぶやいた。
第一コーナーの手前でブレーキングして速度を十分に落としてから平田はシートから尻をインサイドに滑らせて落とし、ハングオンスタイルでマシンを寝かしこんで第一コーナーをきれいに回った。
浩輝は第一コーナーのブレーキングポイントを凝視しながら自分のスピードを計算してフルブレーキングから平田同様にハングオンスタイルで第一コーナーを回った。
平田は既にＳ字カーブを抜けて第一ヘアピンへ向かっていた。
平田の第一ヘアピンの侵入を見ながらＳ字を抜けた浩輝は、平田の侵入をまねして第一ヘアピンを抜けて行った。
ダンロップブリッジをくぐり、緩い左カーブを抜けて第２ヘアピンに入ると平田は浩輝の目の前にいた。
裏のストレートを平田の後ろにくっついて走りながら浩輝は3周目に勝負を賭けようと考えていた。
浩輝のスピードメーターの針は裏のストレートの中間地点で１８０ｋｍ／ｈのフルスケールを振り切っていたがギアはまだ5速だ。

浩輝はエンジンの回転数を示すタコメーターが８５００ｒｐｍ／ｍを示した時ギアを６速に挙げさらにスロットルを開けて行った。ギア比の計算からすると時速２３０ｋｍ／ｈは出ているはずだ。
平田のマシンとの差が少しずつ近づいてくる。
浩輝は得意のブレーキングで勝負に出た。
最終コーナーがものすごいスピードで迫って来る。
浩輝は平田のスリップストロームから横に出て、インサイドにマシンを振ると同時にブレーキングで平田を抜き、ハングオンスタイルで最終コーナーのクリッピングポイントに向かってマシンを寝かしこんでいった。
クリッピングポイントを抜けた瞬間、浩輝の視界に何か入った。
平田だ、平田が浩輝よりもアウトサイドからマシンを被せて浩輝を抜き去っていく。
浩輝はショックだった。いかに国際Ａ級ライダーとはいっても乗っているのはレーシングマシンではなく市販されているノーマルのＲＺ３５０である。
浩輝のマシンもエンジンは３５０ｃｃにしているし、その他にチャンバーやポートの加工などでノーマルとは比べられないほどパワーが出ているはずなのだ。
それなのに平田は楽々と浩輝を追い抜き、しかも今平田を追って最終コーナーを抜けようとしているが、浩輝のマシンより平田のノーマルＲＺの方が脱出速度は速いようなのだ。
平田はそのノーマルＲＺ３５０でコース幅いっぱいまでマシンを振ってそのままストレートを駆け抜けていく。
浩輝はスペシャルＲＺ３５０のスロットルを全開に開けて平田のマシンを追うと、ストレートの最後で何とか追い付く事が出来た。
第一コーナーの侵入で浩輝は再度ブレーキング競争で平田を抜こうと試みたが、平田は並みのライダーではなかった。
平田は浩輝のブレーキングポイントよりもさらに深いポイントまでマシンを送り込んでからブレーキングして深いハングオンスタイル

で、ノーマルＲＺのステップを路面にこすりながら第一コーナーを回った。浩輝はブレーキング競争で負け、さらにコーナーの出口で差を開けられてしまった。
続く緩いＳ字カーブで平田は、腰を左右に振らず、左側に落としたままで右カーブを抜けて第一ヘアピンをアウト側いっぱいからそのまま左側に寝かしこんで進入していった。
素晴らしい加速でダンロップブリッジに向かう平田のマシンを見ながら第一ヘアピンを抜けた浩輝は、ダンロップブリッジへ向かう右コーナー、第２ヘアピンへ向かう左コーナーでカミソリのような切れ味で切り返す平田のマシンを見た。
浩輝はまるで夢でも見ているかの様であった。
これまでどこの峠道に行っても浩輝は自分より速く走るライダーにあった事が無かった。誰にも負けない自信を持っていたのに、ノーマルマシンにサーキットで負けるなんて信じられなかった。
平田のマシンを追って第２ヘアピンを抜け、裏のストレートで平田の背中を見ながら浩輝は声を出して笑った。
浩輝ははじめて自分より速いライダーに出会ったのだ。体の芯からゾクゾクする様な感覚がこみ上げて来て嬉しくて仕方が無かった。
「よし追うぞ、そしてぶち抜くんだ！俺のＲＺよ、頼むぞ！」
ヘルメットの中で愛車スペシャルＲＺ３５０に叫びアクセルを全開にした。
平田は後ろから来る浩輝に何か感じていた。
和弘との約束では３周で切り上げるはずであったが、ピットロードへ入らずにフルスロットルで最終コーナーへ向かって加速していった。
浩輝は平田との差を裏のストレートでグングン詰めて行き最終コーナー入口で平田の背後にぴったりと付けることが出来た。
その後の１周を浩輝は平田の背後にピタリと付けて、同じスピード同じラインで回りテクニックを盗もうとした。
「ほう、ついてこれるかな、坊主」平田も浩輝の様子で勘づき作戦

を見破いていた。
今度の平田は手加減抜きであった。
本当のレースではない事とマシンがノーマルマシンである事からギリギリまで攻め込むことはできないが、浩輝のマシンは平田にとって手ごわい相手だと感じていた。
ストレートの最高速はノーマルマシンの平田はとても浩輝のスペシャルマシンにかなわないので、各コーナーで平田は自分の持てる力を最大限出す必要があった。
そのおかげで浩輝は平田の持つテクニックをグングン吸収していった。
浩輝は平田の後ろで1周走り何かを感じていた。それはとてつもなく大きくて大量で深いものであった。
浩輝ははじめてサーキットを走ったので特殊舗装の路面の感覚が解らなかった。しかし、平田の後ろで1周走り、これまで経験した事のないスピードで各コーナーを走り、タイヤの限界が高いことから来るコーナリングテクニックを感覚として植えつけた。
浩輝はヘルメットの下でずっとニヤニヤしていた。嬉しくて我慢できないのだ。
今までよりも早く進入して、速く旋回し、速く脱出するコーナーリングとその際のGに酔っていた。
5周目に入り第2ヘアピン出口で後ろを振り返った平田は驚いた。
第1コーナーから第2ヘアピンまではテクニカルコースで平田自身が得意とする場所であったにもかかわらず、前の週で差を開き、各コーナーで振り切ったと思っていた浩輝がピッタリと喰い付いていたのだ。
平田はフルスロットルで裏のストレートを走ったが、中間地点で浩輝のマシンに抜かれてしまった。
平田はスローダウンしピットロードからパドックへと向かった。
パドックでマシンを降りた平田に和弘が駆け寄ってきた。
「平田、今日はすまなかったな、先導役なんかさせてしまって。」

和弘は申し訳なさそうに言った。
「いいんですよわこうさん、僕もちょうどマシンテストだったし、それに楽しめましたよ。」
平田がヘルメットとグローブを外しながらそう言った。
「そう言ってもらうと楽になるが、そう言えばなんで5周走ったんだ？」和弘はわざとらしく聞こえない様に精一杯自然に言ったつもりだった。
「わこうさんも人が悪いなあ、あの坊主のせいですよ。」
「浩輝か、どうだった？あいつは…」和弘が少し興奮気味に聞いた。
「いいですねえ、今日はだいぶ乗れてますよ。でも…」
「でも？何だ、何か気になったのか？」
「ええ、才能あり過ぎって感じなんですよ、彼は今日初めてここを走っているんですよね？ちょっと信じられないなあ、全く恐怖感を感じてないみたいなんですよ。はじめて走るサーキットとコースやスピードに誰だって最初は恐怖を感じるものなんですがね、彼は全くそれが無くてどんどん順応してしまっているんですよ。僕もこんな事は初めてなんで解らないけどスペンサーがそうだった様ですよ。」
「おまえ浩輝とスペンサー比べてもしょうがないだろう！」和弘が嬉しそうに笑った。
スペンサーとは後に世界５００ｃｃＧＰにてそれまで王者として君臨してたケニーロバーツと壮絶なデッドヒートを繰り広げた後、チャンピオンとなったＨＯＮＤＡのエースライダーだ。
「平田、あいつは確かにまだレースの怖さを知らない。しかし、これからノービスで出して本物に磨くからお前も何かと目にかけてやってくれ、頼む。」和弘は平田に向かって頭を下げた。
「ちょっと、わこうさん解りましたから止めてくださいよ。でも自分の首を絞めるようなことはしたくないけど、わこうさんに頼まれたら嫌と言えるはず無いじゃないですか。」平田は笑顔で答えた。
「ありがとう平田、よろしく頼むぞ！」

和弘は平田の手を取りきつく握手をしてからピットに走って行った。
浩輝は平田がピットへ入った後も、もっと速く、もっと速くと呪文のように呟きながら各コーナーでスピードの限界に挑戦していった。
ちょうど浩輝が最終コーナーをフルスロットルで駆け抜けた時に、メインポストでチェッカーフラッグが振られた。
浩輝は「えっもう終わりなの？」という感じであったが各コーナーでイエローフラッグが振られているので間違いなかった。
エンジンの回転を抑えてマシンをクールダウンさせながら各コーナーをゆっくり回りながらブレーキングポイントを頭の中に叩き込んでいった。
パドックに戻ると、浩輝が一番最後であった。
土屋オートと書かれた軽トラックとワゴン車の周りに皆集まっており、松本の姿もあった。
一番右の端にマシンを入れて1度空ぶかししてからエンジンを切った浩輝の事を皆が見ていた。
浩輝はヘルメットを外すと、皆が見ている事に気づいて驚いた。
「坊主、えらい速さで走っていたなあ、レースの出てるのか？」40歳ぐらでアメリカンタイプのマシンで参加していた髭顔の中年から声をかけられた。
「えっそんなあ、はじめてサーキット走ったんで夢中になっちゃって…」
浩輝がそう言うと皆が「へえーそうなんだ」と感心した様な、少し驚いたような声をあげた。
松本がマシンを降りた浩輝に煙草を差し出しながら近ずいてきた。
「お前やっぱりすごいなあ」松本がそう言うと浩輝は松本が差し出したセブンスターを咥えながら「何が？」と答えた。
「何が？ってお前なあ、今日俺を何回抜いていったと思ってるんだよ！」松本が口を尖らせて言った。
「えっ知らないよ、俺お前を抜いたのか？」
「全然気がつかなかったのか？俺の事を！」

「ごめん、全然気付かなかった。」
浩輝は本当にコーナーと路面ばかり見ていて多くのマシンを抜いていったが、どれがなんのマシンかなどは全く気が付いていなかった。
「3回だぞ、3回も…わずか30周回る間に3回も抜かしていきやがって！俺を抜かしていったのはお前だけだよ、なのに3回も抜かれたなんて…俺はショックだよ！」松本はショックだと言いながら嬉しそうでもあった。
浩輝はパドックの隅に自分のスペシャルRZを移動させてから、それまで感じていた緊張感が一気に解放された事を自覚した。
そのとたん急に空腹感が襲ってきた。
そこへカジュアルな服装に着替えた平田がパドック内にある管理棟のレストランから出て来て浩輝に近づいてきた。
おもむろに平田は浩輝に向かって右手を差し出し握手を求めてきた。
浩輝は握手など全く慣れていないのでドギマギしながら右手を差し出して平田と握手を交わした。
「好いセンスだ、浩輝君と言ったね。君は今何歳だい？」浩輝が初めて聞く平田の声はとても親しみやすい声に聞こえ、まるで昔からの友人のようだ。
「は、はい、17歳です。」浩輝は上ずった声でようやく答える事が出来た。
浩輝は、ファクトリーレーサーは別世界の人間だと周囲の友人から聞いていたが、和弘も以前はモトクロスのファクトリーレーサーとして活躍し全日本チャンピオンにまでなった人物だったのであまり特別なイメージは持っていなかった。
しかし、平田は違った。
明らかに普通の人と違う何かを持っていた。
浩輝と和弘が約1カ月間精魂こめてチューニングしたスペシャルRZ350に対して、全くノーマルのマシンで浩輝と互角以上に走る平田はこれまで出会った事のない人間であったから、浩輝はめったに他人に対して表さない敬意を平田に対して示していた。

「１７歳か、若いなあ　と言っても俺もまだ２０歳だけどな、後１－２年サーキットで経験を積んで全日本チャンピオンになれば君は世界ＧＰも走れる才能があると思うよ、だからどんどんサーキットを走って、レースに出て経験を積むんだ。もし何か困った事があったら僕に連絡してくれていいよ、万一日本にいない時でもＹＡＭＡＨＡのファクトリーチームに言えば出来る限りの事をしてもらえるようにしておくから。」
平田はＹＡＭＡＨＡのファクトリーライダーとして全日本ＧＰ２５０のトップを走っていた。今年もし全日本チャンピオンになった場合、来年は世界グランプリに出場する予定なのだ。
浩輝は成功の確約を手に入れた気分で頭の中がぼーっとしていた。
しかし、浩輝はまだレースに出るどころかサーキットを走るためのライセンスさえ持っていないのだ。
これからサーキットライセンスを入手して、スポーツ走行を一定時間経験してはじめてレースにエントリーできる“ノービスライセンス”を手に入れなければならない。
その後、レースにエントリーし予選で良いタイムをたたき出し、決勝で入賞してポイントを稼がなければ平田たちが走る国内・国際Ａ・Ｂ級レースには出場できないのだ。
浩輝はまだ国内のレース状況や、その取り巻く環境など全く解らない状況であったが、平田の言葉で自分の将来はオートバイレースの世界で生きて行く事を強く決心した。
「ありがとうございます。平田さんこれからもよろしくお願いします。」まるで弟子入りしたかのような気分であった。
コントロールタワーの方へ向かって歩く平田の後ろ姿を見つめながら、浩輝は自分の運命が今大きく変わった事を実感していた。
浩輝は、神や宗教・運命などは全く信じていなかったが「運命に従うのも運命・運命に逆らうのも運命」と誰かが言っていた言葉を思い出していた。
和弘がワンボックスのワゴン車をコース内に乗り入れて、各コーナ

ーポストに残っていた井浦達スタッフを回収して回った。
ワンボックスの車中で井浦が和弘に話しかけた。
「わこうさん、今日の走行会は大成功でしたね！　みんな十分走る事が出来たし、何人か転倒したけど大きな事故もなかったし、何よりあの浩輝が転倒しなかったんですからね。」
「井浦君、それから走りたいところを我慢して協力してくれたみんなにお礼を言わせてくれ、みんな本当にありがとう。」和弘が車内にいたスタッフ全員に頭を下げた。
和弘は裏のストレートをゆっくりと走らせていた。
「わこうさん、実は僕ストップウオッチで何人かのタイムを計測していたんですよ。」
井浦はそう言うと計測したタイムを記録したノートを開いた。
「浩輝のラップタイムなんですがね、これがおもしろいんですよ。どれくらいであいつ走っていたと思いますか？」
「井浦君、僕もあいつのタイムは予想していたんだが、ラスト５周のタイムは多分僕の予想を超えていたと思うよ。」
「さすが、わこうさんだ。自分がチューニングしたマシンのタイムは大体わかると思いますが、音でその予想を超えている事までわかってしまうとは…」
「僕の予想では１分１５秒を切るくらいだと思っていたんだが、最後の方は１分１２秒ぐらいまでタイムを縮めたんじゃないかな？」
「実はベストラップはチェッカーが振られる前の周のもので、なんと１分０４秒５９でしたよ。もちろん手動計測ですから多少の誤差はあると思いますが、今日初めてサーキットを走ったのにこのタイムは異常ですよ。」
井浦の言葉通り、当時全てのクラスでこの筑波サーキットにおいて１分を切った者はおらず、後にＹＡＭＡＨＡファクトリーライダーとして平田がＧＰ５００で初めて１分の壁を破ったのは２年後の事であった。
浩輝は市販マシンであるＹＡＭＡＨＡ　ＲＺ２５０改３５０を出来

る限りチューンナップしてはいたが、所詮は町のオートバイショップで行う改造程度のものであり、メーカーが莫大な資金を使ってレース専用車として開発し、その後もメーカーの手によってチューンナップされたファクトリーマシンとは比べようがないほど大きな差があるだ。
和弘は井浦から浩輝のタイムを聞いて全く信じられなかった。
「ははは、井浦君いくらなんでもそれは無いよ、計測ミスだよ、あのマシンはここ筑波を1分10秒切ることはないよ。それに浩輝も初めてのサーキットだし、いきなりそんなタイムで走るわけないって。」
「でも、わこうさん間違いなく浩輝のタイムですよ、僕だっていくらなんでも5秒も測り間違う事はありません。」井浦はきっぱり言い切った。
「井浦君、もし今後も浩輝がこの筑波であのマシンに乗って1分5秒を切ったら、僕はあいつをＹＡＭＡＨＡのファクトリーレーサーとして契約させるよ。」
和弘は自分がチューニングしたマシンで井浦の言う浩輝のタイムは全く信用できないのもであった。
和弘はピットで聞いた浩輝のマシンの異常なエンジン音を思い出した。
それは、想定よりも高い回転数で最終コーナーを飛び出し、メインストレートを加速していた時であった。
おそらく、和弘の想定よりも３００ｒｐｍ／ｍほど高回転で走っていた。
浩輝は和弘が想定していた各コーナーの進入速度やギヤ、エンジンの回転数などは知らなかった。
ただ感覚で最もパワーが出て、最も速く走れるギヤ、回転数を使っていたのであった。
まあ浩輝はもし和弘から最高回転数や各コーナーでのギヤなどを聞いていてもその通り走れるほど器用なライダーではない。

和弘がワゴン車でサーキットを1周し、各コーナーポストのスタッフの回収を終えてパドック内に戻ってきた。
浩輝は少しずつ現実に戻って考えていた。
「俺はまだレース経験も、サーキットライセンスさえもないのだ。サーキットを走った経験も今日1回だけだ。はじめて走ったサーキットはこれまで走っていた峠道とは全く別のものだ。どんなに峠を走り込んでもサーキットのトレーニングにはならない。レースの世界で生きていくためにはサーキットで走り込まないとだめだ！」
浩輝は急に焦燥感を感じていた。
その時、土屋オート主催筑波サーキット走行会の終了を和弘が告げて、その場で解散となった。
浩輝は松本と一緒にパドック内の管理棟にあるレストランに行き、そこでカツカレーを食べた。
こんな場所のレストランであったから浩輝も松本も味は期待していなかったが、以外とおいしかった。
その後、浩輝は松本と一緒に午後のスポーツ走行を第一ヘアピンや最終コーナーなどで見学したが、残念ながら参考になるライダーはいなかった。
午後3時になり、松本と共にはじめて走った筑波サーキットの興奮の覚めぬまま埼玉へ向けてスペシャルＲＺ３５０を走らせて行った。

第４部　完

5．栄光

浩輝は土屋オート主催の筑波サーキット貸切走行会から帰ってすぐに、和弘を通してサーキットライセンスの取得に必要な書類を取り寄せて申請を済ませた。
経済的に恵まれていない浩輝の家庭は、家計の一部を浩輝のアルバイト代で穴埋めしていた。
浩輝はその事が気になり、これまでオートバイレースの世界に入ることをためらっていたのだ。
しかし、筑波サーキットでの平田の言葉や、土屋オート社長の和弘から全面的なバックアップを約束されたことから、万が一駄目だったら一生、土屋オートでただ働きすればいいやと開き直って決心したのだった。
サーキットライセンスの取得は浩輝の予想していたものよりはるかに簡単で、筑波サーキット内で行われる講義を聞いてから講師の先導で、まるでツーリングの様に１列に並んでサーキットを２－３周走り、必要な金額を支払うだけであった。
浩輝が予想していた筆記試験やサーキットでのライディングテストなどは一切なく、運転免許よりもはるかに簡単に取得する事が出来た。
とにかくこれで浩輝はサーキットを走るためのＢライセンス（ノービスライセンスよりも下のライセンス）を入手し、大手を振ってサーキットを走る事が出来るようになったのだ。
さらに和弘の口利きでレース専用に開発されたマシンであるＹＡＭＡＨＡ　ＴＺ２５０の昨年モデルの中古マシン、つまり１９８２年モデルを格安で入手した。
ヤマハのファクトリーマシンであるＹＺＲ２５０の市販バージョンとはいえ、浩輝が今使っている市販車のＲＺ２５０改３５０とは比

べ物にならない程エンジンパワーもあるし、バンク角も深い。
ブレーキ性能やサスペンションなど総合的な操縦性は天と地ほど違いがあった。
浩輝は初めてそのＴＺ２５０で筑波サーキットのスポーツ走行した時の事が忘れられなかった。

筑波のコースに入って初めの１周目は様子見で少しずつ回転数を上げて行ったが、最終コーナーの脱出からフルスロットルにした途端、レース専用車であるＴＺ２５０はその牙を剥きだしにした。
浩輝は後ろから蹴飛ばされたような感覚で前輪を軽く持ち上げたまま、ものすごい勢いでメインストレートを加速していき、あっという間に第１コーナーのブレーキングポイントに到達したのだ。
あわててフルブレーキをかけると今度は軽く後輪を持ち上げながら、ものすごい減速力を発揮した。
そのままマシンを倒すと、市販タイヤとは違うサーキット専用の溝の無いスリックタイヤが特殊舗装の路面にがっちりと喰いついて、少し位パワーをかけても滑らないのだ。
しかも低いシートと後方で上の方に付いたバックステップによって深いバンク角が可能なために、マシンは浩輝がこれまで経験した事が無いぐらい横に寝ていて、横目で見ると直ぐ近くに路面が見えていた。
浩輝はそうやって２周目をギクシャクした走りで周回したがその後はどんどんマシンに慣れていった。

それから数週間の間、和弘は店の仕事そっちのけで、浩輝と一緒に早朝の秋が瀬公園や筑波サーキットなどでマシンテスト行い、マシンのチューンナップを繰り返して来た。
浩輝は次第にマシンとサーキットに慣れて行ったが、今度は不満が出てきた。
まずは浩輝はまだＢライセンスなのでノービスクラスのライダーと

一緒のスポーツ走行でしか走れない。
したがって速いライダーが全くと言っていいほどいないのだ。
このノービスクラスのスポーツ走行で最も多く走っているのは、ＴＴ－Ｆ？マシン（４サイクル排気量４００ｃｃ未満・２サイクル排気量２５０ｃｃ未満の市販車改造クラス）が圧倒的に多く、中には全くのノーマル車体のままツーリング気分で走っている者もいた。
浩輝と同様に、レース専用車に乗っている数少ない連中もせいぜい１２５ｃｃで、２５０ｃｃに乗って走っているライダーの姿はほとんど見つけられなかった。

したがって浩輝は、突然ブレーキングポイントのはるか手前でフルブレーキをかける奴や、コーナーポストで振られているフラッグの意味が解らず、後ろから浩輝が追い越しをかけているからラインを譲るはずの者がフラッグを無視してコース幅いっぱい使ってゆっくりとコーナーリングする度にブレーキをかけて衝突を回避しなければならなかった。
このノービスクラスを抜けだして国際・国内Ａ／Ｂクラスにステップアップするためには、レースに出て予選を突破し、上位入賞してポイントを稼がなければならない。
そうやって１年間に稼いだポイントでようやく次の年からステップアップできるのである。
したがって今年いっぱいはこのノービスクラスから抜け出す事は不可能なのだ。
浩輝は何度か徹夜してスポーツ走行券を手に入れ、規定時間以上のサーキット走行をこなしたのでＢライセンスからノービスライセンスを取得した。
そして１０月に筑波サーキットで開催される全日本ロードレースＧＰ第７戦のノービスＧＰ２５０クラスにエントリーした。
これが浩輝の正式なレーサーとしてのデビューレースとなるのだ。
しかし浩輝はレースを迎えても冷静であった。

それは、このノービスクラスにファクトリーライダーは出場しない事が解っていたし、最近筑波で行われたこのクラスの優勝タイムは、浩輝が最近叩きだした筑波のラップタイムより大分遅いのだ。
浩輝は転倒せず、マシントラブルもなければ優勝は難しくないと考えていた。
そして１０月、筑波サーキットのピットに和弘と井浦、矢口とサインボード係として和弘の妻の朋子が顔をそろえていた。
浩輝は前日の予選でデビュー戦であるにもかかわらず予選１位でポールポジションを獲得していた。
しかも２番手のライダーに１周１秒以上の差をつけていたのだ。

このレースはまるでノービスクラスに世界ＧＰライダーが紛れ込んできたかのようであった。
浩輝はスタートから飛ばしに飛ばして２番手以下の後続との差をどんどん引き離して行った。
浩輝がゴールラインを駆け抜けてチェッカーフラッグが振られた時、２位のライダーの背中がちょうど第一コーナーの手前に見えたのだから、他のライダー達はやりきれない気持ちで一杯だったであろう。
この日パドックで浩輝は、表彰式を終えて優勝カップと賞状を持ったまま生まれて初めてマスコミの取材を受け、何枚もの写真を撮られた。
しかし、浩輝は次第に憂鬱な気持ちになって行った。
次の全日本ＧＰは筑波サーキットではなく、鈴鹿サーキットで来月開催されるのだが、浩輝はまだ鈴鹿サーキットを一度も走った事が無かったのだ。
そして１１月、鈴鹿サーキットにおいて開催された全日本ロードレースＧＰ第８戦のノービスＧＰ２５０クラスを浩輝は２戦連続で優勝した。
浩輝にとってこの鈴鹿サーキットは筑波サーキットよりも走りやすく、自分に合っていると感じていた。

マシンも和弘の手によって素晴らしい仕上がりで、長い鈴鹿のストレートでも１９８３年式の最新のマシンに最高速で負けていなかった。
浩輝は最終戦を待たずして、わずか2戦走っただけで来年の国内Ｂ級ライセンスを獲得した。
これで素人集団のノービスクラスを走らなくて済むし、スポーツ走行券だって徹夜で並ばなくても手に入るので浩輝は俄然やる気が出てきた。
しかし和弘は別の問題を抱えていた。
浩輝のマシンは昨年モデルの1年落ちなので、ノービスクラスであればこれをチューンナップする事で何とか勝つ事が出来たが、来年は国際・国内Ａ／Ｂクラスに浩輝が走るとなると、このマシンでは全く勝つ見込みはなかった。
国際・国内Ａ／Ｂクラスで優勝するマシンは全てファクトリーマシンであり、プライベートライダーが予選を突破する事さえも難しいのに2年落ちの中古車では優勝などもってのほかであった。
さらに浩輝が高校3年生になる事で進学問題もあるのだが、浩輝の家庭では浩輝を大学で4年間遊んでいられる状況では無かったが、浩輝の母親が大学進学を強く希望しているのであった。
浩輝はオートバイに、のめり込んではいても元々勉強が嫌いではなく、高校も地元の公立進学校に通っていた。
浩輝は全日本ロードレースＧＰの最終戦の出場を取りやめ、アルバイトとレースの練習を一時中断して受験勉強に全力を傾け見事地元の埼玉大学理学部に合格した。
その間に和弘は最新のＴＺ２５０をＹＡＭＡＨＡから新車で購入し、一人でチューンナップをしていった。
和弘は、今年は浩輝にとって勝負の年になると直感していたから、ＹＡＭＡＨＡのファクトリーチームからこっそり秘密のデータやパーツも入手していた。

１９８４年（昭和５９年）の全日本ロードレースは筑波サーキットにて開幕した。
浩輝はそれまで新しいマシンに慣れる事と、錆びついたレース勘を取り戻すため、２月後半からサーキットでテスト走行を繰り返してきていたが、さすがファクトリーマシンと平田が５００ｃｃにステップアップして居なくなったとはいえ、ＧＰ２５０の国際Ａ級ライダー達は速かった。
このレースで浩輝は６位入賞したのもの１位からは１０秒以上離されてしまった。
この経験で浩輝の闘争心に火がついた。
次の第２戦は浩輝の大好きな鈴鹿サーキットだ。
浩輝と和弘はレースの１週間前から鈴鹿に入り、マシンテストと浩輝のトレーニングに励んで、ついに全日本ロードレースＧＰ２５０第２戦決勝でＨＯＮＤＡ　ＲＳ２５０に乗る前年２位（前年のチャンピオンは平田であった）の秋山大作を鈴鹿で浩輝が最も得意とする１３０Ｒの脱出で追い抜き優勝を決めた。
その後はマシントラブルでリタイアしない限り、浩輝は優勝争いに絡んで何度か表彰台に上った。
第４戦が終わり、第５戦に向けて土屋オートでいつもの様に営業終了後に和弘と浩輝は作戦会議をしていた時、電話のベルが鳴り朋子が電話に出ると「わこうさん、ヤマハの上野さんから電話よ」と和弘に声をかけた。
「上野さんてあの上野さんか？」
「そうみたいよ」朋子が心配そうな顔で和弘に答えた。
和弘は電話機の置いてあるカウンターの前まで行って朋子から受話器を受け取った。
「もしもし土屋です。…上野さんですか、ご無沙汰しています。…ええ元気にやっていますよ、…ええ…　聞こえています、はい、…解りました　こちらから後日ご連絡しますので今日は失礼します、ええ…　では失礼します。」

「浩輝、悪いけど続きは今度にしよう。ちょっと今日は都合が悪くなったんだ。」
和弘はバツが悪そうに浩輝から顔をそむけてそう言うと。
「ごめん、わるいな。」といって2階へあがって行った。
「いんですよ、わこうさん、じゃあ失礼します。」
「朋子さん、誰ですか上野さんって？」浩輝が朋子にそう聞くと
「そのうち解るわよ、待ってなさい。」と朋子もなんだかバツが悪そうであった。
「じゃあ、僕帰りますね。さようなら。」
「浩輝、今日はごめんね」朋子にそう言われるより速く浩輝は店を出ていた。
その晩浩輝は寝つきが悪かった。
浩輝のレース活動は和弘抜きでは考えられ無かったからだ。
「上野って誰なんだろう？ご無沙汰してますって言ってたなあ」と考えているうちに外は明るくなってきた。

翌日の昼ごろ浩輝はベッドから這い出してダイニングテーブルの上にある、母が作っておいてくれたおにぎりとガスレンジの上の鍋に入ったみそ汁を温めて、遅い朝食兼昼食を食べてからシャワーを浴びて着替えると足は自然と土屋オートに向かっていた。
高校は卒業式まで出席する必要が無いので浩輝は大学の入学式まで完全にフリーであった。
ＹＡＭＡＨＡ　ＲＺ２５０改３５０に乗って土屋オートに着くと、早速和弘が浩輝に話があると言って店の2階の住居スペースに上がって行った。
浩輝は自分の心臓が早鐘を打っている事が耐えられないほどつらかった。
2階の住居スペースのダイニグテーブルで和弘と浩輝は向かい合って座り、和弘の妻である朋子が淹れてくれたコーヒーをすすって心を落ち着かせようと努力した。

「浩輝、実は昨日俺が以前世話になっていた上野さんと言う人から電話があったんだ。上野さんは昔ＹＡＭＡＨＡのモトクロス部門でファクトリーチームの監督を任されていたんだが、今はＹＡＭＡＨＡファクトリーチーム全体の総責任者になっているんだ。今の俺がいるのも全て上野さんのおかげと言っていいほど世話になった人なんだが、その上野さんが浩輝、お前にＹＡＭＡＨＡのファクトリーライダーとして来シーズン走ってほしいと言ってきた。クラスはＧＰ２５０だ、お前も知っている通り昨シーズンの２５０は平田が全日本チャンピオンになったので来シーズンはＧＰ５００にステップアップするんだ。その空席となった２５０ｃｃクラスのライダーとしてお前に是非来てほしいそうだ。もちろん正式なファクトリーライダーとしてだ。どうだ浩輝、やってみるか？」

和弘は浩輝の表情を観察しながら一気に話した。

コーヒーを一口飲んだままじっとコーヒーカップを見つめる和弘を見つめながら、浩輝は何と返事していいのか解らなくなっていた。今まで何度も夢見ていたファクトリーレーサーへの道が突然目の前に開いたのだ。

しかも、自分のレース活動が和弘がいなくなる事によって閉ざされるかもしれないと思っていた所に、逆にオートバイレーサーとしての将来が大きく開いたのだ。

浩輝の頭の中は真っ白になっていた。

黙ったまま何も言えないでいる浩輝を見て和弘が話し始めた。

「実を言うと昨日お前が帰った後ホンダのレーシングチームからも電話があった。まだ具体的な話は無かったが間違いなくお前をスカウトしたいのだと思う。とりあえずお前と話がしたいから和光市の本田技研に来てほしいそうだ。浩輝、お前は驚くかもしれないが、俺は当然だと思う。お前の各サーキットでのラップタイムを見れば全日本どころか世界でも通用する可能性があると俺は思っているし、レースの世界にいる人間は皆そう思っているんだぞ。日本のメーカーにとって日本人が世界ＧＰで日本のマシンで優勝する事は夢なん

だ。過去に片山さんが優勝して以来誰も優勝していない、平田がおそらくその夢をかなえてくれると俺は信じてはいるが、浩輝にもその可能性は十分あると思っている。各ファクトリーチームも同じ意見だと思うし、速いレーサーをほっておけばライバルになること位みんな分かっている事なのさ。特にホンダは昔大勢の日本人ライダーに十分なトレーニング期間も与えず新型マシンに乗らせて多くの事故を招いた経験があるのでそれ以来外国人のレーサーばかり使っていたからこのチャンスにお前と契約して日本人ライダーで日の丸をあげたいと考えているんだろう。という訳でお前は来シーズンファクトリーレーサーとしてＹＡＭＡＨＡかホンダのどちらかで戦うことになるんだからうちのレーシングチーム：Ｒ－ＰＲＯ鷹は解散することになるな、何しょぼくれた顔してんだ、お前にとって凄いチャンスじゃないか、もっと喜べよ！」和弘は無理矢理作った笑顔で浩輝にそう言った。

「ワコウさん、解りました。ＹＡＭＡＨＡとホンダの両方と話がしたいのでセッティングをお願いします。僕は大学はなんとでも出来ますのでお会いするのはいつでもいいです。それぞれのお話を聞いてから決める事にします。」浩輝は和弘の顔をまっすぐに見てそう言った。

「そうか、さっそく連絡してみるからしばらく下で待っていてくれ。」寂しそうに和弘がそう言うと浩輝は黙って下の店舗に降りて行った。

１階の店に戻ると井浦や矢口が浩輝を取り囲んで質問攻めにした。浩輝は正直に和弘から聞いた話を説明した。

井浦と矢口はそれこそ飛び上るほど驚いた。

そして浩輝にＹＡＭＡＨＡとホンダの良いところや悪いところを何の信憑性も無い噂話レベルでアドバイスしたが浩輝はうなずくだけで頭の中では別の事を考えていた。

平日の昼間なので店に客は居なかった。

そこへ和弘が２階から降りてきた。

「何やってんだ、井浦君、鈴木さんのＣＢＸのブレーキパッド交換は終わったのか？」
「はい、直ぐやります。」久しぶりの和弘の雷に店の中に一気に緊張感が走り、井浦と矢口が大慌てで仕事に戻って行った。
和弘はそっと浩輝のそばに来て
「ヤマハは明日の午後１時、場所はさすがに浜松まで来いとは言えないから池袋駅の西武百貨店にある桂というすし屋に来てほしいそうだ。ホンダは明後日の午前１１時に、こっちは和光の本田技研本社だ。このメモに相手の名前を書いておいたからお前一人で行って来い。おれも一緒に行ってやりたいが店があるんでなあ。」
「はい、ワコウさんありがとうございます。僕１人で行ってきます。」浩輝がそう言ってきっぱりと断ると和光は少し寂しそうであった。その後浩輝はいつものように店の手伝いをしたり、常連客と話をしたりしてから自宅に戻った。
それから１週間後９月のある日久しぶりに土屋オートへ浩輝が顔を出した。
「ワコウさん、お久しぶりです。」
満面の笑みを湛えたいつもの人懐こい顔をした浩輝がそこに立っていた。
「浩輝、何やっていたんだ。今頃来やがって。」和弘は少し怒ったような、それでいて安心したような様な口ぶりだった。
「すみません、ちょっと旅行していたものですから。」
浩輝の話は本当であった。
浩輝はヤマハとホンダそれぞれと来シーズンの契約について交渉したが、ヤマハとは特に問題は無かったが、ホンダはヤマハのＴＺ２５０に乗っている浩輝が速いのは解っているが、はたしてホンダのＲＳ２５０に順応できるかをテストしたいと言い、浩輝自身もトップスピードの速さをいやというほど知っているホンダのＲＳ２５０に一度乗ってみたいと思っていたので、ホンダのファクトリーレーシングスタッフと一緒にホンダのお膝元である三重県鈴鹿市の鈴鹿

サーキットへ行き、２泊３日でＲＳ２５０と純ファクトリーマシンであるＮＳ２５０に乗ってテストを受け、その両方のマシンで鈴鹿サーキットにおける２５０ｃｃクラスのコースレコードを非公式ではあるが更新して見事テストに合格してきたのであった。
さらに浩輝は両チームとの契約での契約金の額や、年俸、その他スポンサー収入の配分方法やレース体制に関する事など、特に浩輝は大学生とレーサーという２足のわらじを履いていかねばならない点などについて話し合ってきた。
基本的には学業優先するが最終決定権はチームにある事が決定された。
これらの条件はヤマハもホンダも同じであったが、ホンダは一つだけヤマハに無い条件を付けてきた。
それは秋山と浩輝でトップ争いをしたレースでエースライダーの秋山大作にトップを譲るという条件であった。
「ワコウさん、２－３日中にヤマハとホンダから電話が来ますので両社の話を聞いてください。そしてどちらと契約するかを決めてください。僕はどちらでいいですから、ワコウさんが決めてください。」浩輝は真顔でそう言った。
「何でおれが決めるんだ、お前の事だろう俺は関係ないぞ。」
「いいえ、ワコウさんにも関係ある事なんです。だから両社の話を聞いてから決めてください。お願いします。」浩輝は頭を下げた。
「どういう事だ。」和弘が浩輝に尋ねた。
「すみません、両社の話を聞いてもらえば解りますので、しばらく待っていてください。じゃあ、僕は大学に戻らなくてはいけないのでこれで失礼します。」
「おい、浩輝ちょっと待て。」和弘の話を引きずりながら浩輝は土屋オートの前のバス停にとまったバスに飛び乗って行ってしまった。
和弘は何が何だか分からず店のカウンターの中に突っ立ったままであった。
それからさらに１週間が過ぎ、浩輝は自分の愛車であったＲＺ２５

０改３５０を大学のバイク好きな友人に売った金で自動車の運転免許を取るために自動車教習所に通っていた。
教習所は大変混んでいて実地教習の予約を取るのが大変であった。ファクトリーレーサーと学生をこなすとなると運転免許の取得が難しくなると考えて浩輝はこの時期に教習所へ通うことにしたのだ。
ある日教習所の帰りに重いテキストを抱えた浩輝は土屋オートの前のバス停でバスを降りた。
土屋オートの中に入ったが和弘の姿は見えなかった。
「ちょっとおいで。」
いきなり浩輝は後ろから襟首を掴まれて引っ張られた。
一体誰だと思い後ろを振り返ると和弘の妻である朋子さんであった。
「あ、朋子さんお久しぶりです。」
「お久しぶりじゃあないんだよ、あんたワコウさんに何したんだ。」
「何って、僕は何にもしていせんよ。」
「嘘言うんじゃないよ、あんたの話が上野さんやホンダの関係者から来てからうちのワコウさんはどんどん沈んで行っちまったよ。今日だって朝から何にも云わないで出て行ったきりまだ戻って来ないんだぞ。あんた一体どうなってんだい。私に解るようにきっちり説明して頂戴。」朋子はすごい迫力で浩輝に迫ってきた。
浩輝は和弘の状況や気持ち、さらに朋子の心配も解るだけにたじろぐだけであった。
ちょうどそこへスーツ姿の和弘が戻ってきた。
「ワコウさん。」朋子が安堵の表情でつぶやいた。
朋子は元々モトクロスの国際Ａ級国内ＧＰで活躍していた和弘のファンの一人であり、この土屋オートの常連客でもあったので妻となった今でも和弘を「ワコウさん」と呼ぶのだ。
「遅くなってごめんな、おう浩輝もいたのか、ちょうどいいな。少し早いけど今日は店を閉めて皆で飯でも食いに行こう。おれのおごりだ、浩輝もいいな。」
浩輝が頷くと和弘は２階へあがっていきその後を朋子が追った。

その後店の片づけが終わり、午後7時のアラームが店の時計から聞こえてきたときに、2階から着替えた和弘と子供を抱いた朋子が降りてきた。
朋子の顔に涙の跡が付いているのを浩輝は見逃さなかった。
店のシャッターを閉めると皆で良く行く近所の焼き肉屋に歩いて行った。
店に入ると一番奥の小上がりの席が空いていたのでそこに土屋オートの従業員すべてと浩輝が座った。他の客は家族づれが1組だけであった。
ビールを注文してから和弘が話を切り出した。
「いろいろ考えたんだが、決めた結果ら先言わしてくれ。まず最初に浩輝は来年ヤマハのファクトリーライダーとして全日本GPの250ccクラスを戦うことになった。という事で皆に協力してもらっていたレーシングチームR－PRO鷹は解散する。」
一同シーンとなって和弘の話を聞きいっていた。
浩輝はやはり契約はヤマハかと考えてほっとしていた。
ヤマハかホンダにするのか和弘に任せた時点で8割方ヤマハになるだろうと予想していたが、契約金や年俸はホンダの方が勝っていた。
しかし、義理に厚い和弘はやはりヤマハを選んだのだ。
浩輝としてもホンダが唯一ヤマハに無い条件として付けた秋山を優先する事項は、受け入れ難いものであった。
「それから、俺は来年1年間店を休むことにした。」
「えーっ」今まで黙って聞いていた矢口と井浦が一斉に声を出した。
「ちょっと待ってください。浩輝のファクトリー入りと店を閉めるって言うのはどんな関係があるんですか？1年間閉めるって言いますけどその間俺たちはどうすればいいんですか？」井浦が問いただした。
「まあ、待て俺は店を休むが店を閉めるとは言ってないぞ、実は俺は来年1年間ヤマハに戻って浩輝のマシンのメンテナンスチームでリーダーをする事になったんだ。もちろんレースの合間にたまに帰

ってくる事はあると思うが基本的には浜松のヤマハ本社か菅生でマシンテストと開発に掛かりっきりになると思う。来週から早速菅生で来シーズンのＹＺＲ２５０のテストに入る。浩輝はもう少し後で菅生に呼ばれるはずだ。店の方はヤマハから助っ人が一人メカニックとしてやってくる。腕は確かなはずだ。店の方はおやじと朋子と皆で何とか頑張ってくれないか？この通りだ。」和弘は深々と頭を下げた。

そこに店員が全員分の生ビールと大きな皿に盛ったキムチを運んできた。

「俺や店の事はともかく、今日は浩輝のファクトリーレーサー入りを祝おうじゃないか。」和弘はそう言ってビールのジョッキを挙げた。

「それでは我がＲ－ＰＲＯ鷹のエースライダー早川浩輝君のヤマハファクトリーライダー入りを祝って乾杯！」

「乾杯！」

「浩輝おめでとう！」

皆が店の事も忘れてまるで自分の事のように喜んでくれているのが浩輝にはたまらなく嬉しかった。

「浩輝、お前からひと言挨拶しろ。」和弘が何か吹っ切れた様子で浩輝に言った。

浩輝はおしぼりで顔を拭くついでに涙を拭いてから立ち上がった。

「皆さんありがとうございます。ワコウさん、井浦さん、矢口さん、朋子さんごめんなさい、僕の我儘でワコウさんをお借りします。皆さんには大変なご迷惑をおかけすることになってしまって申し訳ありません。しかし、僕もやるからには誰にも負けない気合で頑張りますので応援よろしくお願いします。」浩輝はそう言って自分自身にもプレッシャーをかけた。

皆が一斉に拍手し浩輝が座ると朋子が抱いている子供をあやしながら言った。

「浩輝、詳しい話はワコウさんに聞いたよ、でもねワコウさんを貸

すのは来年だけだからね。男の我儘に付き合っていたんじゃきりが無いのは私だってよく知ってんるんだから。それから私と約束して頂戴、今年必ずチャンピオンになる事を、あんたがワコウさんの整備したファクトリーマシンに乗って勝てなきゃおかしいだろう？私と来年必ずチャンピオンになるって約束しなかったらこの話は無しだよ。」

朋子は浩輝をまっすぐに見てそう言った。

「わかりました。僕は来年ワコウさんの整備したマシンで必ずチャンピオンになります。」

浩輝も朋子の眼をまっすぐに見て約束した。

「おいおい、それじゃあ俺も責任重大だなあ。」

和弘がおどけてそう言うと重くなっていた空気が一気に和んで軽くなった。

浩輝と朋子も目を合わせたままでほほ笑んだ。

朋子の腕の中で朋子と和弘の長男である晃ちゃんがあくびをしていた。

それからしばらく浩輝は井浦と矢口からの質問攻めにあっていた。ファクトリーマシンにはもう乗ったのか？その性能はどうだったか？契約金はいくらもらったのか？年俸はいくらなのか？など一度に聞かれて浩輝が困っていると、和弘が説明を始めてくれた。

「初めから説明すると、まずヤマハの上野さんから店に電話があったのは皆知っているよな、あの電話は浩輝に対するヤマハからのスカウトの電話だったんだ。そしてその次の日に今度はホンダからスカウトの電話があったんだ。実は上野さんの話だとヤマハが浩輝の獲得に動いたことがホンダにばれたらしいんだ。それでかねてから注目していた浩輝獲得に急いで動いたという訳さ。浩輝はヤマハとホンダ両社と交渉して大学生活とレースの両立など基本的には2社とも同じ条件にして最後に俺をチーフメカニックとしてチームに入れる事と、俺が留守となる店のバックアップを条件にしたんだ。ヤマハもホンダも想定外の条件だったんで驚いた様だったが、浩輝は

その条件が呑めなければ契約しないと言いだしたんで結局こういう契約にったという訳さ、おかげで浩輝は契約金と年俸が少し下げられてしまった。」
朋子は和弘が説明している間に運ばれてきたカルビやロースなどを熱くなった網の上に乗せて焼いていき食べごろの焼き肉をそれぞれの皿に移して行った。
「でも浩輝、もしワコウさんが断ったらどうするつもりだったんだ？」矢口が聞くと
「その時はこれまで通りＲ－ＰＲＯ鷹で戦うだけですよ。」浩輝はあっさり答えた。
「そしてこいつは最終判断を俺に押しつけて逃げちまったんだ。本当の事を言うと俺の分も含めて契約金と年俸はホンダの方がヤマハより大分よかったんだが、上野さんに頭を下げられてしまった事と、ホンダの条件にはヤマハには無い決して受け入れられないものがあったんでヤマハに決めたんだ。浩輝だってホンダとは契約できないと思っていたと思う。今日ヤマハの本社で契約書に判を押してきた。ほら浩輝、お前に預かっていたハンコ返しとくぞ。契約金は明日お前の銀行口座に振り込まれるそうだ、年俸は来年の1月から毎月１２分の1ずつが２５日に振り込まれるからな。お袋さんに言っておけよ。」
和弘はそこまで説明すると朋子が焼いた焼き肉を食べ始め、生ビールをお代わりした。
他の皆も食べ始めビールや肉やキムチの追加を注文した。浩輝も食べて飲んだ。浩輝はいつもよりおいしく感じながら幸せな気分に浸っていた。

それからの浩輝はまさに目が回るような忙しさだった。
契約から3日後にはヤマハの東京オフィスでマスコミ発表の為の記者会見が行われ、その後スポンサー契約を希望する用品メーカーなどとの契約をヤマハの広報担当者と共に決めて行き、レース用の革

ツナギやヘルメット、グローブとブーツまでのトータルデザインを作成していった。
オートバイ雑誌のインタビューなどもこなしながら大学へも通学し、普通自動車の運転免許証も取得した。
そうして年が明け、まだ寒い2月初旬に東北新幹線で北へ向かう浩輝の姿があった。
和弘は昨年から菅生でマシンテストをテルとライダーと共に繰り返しており、浩輝のマシンメンテナンスをしているはずである。
浩輝は東北新幹線で仙台まで行き、仙台駅でヤマハの関係者に迎えに来てもらって車で菅生サーキットに向かった。
正午に菅生サーキットに着いた浩輝はパドックで車を降りて首を縮めた。
2月上旬なので晴れてはいたが所々に白い雪が積もっていた。
乗ってきた車から着替えなどの荷物を降ろしピットの中の和弘を探すと、長身の和弘は直ぐに解った。
和弘は立ったままコースを走るマシンを見ていた。
サーキットは2ストロークマシン特有の甲高い排気音が鳴り響き、周りを取り囲む山や森の中で特殊な緊張感に包まれていた。
ピットの裏から和弘のいるピットに近づいていくと、ピットの中にカウリングを外したヤマハがレース専用に開発したファクトリーマシンであるＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０の浩輝スペシャルマシンが今や遅しと浩輝を待っていた。
「ワコウさん、お待たせ。直ぐに走れますか？」
和弘が振りかえり
「直ぐに走れるかだと、当たり前だ、俺達がスキーでもしていたっていうのかよ？」和弘が満面の笑みで答えた。
浩輝と和弘はがっしりと握手を交わすと大きな声で笑った。
「今日もここはヤマハの貸切だから一々マシンにカバーをかけて隠す必要はないから楽でいいや、もう昼だ1時まではコントロールタワーの昼休みで走れないからお前が走るのは2時からだ。1時から

は１２５ｃｃのマシンテストがあるんだ、その後で２５０ｃｃが１時間で３時からは５００ｃｃが２時間走って今日は終わりだ。５時には暗くなってくるからな。とりあえず昼飯を食おう、その後で主だった連中に挨拶しに行こう。」
「お願いします。じつは朝から何も食ってないんで腹ペコだったんですよ。サーキットレストランに行きましょう。」浩輝はおなかをさすりながらそう言った。
「浩輝よう、今日はヤマハの貸切だって言ってんだろう。サーキットレストランなんて営業してねえよ。」和弘はニヤニヤしながら言った。
「えっ、じゃあどこで食事するのですか？弁当ですか？」
しょうがねえなあ、お前はまだ年俸２千万ぽっちの新人レーサーだから弁当食ってりゃ良いだろうけどな此処には年俸うん億円といった外人レーサーや平田もいるんだぜ、そんな連中が弁当食ってこんな寒い場所でテスト走行なんかするのか？」
「じゃあどうするんですか？」
「店が来てるんだよ、あそこのテントを見てみな。仙台のホテルからコックやウエイトレスが全部此処にきてあのトラックの中にある調理施設を使ってヤマハファクトリーレストランを開いているっていう訳さ。こんな事はファクトリーの世界じゃ常識だぜ、もちろん全部タダだぞ。」和弘はまるで自分の事のように自慢げに言った。
「すごいですね、さすがファクトリーだ。今までのＲ－ＰＲＯ鷹とは比べようがないや。」
「悪かったな、今まで悪い環境で。」和弘が拗ねたように言った。
「何言ってんですか？ワコウさんが言いだしたんでしょう。」
浩輝と和弘は一緒に笑った。
「さあ、行こう。」
和弘に促されて浩輝はピットの中に荷物を置くと、和弘と共にヤマハファクトリーレストランへ向かった。

第5部　完

ファクトリーレーサー

6．ファクトリーレーサー

菅生サーキットは、宮城県柴田郡村田町菅生にある。

ここにはモトクロスコースやトライアルコース、テニスコートやホテル、キャンプ場まである総合レジャーランドであり、正式名称は「スポーツランドＳＵＧＯ」というヤマハが直接経営している施設だ。

その「スポーツランドＳＵＧＯ」の中にあるＳＵＧＯインターナショナルレーシングコースがいわゆる菅生サーキットだ。

このサーキットは山の中腹を切り開いて造られていて全国のサーキットの中で、最も美しく、高低差が一番多くてタフなコースである。

２輪と４輪では使用するコースが一部異なり、２輪レースのときにはシケインを使用するが、４輪レースでは使用せずにそのまま最終コーナーへと進入する。

山の中腹を切り開いて造られているためアップダウンを利用した中・低速コーナーが多く、排気量の少ないマシンでは、特にシケインから最終コーナーへ続く登り坂で最もスピードが落ちた状態から最大加速をかけるのに苦しむのである。

最近のスーパーバイクレースではハイパワーのあまり登り勾配を登りきって平たんな場所に出るとフロントタイヤが大きく浮いてしまうのでわざとリアブレーキを少し踏んでフロントタイヤの浮き上がりを小さくするライダーもいるほどである。

全長３７３７．５ｋｍ、最大直線長７０４．５ｍのこのコースの２００４年時点での２５０ｃｃクラス最高ラップタイムは全日本ＧＰ２５０で１９９９年に嘉陽哲久選手が記録した１分３０秒５７９である。

なお、２００４年の全日本ロードレース選手権第５戦がここ菅生サーキットにて行われ、レース中のベストラップタイムはチームＥＮ

ＤＵＲＡＮＣＥの藤岡祐三選手がＨＯＮＤＡ　ＲＳ２５０で記録した１分３１秒３５６である。
「ＹＡＭＡＨＡファクトリーレストラン」でスペシャルランチのビーフステーキとポテトサラダを食べた浩輝と和弘は食事の合間に入れ替わり入ってくるヤマハファクトリーチームの関係者に挨拶し、和弘は度々親しそうに話したり握手したりしながら浩輝を紹介してまわった。
そこへＹＡＭＡＨＡファクトリーのエースライダーである平田忠夫が総監督の上野伸一と一緒に入ってきた。
和弘は直ぐに浩輝を連れて上野のもとに駆け寄った。
「上野さん、早川浩輝がつきました。午後から早速走らせます。」
と和弘が言うと
「ああ、早川君ようこそ、シーズンは間近に迫ってきている。早速期待にこたえてほしいな。」と言いながら上野は浩輝の肩をたたきながら笑顔で答えた。
「ワコウさん、お久しぶりです。あの時のやんちゃ坊主がどこまで成長したか楽しみですよ。上野さん、僕は２年前彼に筑波サーキットで負けた事があるんですよ。サーキットで負けたままなのは実は彼一人だけなので速く彼を５００ｃｃに乗せて僕と勝負させてくださいね。そうしないと僕は眠れなくなってしまいますから。」
平田の言葉で皆は一斉に笑いだした。
「そんな、平田さん冗談はやめてくださいよ、それでなくても緊張しているんですから。」浩輝はそういいながら自分の顔が赤くなっている事を自覚していた。
「平田、昨年は凄かったな。今年もチャンピオンを獲って、来年はいよいよ世界グランプリだな。がんばれよ。」
「はい、ワコウさん。僕もそのつもりです。」さすがに平田は自信たっぷりにハッキリものを言う男であった。
「もちろん平田は世界を目指してもらわなくては困る。しかも、来年世界グランプリに平田が出た後の国内ＧＰ５００に乗る候補とし

て早川君も入っているんだ。今年ＧＰ２５０で昨年ＨＯＮＤＡに取られたメーカータイトルを取り返したら即早川君に５００にスポット参戦してもらいたい。もし５００でもいい成績が獲れるようなら その先も考えてはいるが、まあそれはその時のお楽しみだ。まずは２５０でタイムを出してもらわなきゃな。」
上野の言葉に浩輝は頭の中が真っ白になって行った。
「おい、やんちゃ坊主、俺と一緒にヨーロッパに殴り込んでフレディースペンサーをやっつけようぜ、もちろん同じＹＡＭＡＨＡだけれどキングケニーにも遠慮はいらないぜ。」
平田は浩輝にウインクして上野と一緒に奥のテーブルに歩いて行った。
浩輝はこれまでオートバイ雑誌の中でしか見た事のない世界である世界ＧＰや、フレディースペンサー、キングケニーことケニーロバーツなどの名前を現実に感じられる事が夢のようであった。
「おい、浩輝大丈夫か？」和弘に肩をゆすられて浩輝は我に返った。
「ワコウさん」浩輝は無き出しそうな変な笑顔で和弘の方を見た。
和弘と浩輝はピットに戻ったが、まだ１２５ｃｃクラスのマシンテストの時間が始まったばかりで浩輝が走る予定の２５０ｃｃクラスのテストまで１時間近く余裕があった。
浩輝は自分のスポーツバッグを持って、側面に大きくＹＡＭＡＨＡＦＡＣＴＯＲＹ　ＲＡＣＩＮＧ　ＴＥＡＭと書かれた大型トレーラーの荷台を改造して作ったライダー専用サロンに入った。
そのサロンは寛ぐのに十分な広さがあり、コーヒーメーカーで作られたコーヒーの香りが充満していた。
浩輝はサロンの後部にある自分専用ロッカーを開けて着てきたものを脱ぎ、耐火仕様の下着を付けると、初めからロッカーの中に入っていた革ツナギに着替えた。
それは背中に大きくＨＩＲＯＫＩ．ＨＡＹＡＫＡＷＡと書かれていて、浩輝が交わした様々なスポンサーのワッペンが所狭しと縫い付けられていた。

これも初めからロッカーに入っていたヘルメットとレーシンググローブ、レーシングブーツを持ってピットに戻った。
ピットの中では和弘のほかに2人の若いメカニックマン、吉田と鈴木が浩輝のＹＺＲ２５０にカウリングを装着していた。
浩輝は軽く会釈するとピットの中にある椅子に腰かけてホームストレッチを全開で加速する１２５ｃｃマシンを眺めていた。
「浩輝、初めは８５００回転に抑えて３周走って一度ピットに戻れ、本番用のプラグに取り替えてからは９５００回転まで回していいぞ、そのかわり初めから熱くなって転ぶなよ。此処は特に第三コーナーのセーフティーゾーンが狭いから気をつけろよ。あそこでやっちまうとお前もけがをするし、マシンのダメージも大きいからな。ファクトリーチームだっていくらでもマシンが出てくるわけではないんだぞ。」
「解ってますよ、今日は初日なんだしツーリング気分で走ってきますよ。僕も2輪で走るのは久しぶりですからね。」
浩輝は和弘の話を聞いて確かにその通りだと思いつつも本番用のプラグで９５００回転まで回せるエンジンに驚いていた。
昨年まで浩輝が乗っていた、和弘と浩輝がチューンナップした市販レーサーのＹＡＭＡＨＡ　ＴＺ２５０でも８５００回転が限度であった。
メインポストで＜チェッカーフラッグが振られ、１２５ｃｃクラスのマシンがピットロードから自分のピットに戻っていく。
もちろんＹＡＭＡＨＡの貸切であるからスポーツ走行日の様に何十台ものマシンは走っていない。
浩輝はゆっくりとブーツを履いてから革ツナギのチャックを一番上まであげ、ヘルメットを付けた。
立ち上がってから両手にレーシンググローブをはめると、鈴木と吉田がおさえている自分のマシン、ＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０を受け取った。
「浩輝、解ってるな、3周走ったらピットインしろよ。」和弘は浩

輝のヘルメットのそばで大声で指示した。
周りにある数台のマシンがエンジンを空ぶかしさせているので凄い音量であった。
浩輝は右手の親指を突き出して「了解」のサインを出しながらマシンをピットロードに押し出した。
後続のマシンがいないことを確認してからマシンを勢いよく押し出してエンジンに火を入れた。
浩輝はまだ温まっていないおかげでバラバラとした排気音を出すマシンを加速させながらピットロードを出て第一コーナーをインベタで周る。
念のため振り返って後続車がいない事を確認すると、第二コーナーからはハングオンスタイルでコース幅いっぱいに使ったコーナーリングでマシンを加速させていった。
気を抜くとタコメーターの針は簡単に８５００回転を越えようとするので、超えないよう気をつけながらマシンを走らせて行った。
３周走ってからピットロードに入り自分のピットの前にマシンを止めると、鈴木と吉田が素早くカウリングを外してプラグを本番用の高熱価のタイプに交換し、再度素早くカウリングを装着した。
「２周目のタイムは１分３５秒ちょっとだ、今度は９５００回転まで回していいぞ。」
和弘はうなずく浩輝の背中を押してマシンに火を入れ、加速していく浩輝の背中を見つめた。
さっきと同じように第一コーナーをインベタで周りながら、後続車がいないことを確認した浩輝は第２コーナーから本格的に攻め始めた。
シケインを立ちあがって登り坂を強力に立ち上がりながらピットを見たがまだサインボードは出ていなかった。
全開でホームストレッチを加速し第一コーナーの侵入ぎりぎりで急減速しコースの外側いっぱいまで寄せたマシンを一気に最大バンク角まで寝かしこんでクリッピングポイントへ向きを変え、そこから

マシンを立てながら後輪にグリップ力を与えてアクセルを開き、後輪にパワーを与えて一気に加速していく。
第二コーナーを抜け素早くマシンを切り返し第三コーナーへ突っ込んで続くペアピンへ向かうところで先行するマシンが短いストレートを抜けてヘアピンコーナーに進入するの見えた。
浩輝は先行するマシンを追いかけるのが無性に好きで、この瞬間ツーリング気分で走ると言った事などどこかへ吹っ飛んでしまった。
もちろん先行しているマシンも浩輝と同じＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０であり、ライダーは自分の先輩でその菅生にも慣れているに決まっているから簡単に追いつけるものではないのだが、浩輝はそんな事はお構いなしだ。
ヘアピンをクリアしてＳ字コーナーで先行するマシンまで５ｍと迫った浩輝は、続くハイポイントコーナーのブレーキングで先行するマシンのすぐ後ろまで迫り、ハイポイントコーナーの立ち上がりでラインをクロスさせながら追い抜くと、レインボーコーナーの侵入から脱出でさらに差を広げて行った。
コーナーポストの監視員がＢ級のグリーンゼッケンがＡ級のレッドゼッケン、しかもゼッケン２番つまり前年の日本ＧＰ２５０でランキング２位のマシンを軽々と追い抜いて行ったのを見て信じられなかった。
このマシンはＹＡＭＡＨＡでＧＰ２５０のエースである清水信吾のマシンであった。
清水は今年国内でチャンピオンを取るために浩輝より３日早くこの菅生に入って練習を重ねていた。
しかし、一番驚いたのは清水であった。
自分自身もマシンも３日前からセッティングを出し、調整を繰り返して絶好調でタイムアタックの最中であったのだ。
確かに浩輝のマシンが走っている事は知っていたし、タイムアタックの最中で後ろから浩輝が迫ってきている事に気づかすブロッククラインを使わなかったのだが、それにしてもタイムアタック中の自分

を追い抜くマシンがある事、しかもそれが今日初めてこの菅生を初めて乗るマシンで走らせている若いＢ級ライダーである事は到底信じられなかった。
しかし、今目の前を信じられないスピードでレインボーコーナーに進入しようとしているのは自分と同じＹＺＲ２５０にＢ級ゼッケンを付けている。
「あいつか、昨年のレースでもてこずったがお手並み拝見させてもらうぜ。」清水は昨年のシーズン中に何度か浩輝と走っており、プライベートマシンで信じられないスピードで走る浩輝を良く知っていた。
清水も限界を探りながらレインボーコーナーを抜けてバックストレッチへフルスロットルで加速していった。
そこで清水は信じられない光景を目の当たりにした。
先ほど抜いて行ったばかりの浩輝のマシンに１０ｍ以上も離されていて、スリップストリームにさえ入れないのだ。
しかし、さすがＹＡＭＡＨＡのファクトリーチームが３日間かけてセッティングしたマシンはバックストレッチで難なく浩輝のマシンに追いつき、馬の背コーナーの侵入でスリップストリームから出て浩輝を追い抜いて行った。
浩輝の闘争本能に火がついた。
今までの浩輝はストレートで速いマシンをコーナーリングテクニックで抜くことに全てをかけて闘ってきたのだ。
今まさにこれまでレースシーンが再現されたのだ。
右回りの馬の背コーナーを清水のマシンのすぐ後ろで進入し、続くＳＰインコーナーとＳＰアウトコーナーのインサイドから清水を抜き、シケインでさらに差を広げた。
しかしシケインの立ち上がり加速が浩輝のマシンはまだセッティング不足で、清水の加速の方が大きく勝っていた。
緩い上り坂を浩輝はフルスロットルで加速したが、大きく差を付けたはずの清水に最終コーナーからゴールライン手前のダンロップブ

リッジで再度抜かれ、さらに第一コーナー手前までに１０ｍもの差をつけられてしまった。
これでは熱くなるなという方が無理であった。
浩輝と清水はお互いのプライドをかけてさらに5周にわたってデッドヒートを繰り広げ、一緒にピットロードへ入って行った。
自分のピットに戻った浩輝は、ヘルメットを取り、和弘に「ワコウさん、2速を下げて、トップスピードをもっと下さい、今すぐ。」浩輝は叫んだ。
「解った、直ぐやるからお前はちょっと休んでいろ。吉田、鈴木急げ。」
和弘は2人のメカニックマンに素早く指示を与えると直ぐにマシンのカウリングを外し、まるで浩輝が言った事が最初から解っていたかのように準備してあったパーツを組み上げて行った。
浩輝はミネラルウオーターを飲みながら今までの自分のライディングを思い出しながら最適なラインを探していた。
隣の清水のピットも慌ただしくマシンのセッティングを調整していて、清水はヘルメットを付けたままでいつでも走りだせる状態で待っていた。
浩輝は清水の状態を見て慌てて自分もヘルメットを着け、いつでもコースに復帰できる状態で和弘達の作業を見守った。
ギアの交換が終わり、浩輝がコースへ復帰しようとピットロードへ出ると清水が浩輝の復帰を待ち構えるようにピットロードで自分のマシンにまたがった状態でエンジンを空ぶかしさせていた。
浩輝は自分の体の奥底からこみ上げてくる興奮を感じた。
浩輝と清水2台のＹＺＲ２５０は同時にピットロードを加速してルールを無視して第一コーナーの侵入からコース幅を出来るだけ使って全開でコースを攻めた。
もちろんこれは貸切であり、２５０クラスはこの2台しか走っていないためであった。
浩輝は初めの5周で清水は速いライダーではなく、速いマシンに乗

るライダーである事が解っていた。
だから、本来であればキャブレターやサスペンションなど全体のセッティングを調整するはずの今回のテスト走行であったが、今目の前の清水に勝つためだけのセッティング、すなわち最終コーナーからの脱出速度を上げる事と、ストレートでの最高速度を上げる為に６速のギアを変更したのだった。
この微修正だけで清水より速く走る事が出来ると浩輝は確信していた。
清水はまさかこの間までノービスで走っていた若造にファクトリーマシンに乗った初日に負けるはずはないと思っていた。
確かにコーナーリングは速いが、無理な突っ込みとコーナーワークで運がいいだけのライディングだと思っていた。
コーナーでは多少不利でも高速コーナーの立ち上がり加速とストレートでは絶対の自信があったので、中速コーナーの立ち上がりを重視してリアのサスペンションを少し硬めにセッティングして浩輝の再スタートを待っていた。
ここでどっちが速いのか、どちらがヤマハの２５０ｃｃクラスエースライダーなのかはっきりさせておく必要があったのだ。
しかし、清水の判断は間違っていた。
浩輝のマシンはまだ清水のマシンと比べれば１０％程度の仕上がりだが、先ほどと比べれば遥かに速いトップスピードと低速の立ち上がり加速を手に入れた。
そのおかげで浩輝は、どのコーナーでも清水を寄せ付けず、ストレートでも差は縮まるものの追い越されることはなく、その差は周回ごとに離れて行った。
浩輝は、２周目のラップタイムで１分３１秒５７３をたたき出し、その後少しずつタイムを削り１８周目に遂に２５０ｃｃクラスのコースレコードである１分３０秒２２１をマークした。
その後１分３０秒台で周回を重ねメインポストにチェッカーフラッグが振られたことを確認してピットロードに戻りマシンをパドック

側から自分のピットに待っている和弘に戻した。
浩輝はヘルメットとレーシンググローブ、レーシングブーツを取り、革ツナギのフロントファスナーを降ろしてからピット内の椅子に座り、飲みかけのミネラルウオーターを飲んだ。
和弘が浩輝のそばに来て言った。
「やったな浩輝、お前のベストラップタイムは1分３０秒２２１だ。もちろん非公式ではあるがコースレコードでもあるぞ。」
その時、隣のピットから清水がやって来た。
清水は身長が低く見た感じでは１６０ｃｍも無いように見え、痩せてほほがこけてくぼみ、眼鏡をかけていてレーシングライダーには見えなかった。
「いやあ、今日は僕の負けだ早川君。僕のマシンは足回りのセッティングが駄目でねえ、未熟なメカニックだと苦労するよ。さすがワコウさんはモトクロス出身だけあって足回りのセッティングがお上手ですねえ。でもパワーが出せないようじゃセッティングとは言えませんよお。」
清水はまるで酔っぱらいの様におどけた態度で言いたい事を言って出て行った。
和弘はほほにグリグリしたしこりを作って清水を見ていた。
「畜生あの野郎、早川君が自分より速いのをセッティングのせいにしやがって、今までも嫌な奴だと思ってたけどもう我慢できねえ。」
メカニックマンの吉田がピットの壁を叩きながらそう言った。
「まあ、まあ吉田よう。浩輝があんなやつに負けるわけねえだろう。そうだろう浩輝。」
浩輝は和弘の言葉にうなずいた。
それから浩輝は和弘にマシンの変更ポイントをいくつか伝え、和弘と一緒に修正案を考えた。
明日のテスト走行に備えて、和弘は2人のメカニックマンに指示を出しながら自分も一緒にマシンのチューンナップに取りかかった。
浩輝のマシンはカウリングが外されエンジンもバラバラに解体され

てプラグの状態やブレーキパット、タイヤの減り具合などが測定されデータとして記録されていった。
浩輝はライダー専用サロンカーで私服に着替えてからピットに戻り、コース上を走る５００ｃｃのマシンを眺めていた。
浩輝はコース上に平田のマシンが無い事に気づいて和弘に聞いた。
「ワコウさん、平田さん走っていませんね。どうしたんでしょう？」
「ああ、あいつはあんまり走らないんだよ。元々あいつはマシンのセッティングもそこそこやればいいやって感じで、ギリギリまで走り込んでセッティングを出す今のライダーとは違うのさ、今日は午前中に１０週ほど走ったからそれで終わりなんじゃないか？」和弘は工具を持った手を休めずに浩輝に答えた。
「へえ、やっぱり天才なんですね。」と浩輝が言うと和弘と吉田、鈴木が一緒に笑い出した。
「おまえなあ、今ここで一番の話題を知らないな。皆天才ライダー早川浩輝の事で持ちきりなんだぞ。だからお前はしばらく注目されちまうからコースの外ではおとなしくしていろよ。」
和弘に言われるまで浩輝はそんなこと考えてもいなかった。たかがノービス２５０で勝っただけなのに何が天才なのかと不思議でならなかった。

浩輝がそんな話をピットでしていた頃、ライダー専用サロンカーの中で平田と上野が二人で話し込んでいた。
「平田君がどうしても獲った方がいいというから半信半疑で獲ってみたのだけれど、あの早川は将来のヤマハにとって大変有望なライダーかも知れないね。」上野がソファに腰掛けて足を組んだままコーヒーカップを片手に取りながらそう言った。
「ええ、上野さん、彼は有望ですよ。僕から見てもあいつは才能がありすぎるという感じですから、今日だって清水をぶっちぎって、あっさりコースレコードですからね。初日からこんな事ありえないでしょう。まだセッティングだって十分じゃないのに…清水は昨年

のランキング2位の選手ですよ。その清水を簡単に抜き去るとは…」
「そこなんだ、こんなライダーは私も初めてなんだ。君でさえ初日はマシンのパワーに慣れるのが精いっぱいだったからねえ。」
「そうなんですよ。どんなに高度にチューニングしてもプライベートマシンはあくまでプライベートで、我々が乗るファクトリーマシンとは全く別の乗り物といっていいほどそのパワーや操縦性に差があるわけで、ところがあの浩輝といったら簡単にパワーと操縦性の違うファクトリーマシンに慣れてしまって、早くも欠点を指摘しているんですからね。まるでもっとパワーをくれと言わんばかりに…」
平田も上野の斜め前にあるソファに座り、マグカップのコーヒーを片手に持ち上げながらそう言った。
「早川君の将来が楽しみになって来たよ。」上野は欲しかったおもちゃを手に入れた子供のような笑顔でそう言った。
「ええ、今年のチャンピオンはもちろんですが、来年５００ｃｃにステップアップして近い将来片山さん以来になる念願の日本製マシンで日本人が日の丸をセンターポールに上げる姿が実現するかもしれませんね。もちろんその前に僕がチャレンジしてみますけど…」
少し沈黙した後に平田は続けて
「だけど彼はまだ地獄を知らない。事故を経験して、恐怖を克服できなければ本物にはなれない。あのやんちゃ坊主が本物になるのを見てみたいですね。」
平田と上野は頷き合って今日のレース全ライダーのラップタイムが記録された用紙に視線を落とした。
コース上を走るレーシングマシンの2サイクルエンジン独特のエキゾーストノートが響く菅生サーキットに少しづつ静かな山の夕暮れが近づいていた。

第6部　完

テストコース

7．テストコース

和弘は他のメカニックマンと一緒にヤマハファクトリーチームのトランスポーターである大型トラックにマシンやメンテナンス用品、スペアマシンや予備のタイヤなど大量の機材を詰め込んで、浩輝とは別にヤマハ本社のある静岡県浜松市に向かっていた。

浜松市のヤマハ本社にある2輪車専用テストコースでは毎日、レース専用のファクトリーマシンから一般市販品の原付スクーターなどのテスト走行が行われており、その膨大なデータとテストライダーやメカニックマンの意見が集約され、根本的な開発と改良が研究されそれぞれのマシンは日々進歩していた。

浩輝達ファクトリーライダーがレースで使うファクトリーレーシングマシンは、テストライダーによって走り込まれその完成度を高めているのだ。

メーカーのプライドであるファクトリーレーシングマシンに対する研究・開発費用は1台あたり数億円に上る、したがって、以前浩輝が乗っていたプライベートチューニングマシンでは追いつくはずがないのだ。

メーカーはレースを開発のための実験場と考えており、そのノウハウは市販車へ応用され数年後には市場で販売される事となる。

また、レースでの好成績はメーカーのイメージアップとなって市販車の販売を大きく引き上げる事が出来る。

前年のヤマハは全日本ＧＰにおいて５００ｃｃクラスは平田が個人タイトルを獲り、メーカータイトルもヤマハが獲ったが、２５０ｃｃクラスと１２５ｃｃクラスはホンダに個人タイトル、メーカータイトル共に奪われていた。

さらに世界ＧＰでもホンダのフレディースペンサーに”キング”ケニーロバーツが敗れ、個人・メーカー両タイトルがホンダに奪われ

てしまっていた。
静岡県浜松市にあるヤマハ本社とテストコースではホンダに奪われた世界ＧＰタイトルを奪還すべく日夜改良されたマシンを繰り返しテストして熟成させているのであった。
和弘がチーフメカニックを務める浩輝のチームも菅生でのマシンのセッティングやラップタイムなどのデータを毎日、この浜松のヤマハ本社にＦＡＸで送っており、ヤマハ本社ではマシンの特性や浩輝のライディングの特性分析と浩輝のライディングスタイルにあったマシンの開発が検討されＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０“ＨＩＲＯＫＩ”　スペシャルがまさに誕生しようとしていた。
菅生で浩輝が乗ったマシンは他のライダーの情報を基に作った一般的なセッティングであり、浩輝の特殊なライディングスタイルにはマッチしないとヤマハ本社は判断し、浩輝のポテンシャルを発揮し、さらにそのポテンシャルを引き伸ばすべく開発されたのが、ＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０“ＨＩＲＯＫＩ”　スペシャルであった。
今そのＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０“ＨＩＲＯＫＩ”　スペシャルが和弘の手で最終チェックを受けていた。
このＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０“ＨＩＲＯＫＩ”　スペシャルはヤマハ本社の手で全てのパーツが見直され、他のファクトリーマシンには無いスペシャルパーツが多く使われていた。
和弘は浩輝がこのマシンに乗ってあまりに乗りやすくて驚く顔が早く見てみたいと思いながらワクワクして作業を進めていた。
自宅へ戻った浩輝はヤマハから浩輝の銀行口座へ振り込まれた契約金２千万円の内、半分１の１千万円を母親名義の銀行口座に振り込み手続きをする為に駅前の銀行へ向かった。
これでもう母親のつらい姿を見ずに済むと思うと心の中がほっとした。
それは半年ぐらい前のある夜、浩輝はいつものように印刷工場でのアルバイトを終えて自宅へ帰った時であった。
自宅前に普段近所では見かけないリンカーンコンチネンタルが１台

路上駐車しており、その車の後ろにはいかにもチンピラ風な若い男が煙草をふかしていた。
その男の脇を浩輝が自転車で通り過ぎると、男は浩輝を睨みつけながら、コンクリートの路上に唾を吐いた。
浩輝は男を無視して自宅の玄関を開けた。
そこには暴力団の幹部クラス風のスーツを着込んで髪をオールバックに固めた身長の低い痩せた男と、体の大きなスキンヘッドの男が2人立っていた。
2人は紙切れを振りかざしながら土下座して頭を下げている浩輝の母親を見下していた。
浩輝の母は帰って来た浩輝を見て直ぐに立ち上がり、浩輝に向かって「何でもないからね。」と言って浩輝を急いで自分の部屋に入るよう急かした。
自分の部屋に入り、玄関先の物音に聞き耳を立てた浩輝は、借金返済を迫る二人の男と、もう少し待ってほしいという母の声が交互に聞こえてきた。
浩輝は「金さえあればあいつらの顔に叩きつけて逆にあいつらに土下座させる事だって出来るのに…」と心の中でつぶやいたが、現実に金が無く何もできない自分が悔しくていたたまれなかった。
それまでも毎日のように電報が来たり電話が来たりしていたので金に困っている事は解っていたが、実際に母の土下座して居る姿を目の当たりにして大きなショックを感じていた。
この日から浩輝は1日でも早く金を稼いで母を楽にさせたいと考えるようになり、外からは少し影があるように見られるようになった。
浩輝の契約金は実際にはホンダから２５００万円、ヤマハから２０００万円で、契約期間はどちらも2年間であった。
浩輝としてはヤマハよりは戦闘力の高いマシンを持っているホンダに魅力を感じてはいたが、どうしても実の兄の様に慕っている和弘と共に闘いたかった。
そこで、両メーカーに和弘をチーフメカニックに付ける事と和弘の

店にスタッフを1人派遣する事、さらに和弘の年俸は自分と同額にする事を条件とした。
その条件を含めた総合的なサポート体制と契約内容についての最終判断を浩輝は和弘に委ねたのだった。
浩輝は和弘の性格からいって99%ヤマハと契約するだろうと思っていたが、やはりその通りであった。
浩輝の年俸は最初のオファーに比べて少し下げられていた。
しかし、浩輝にはスポンサーからの契約金やレースで勝った時の賞金のほかにスポンサーからのボーナスが入る契約を交わすことになっている。
もちろんそれらのボーナスは和弘や他の若い2人のメカニックマンにも分配するが、浩輝もまだ若く十分な収入と言ってよかった。
浩輝の母は浩輝の契約金の半分を使って、残っていた借金を全て清算し、その後の生活も浩輝の年俸で十分賄えるのだが、パートの仕事を辞めずに続けていた。
浩輝はこれまでに溜まっていた和弘の店に対するツケを支払うと言ったが、そのツケは既にヤマハが支払い済みという事であった。
浩輝は全く知らなかったが、今まで浩輝が乗っていたTZ250は実は和弘がヤマハに手を廻してヤマハ本社から直接購入したものであり、チューニングパーツもほとんどヤマハから仕入れていたので、浩輝の借金はほとんどがヤマハにあったのだ。
和弘の店は埼玉県内でヤマハのオートバイ売上1位だったのでヤマハも売掛代金の回収にあまりうるさい事を言わず待っていたのだった。
今回の契約時に和弘は自分の年俸のせいで浩輝の年俸が下げられたので、その見返りとしてヤマハが直接持っている浩輝の借金の棒引きと、タイヤやオイルなど残った借金の肩代わりをヤマハに承諾させていたのだった。
浩輝は大学の入学金と1年間の授業料を支払い、授業に必要な教科書を買い、自動車教習所の費用をすべて支払ってもまだ十分に手持

ちの現金は残っていた。
浩輝はレースが始まるまでの間に普通自動車の運転免許を取得して、中古の赤いセリカＸＸを購入した。
プロフェッショナルレーサーとなった今、浩輝は今までの様に峠道をぎりぎりまで攻める事が、どれほどリスクが高いかを理解していた。
それに、峠道で感じていた他のライダーとの競り合いやコーナーをハングオンスタイルで駆け抜ける快感はその数倍も大きいサーキットで感じて行くことになる。
そうなると普段の生活でオートバイに乗る機会はほとんど無くなるだろうと感じていた。
オートバイの直に風を感じる爽快感や、遅い車を追い抜きながら早く走る快感は捨てがたいものではあるが、車の快適性、雨や風に左右されず寒い日でも暖かい車内で煙草を吸いながら、助手席にスカートの女性を乗せて走れる事はやはり大きな魅力であった。
浩輝はその中古で購入した赤いセリカＸＸで和弘達のいる浜松のヤマハ本社へ向かった。
国道２５４、通称川越街道を峠に行くのとは逆の池袋方面に走らせ、環状８号線の交差点を右折して用賀へ向かい、そこから東名高速に入って浜松を目指した。
浩輝のセリカはオートマチックミッションだったのですいている高速道路では、平均時速１１０ｋｍ／ｈで安全運転して居れば車線変更も必要無く、時々音楽のカセットテープを交換する位しかすることが無かった。
埼玉の家を出て約２時間３０分で静岡県浜松市にあるヤマハ本社に到着した。
ヤマハ発動機本社は周囲とは溶け込まない白い巨大なビルで、正面ガラス張りの１０階建であった。
初めて本社に来た浩輝は正面玄関の門をくぐり、来客用とアスファルトにペイントされている駐車ロットに自分のセリカを乗り入れ玄

関脇にあった守衛室へ歩いて向かった。
５０歳台前半と思える守衛にレーシングチームのオフィスの場所を尋ねると、守衛は胡散臭そうに浩輝を見て「何の用かね？」とぶっきらぼうに聞いた。
浩輝はそんな守衛の態度は無視して自分の名前を告げてからチーム監督の上野か、メカニックマンの土屋和弘を呼んでほしいと告げた。
守衛は渋々電話の受話器を取り上げて内戦のボタンを押すと、数秒待った後に事情を説明した途端、電話機に向かってぺこぺこ頭を下げ始めた。
どうやら上野に怒鳴られたようであった。
守衛からファクトリーチームのオフィスは本社ビルの裏にある研究開発棟にあるので、そこまで自分の車で移動して、研究開発棟の正面にある来客スペースに駐車してから、７階のオフィスへ行けばよいと教えられた浩輝は、簡単な地図を受け取り、守衛に頭を下げられた。
浩輝は守衛に言われた通りに地図を見ながら本社ビルの裏手に自分のセリカを進めると、そこにはスタンドが無い事を除くと本格的なロードレース用のサーキットとモトクロス用のオフロードコースがあり、テストマシンとみられる何のペイントもないマシンが数台走っていた。
ロードレース用のサーキットは普通のサーキットではコースの内側にピットがありパドックがあるが、ここではコースの外側にピットがあり、ピットの後ろには巨大な体育館の様な建物がそびえていた。
浩輝はそのテストコースを横目に見ながら自分の車を来客用とアスファルトに記載された駐車ロットに入れ、車を降りた。
建物の入口には「研究開発棟」と記載された銀色のプレートが嵌め込まれており、その横の白いプレートには「関係者以外入室禁止」と赤い文字で書かれていた。
自動ドアの中の受け付けには誰もおらず、用のある方は用件先の内線番号を押すように書かれた案内下敷きが電話機の横に置いてあっ

た。
浩輝は直接エレベーターホールへ入ろうとしたが、ロックがかかっており入る事が出来なかった。
その時エレベーターホールの中から「チーン」という音が聞こえ、エレベーターから上野が降りてきた。
「早川君どうしたんだい突然、ちょっと待ってね今開けるから」というと上野は首からぶら下げたプラスチック製のセキュリティカードをドアの脇にある読み取り装置に通して、自分の暗証番号を入力装置にタイプした。
「カチャッ」という音と共にエレベーターホールへ入るドアが開き上野が手招きしている。
「上野さん、お久しぶりです。」浩輝は簡単に挨拶するとエレベーターホールの中に入った。
「早川君のセキュリティカードは後で用意させるから、この中にいるときは何時でも首から下げておいてくれよ、そうすればこの中では何でも出来るからさ。」上野はそう言うと浩輝に向かってウインクして見せた。
浩輝と上野は上野が乗って来たエレベーターで7階に上がった。
この研究開発棟の入口もそうであったが、エレベーターを降りたこの7階の廊下も人の気配が無く、ひんやりした空気が漂っていた。
ドアの脇のネームプレートに”ファクトリーレーシング部”と書かれたドアの前で、上野は再び首からぶら下げたセキュリティカードを使い、入力装置に暗証番号を入力してロックを解き、ドアを開けて部屋の中へ入って行った。
浩輝も上野の後に続いてその部屋に入った。
その部屋には１００人以上の人間とおびただしい数のコンピューターが並んでおり、先ほどまでの廊下の雰囲気とは打って変わって、まるで株の売買をしている証券取引所のようであった。
数人のスタッフが上野と一緒に入って来た浩輝に好奇の目を向けたが、ほとんどの人間は二人に気づいていなかった

上野は奥にある個室へ浩輝を招き入れた。
そこはファクトリーレーシング部　部長室と書かれていて部屋の奥の隅にあったが四方はガラス張りで外から中が見えるようになっていた。
上野は、自分のデスクの前にある椅子を浩輝に勧めると、自分はデスクの後ろの椅子に腰かけた。
「ところで早川君、今日は突然どうしたんだい？此処へ来る予定はなかったと思うが…」上野はデスクの上の煙草を浩輝に勧め、浩輝が断ると自分で１本咥えてライターで火を付けた。
上野の部屋に紫の煙が立ち込め、浩輝の鼻孔を煙草の香りがくすぐった。
「突然おじゃましてすいません、車を買ったのでドライブついでに寄ってみたんです。」
「ほう、そう言う事でしたか。いやいや何時来てもらっても歓迎しますよ。こんなところでは窮屈でしょうから、下の工場にいるワコウさん達のところへ行ってみましょう。」
上野はそう言うと煙草を大きな灰皿でもみ消し、ワイシャツの上にジャンパーを羽織って浩輝と一緒に部屋を出た。横にいた女性事務員に浩輝を紹介し、工場へ行って来ると告げると再び部屋を出てエレベーターに乗り、１階に降りて行った。
１階では正面玄関とは逆の方へ向かい鉄製のドアの前まで来ると、セキュリティカードを使ってそのドアを開けた。
そこは先ほど見た巨大な体育館の中であった。
１００ｍほど前方に巨大な出入り口があり、その先にロードレース用のサーキットの一部が見えた。
天井までは３０ｍ位あり、中ではエンジンをふかす音が響いていたが、空調がいいせいか排気ガスは気にならなかった。
５０人以上のメカニックマンがツナギ姿でレーシングマシンや市販車のパーツを組み立てたり、エンジンをばらしたりしている横で数名、上野と同じヤマハファクトリージャンバーを着たスーツ姿の男

がフリップボードに何かを書きこんでいるようであった。
浩輝は上野の後を追ってその工場の中をロードレースコースに向かって歩いて行った。
上野は時折数名のスタッフとあいさつを交わしながら和弘が整備している浩輝のマシンブースに入って行った。
上野に続いて浩輝がブースの中に入ると、マシンにマフラーを取り付けていた和弘が顔を上げて浩輝の姿を見て驚いた。
「どうしたんだ、浩輝！」和弘の問いかけに上野が答えた。
「ワコウさん、早川君はドライブの途中で立ち寄ってくれたそうだ。」上野は嬉しそうな笑顔でそう言った。
「ワコウさんに会いたくて来ちゃいました。」浩輝は少しおどけてそう言った。
「何言ってんだ、お前が会いたいのは俺じゃなくてマシンだろう。解っているんだぞ。」和弘も嬉しそうであった。
浩輝も「ばれましたね。」といって皆で笑った。
「さあ、皆久しぶりに再会した事だし早川君、今日はこっちに泊って行かないか？ホテルの心配はいらないよ、うちでいつも使っているところがあるから直ぐに手配してあげるがどうですか？」上野は浩輝と和弘の顔を交互に見ながらそう言った。
「えっそんなつもりで来たわけではありませんから着替えとかも持って来ていないし…」
浩輝が突然の申し出に少し驚いてそう言うと
「何言ってんだよ浩輝、お前これまでに二日も三日も風呂も入らないで同じ服着て筑波で走った事が何回もあるだろう。駅前のスーパーに行って下着だけ買ってこいよ。そうすりゃ明日このマシンに乗れるぞ、そうなりゃ俺も大助かりなんだ、なんたって走ってみなきゃセッティングは詰められねえからな。」
「うん、ワコウさんの言うとおり、私としても君に早く乗ってもらって、細かいセッティングを早く出してもらえるとありがたいんだが…もちろんこれは強制ではないよ、しかし君さえよければ是非協

力して欲しい。」上野も今度は真剣な眼差しでそう言った。
「解りました。僕も実は1日も早くマシンに乗ってみたかったのでお世話になります。ところでワコウさんは何処に泊っているのですか？」
「おれは此処の宿舎に泊っているんだよ。ここにはメカニックマン用の個室があって、食堂もあるから食事以外はずーっとマシンに向かっていられるんだ。少しぐらい休みも欲しいけどな。」和弘が上野を横目で見ながら言うと。
「いやいや、昔はホテルへの移動時間がもったいないという事で、よく徹夜で作業して明け方毛布1枚にくるまって仮眠していたのだ。そんな事が続いてメカニックマンの要望で宿舎を建てて食堂も作ったのさ。いまでは本社の食堂としても食事のサービスをしてもらっているがな。」上野が少し強くそう言った。
「上野さん、その個室に空きはありませんか？もしあれば僕は今夜そこで泊まりたいのですが、ホテルってなんだか馴染めなくって…」浩輝が上野をなだめるようにそう言った。
「早川君、君はうちの契約ライダーだ。契約ライダーは体を大事にしてもらわなきゃ困る。ホテルに慣れるのも仕事と思って、今日はホテルで休んでくれ。」上野にそう言われたが、浩輝は「あれ、上野さん僕の契約期間は来週からですよ。今日はまだ契約期間じゃないはずですけど。」と言い返した。
「上野さん、こりゃ浩輝の勝ちですね。浩輝、今日だけだぞ、次からはちゃんとホテルで休むようにしろ、いいな。」和弘にそう言われた浩輝はぺこりと頭を下げた。
「解った、解った、部屋は用意させるよ。ちょうどワコウさんの部屋の隣が空いていたからそこに泊りなさい。」上野もあきらめたようであった。
「そのかわり夕食は食堂ではなくて私に付き合いなさい。ワコウさんも一緒にな。早川君は此処でしばらくマシンのセッティングをしていると良い、ワコウさんその後で早川君を部屋に案内してくださ

い。私は仕事を片付けてくるから、そうだなあ午後６時になったら研究開発棟の正面玄関で待ち合わせしよう。いいね。」
「上野さん、ありがとうございます。」和弘が上野に礼を言うと浩輝も頭を下げて礼を言った。
上野は「じゃあまたあとで」と言い残して研究開発棟の方へ歩いていった。
浩輝はその後、和弘と一緒に浩輝専用であるＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０“ＨＩＲＯＫＩ”　スペシャルのシートポジションやハンドルの位置、ステップの位置などを調整してもらい、ガソリンタンク上部にある顎を乗せる場所のくぼみや手前のニーグリップ用のくびれ具合を確認して過ごした。

第７部　完

スペシャルマシン

8．スペシャルマシン

浩輝がここ、静岡県浜松市のヤマハ発動機本社に着いたのが午後３時ごろだったのと、マシンのエンジンを組んだばかりであと数時間ならし運転をしなくてはならなかったので今日は浩輝専用のスペシャルマシンに乗る事は出来なかった。

和弘は、清水が浩輝に物凄いライバル心を燃やしていいて、今回も特にマシンテストの予定は組まれていなかったが菅生のレースから引き続きこのテストコースに入り、清水自身のライディングとマシンのレベルアップに取り組んでいる事を部下のメカニックマンから聞いていた。

和弘は過去、若い才能がベテランライダーから消された事例を知っていたので浩輝に「気をつけろ」とだけ伝えたが、浩輝には何の事か和弘の言った意味がさっぱり分からなかった。

その夜、ヤマハファクトリーレーシング部長の上野と和弘、浩輝の３人は浜松の街に繰り出して上野行きつけの双葉寿司という寿司屋のカウンター席で菅生のレースの事や昔和弘が現役時代の事などを楽しく話しながらうまい寿司を腹いっぱい食べた。

上野と和弘はビールから始まり、酎ハイを経て日本酒を相当大量に飲んでいたが、浩輝は酒が弱いわけではなかったが、明日のテストを考えてビールだけ飲んで、食べる方に専念していた。

浩輝はカウンターでうまい寿司を腹いっぱい食べるのは何年振りだろうかと考えながら明日午前１０時から始まるテスト走行の事を考えていた。もちろん今夜中にヤマハのメカニックマンによってＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０“ＨＩＲＯＫＩ”　スペシャルのならし運転は終えてあるので、明日は全開走行が可能なのだ。

寿司屋の後、上野と和弘はもう１軒寄って行くから浩輝に先に帰るよう言い残し、ネオンの中に消えて行った。

浩輝は上野からもらっていたタクシーチケットを使ってヤマハ発動機本社の正面玄関まで戻り、守衛にあいさつした後、歩いてテストコース脇にあるスタッフ用宿舎に戻った。
翌朝午前7時に目を覚ました浩輝は、部屋に付いているユニットバスで熱いシャワーを浴びてからストレッチ体操を行なって体をほぐした。
午前8時に隣の和弘の部屋をノックし、和弘と共に宿舎の1階にある食堂へと降りて行った。
この時間では少し遅かったようで、若いメカニックマンのほとんどは既に食事を済ませて自分の持ち場で今日の仕事の準備に取り掛かっていた。
すいている食堂の中央付近に和弘と向かい合ってテーブルについた浩輝は、セルフサービスのカウンターから、熱いみそ汁とアジの干物や目玉焼き、漬物を受け取り、横のテーブルにある大型の炊飯ジャーの中の真っ白な白米をどんぶりによそって席に戻った。
浩輝は朝食を必ず食べることにしている事と、地元産のアジの干物があんまりおいしかったのでどんぶり飯をお代わりして食べてしまった。
和弘と一緒に食後の日本茶をすすってから部屋に戻った浩輝は、昨晩浜松市内のデパートで買った耐火性の下着に着替えてから菅生で使った革ツナギとブーツをつけて、レーシンググローブやヘルメットを小脇に抱えてテストコースに面したファクトリーマシン専用ピットへ向かって部屋を出て行った。
午前9時45分にＹＡＭＡＨＡファクトリーチーム専用ピットに着くと、赤いカウリングを装着した1台のファクトリーマシン、ＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０“ＨＩＲＯＫＩ”　スペシャルが車体最後尾の2本のチャンバーから白い排気炎を吹き上げながら甲高いエキゾーストノートをあたり一面に轟かせていた。
浩輝専属メカニックマンである鈴木がアクセルを素早く開けたり閉じたりを繰り返しながらタコメーターの針を睨みつけるように凝視

していた。
和弘はその脇に立ってエンジンの音に全神経を集中させ異常音が無いか確認していた。
浩輝がピットの中に入ると和弘が浩輝の耳元に口を近づけ大声で「エンジンは９０００回転まで回していいがプラグは低熱価だから５周走ったら交換するぞ、ピットサインを４周目に出すから一旦ピットに入れ、いいな。」と叫んだ。
浩輝は和弘に向かってＯＫサインで返事をすると、耳にイヤープラグを差し込み、耐火性のフェイスマスクを頭からかぶった。
フェイスマスクの裾を首の下まで引っ張り革ツナギに中にしっかり入れてから、ツナギのファスナーを一番上まであげて、首元のホックを閉めた。
メカニックマンの鈴木が浩輝のマシンのスタンド外してから、別のメカニックマンの吉田がタイヤウォーマーを外してスロットルレバーを一定に保ったままＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０“ＨＩＲＯＫＩ”　スペシャルをピットロードへと押し出していた。
浩輝はヘルメットを被り、顎紐をきつめに締めてからグローブを両手にはめて、手首のマジックテープをこれもきつめに締めた。
ピットロードで吉田が支えているＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０“ＨＩＲＯＫＩ”　スペシャルを受け取り、クラッチレバーを握ったまま何度か軽くアクセルを煽ってみると、タコメーターの針は凄い速さで跳ね上がった。
浩輝は興奮を抑えながら、ギアが１速に入っている事を確認してからマシンを数歩押し、押し掛けの要領でシートに横座りしてスパッとクラッチを離すと同時にアクセルを開いた、途端ものすごい力で浩輝の体は後方に引っ張られ、マシンはピットロードを加速していった。
浩輝はきちんとシートに座る暇もなくピットロードの終わりまで来てしまい、慌ててアクセルを少し戻してシートに座りなおした。
この時間は浩輝専用なので他に走っているマシンが無い事から恥ず

かしさを感じなくて済んだがこれが何処かのスポーツ走行で大勢のギャラリーがいたらと思うと顔が真っ赤になってた。
浩輝のこれまでの経験から来る予想をはるかに超えた加速であった。浩輝は最初の４周をゆっくりと走らせながら主に、コーナー脱出時の加速を確認していた。
驚くべき事に、これまで使っていたファクトリーマシンとは雲泥の差でＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０“ＨＩＲＯＫＩ”　スペシャルは深いバンク角から物凄いパワーで加速し、後輪のグリップは何度か限界を超え小さくスライドした。
浩輝は４周目の最終コーナーを加速しピットインのサインボードに頷きながらホームストレッチをエンジンの回転を９０００回転まで使って加速し各コーナーでも限界まで攻め込んで最終コーナーを回ったところでエンジンを切って惰性でピットロードにマシンを進めて行った。
ピットまでに行く間、浩輝はこのコースは筑波と鈴鹿の各コーナーが再現されている事に気がついた。
コース全長はそれほど長くないが、筑波の第一ヘアピンと第２ヘアピンまでのＳ字コーナーや最終コーナーと、鈴鹿のスプーンから１３０Ｒ－シケインまでが再現されているコースだったのだ。
浩輝がピットに近づくと和弘の姿が見えた。
「ワコウさん、このコマシンは本当にこれまでと同じ２５０ｃｃ何ですか？」マシンをメカニックマンの鈴木に預けながら、浩輝はヘルメットも取らずに和弘にそう言った。
「もちろん２５０に決まってるだろう、浩輝よどうだ今度のマシンは、お前の手に負えるかなあ。」和弘はニヤニヤしながらそう言うと、カウリングの下半分が取り外され、プラグを高熱価のものと交換されているＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０“ＨＩＲＯＫＩ”　スペシャルを指さしながらそう言った。
「ワコウさん、僕の手に負えるかですって、まあ見ていてください。このコースはまるで筑波と鈴鹿のミックスコースですから、もう目

隠ししていても走れますよ。」浩輝はヘルメットとフェイスマスクを外して缶入りのコーヒーを飲みながら自信たっぷりに言い放った。
「浩輝、このコースの２５０ｃｃのコースレコードは昨日清水が出した４２秒６４０だ。今日は初めてだからコースレコードを作れなんて言わないが、せめて４３秒台は出してくれよな。エンジンは１１０００回転まで回していいぞ、さあ行け。」和弘に背中を押された浩輝は、再びフェイスマスクとヘルメットを着けてからグローブをはめてマシンの元に戻った。
今度は慎重にマシンを加速させながらシートに座り、誰もいないテストコースに進入していった。
浩輝は１周目から飛ばした。
エンジンは和弘が言った１１０００回転まで回して走ってみて浩輝は驚いていた。
先ほどまで走ったマシンとはまるで違うマシンのようであった。
マシンを取り替えたのでは無いかと思うほど、このマシンは、乗りやすかった。
浩輝が直感的に加速しようとする場所でエンジンはきっちり加速し、その回転数から得られるトルクやギア比がピッタリであった。
２周目に入ると浩輝はさらに深い突っ込みとフルバンクからクリッピングポイントの少し前から加速状態に入り、マシンを立ててリアタイヤにグリップを与えてエンジンパワーを開放して走った。
すると不思議なことにマシンは安定した旋回能力を発揮して、浩輝の理想通りにラインをトレースして加速していった。
浩輝は全く恐怖を感じす、むしろもっと行ける。と感じていた。
７週目にピット前を通過した時、ラップタイムを計っていたメカニックマンの鈴木が叫んだ。
「ワコウさん、やりましたよ。４２秒５８４です。レコードですよ。」
「まいったなあ、いきなりかよ。大体はじめて走るコースで初めて乗るマシンだぞ。ちょっとそれは無いだろう。」和弘は嬉しい半面、

浩輝の走りが恐ろしいとさえ感じていた。
浩輝はピットサインでラップタイムを知らされていなかったが、レコード近くのタイムは出せていると感じていた。しかし、自分のラップタイムまだまだ限界だとは感じていなかった。
８周目の最終コーナーを浩輝が立ち上がってピット前を通過しようとした時、ピットロードの先から加速して第一コーナーに進入するマシンがあった。
「誰だ！今のは？」和弘が椅子から立ち上がって叫んだ。
「清水さんのマシンです。」メカニックマンの吉田が叫んだ。
和弘は清水のピットに走った。
「おい、今は浩輝専用時間のはずだぞ、何で清水がコースに入るんだ。」和弘はピットにいた清水のチーフメカニックマンである和田に喰ってかかった。
「いやあワコウさんすいません。うちの清水がどうしてもお宅の早川君と走ってみたいと言って勝手に出て行っちゃったんですよ。」和田はニヤケながらそう言ったが嘘である事は誰でもわかる事だった。
「わざと浩輝の前に出しやがって。浩輝の邪魔をする前にピットに戻せ！」和弘が和田の胸ぐらを掴んでそう言うと、「解りましたよ、清水には直ぐピットに入るようにサインを出しますよ。」和田は苦し紛れにそう言って和弘の腕を振り払った。
和弘は清水のピットを出て自分のピットに戻って行った。
「タイムはどうだ。」和弘はラップタイムを計測している鈴木に聞きながら記録用紙を覗き込んで驚いた。
浩輝の８周目のラップタイムは４２秒０００と書かれていたのだ。
ちょうどその時２台のファクトリーマシン、すなわちＹＡＭＡＨＡ　ＹＺＲ２５０“ＨＩＲＯＫＩ”　スペシャルと清水のマシンが最終コーナーを脱出して来た。
前を走っているのは清水のマシンで、浩輝はその清水のマシンから２ｍ程後ろでスリップストリームに入っていた。

疾風の如く通過した2台のマシンはもつれるようにして第一コーナーへ進入していった。
「この周のラップタイムは？」和弘が鈴木に聞くと、「４３秒１２１です。」と鈴木が苦い表情で答えた。
「どうします？ピットインさせますか？」横にいた吉田が和弘に尋ねた。
「まあいいだろう。清水だってベテランだし間違った事はしないさ。それに浩輝にとっても頭を押さえられた時のライン取りなど勉強になるってもんさ。それにタイム差がこんなにあったんじゃ浩輝は何時だって清水を抜けると思うよ。」和弘はいい方に考えるようにした。
浩輝は突然目の前に現れて自分のラインを塞ぎながら、スローモーションのようにゆっくりとコーナーを回り、ストレートだけ速く走るのが清水のマシンだと直ぐに気がついた。
しかし、和弘から清水に気をつけろと言われた事もあって1周目はわざとテールトゥーノーズを演じて清水の走りを後ろから観察していた。
清水の走りはストレートの最高速度は浩輝と変わらないか、少し清水の方が速いようだったが、コーナーへの突っ込みが甘いのとコーナー脱出時の加速体制への入り方が遅いので各コーナーで０．３秒ほど浩輝の方が速い事が解った。
清水とのランデブー走行が始まって2周目に入ると浩輝は鈴鹿サーキットで言うとヘアピンコーナーから１３０Ｒの侵入でインへ入るとフェイントをかけて清水をインサイドにおびき寄せてからアウトいっぱいのラインでギリギリのブレーキングポイントからマシンをフルバンクまで寝かしこみ、クリッピングポイントを清水より手前にしてから清水のラインと交差してマシンのパワーを開放して後輪にトルクを与えて脱出していきながら清水をあっさりかわして行った。
清水は焦っていた。

菅生でも浩輝のラップタイムの方が上だったばかりか、このテストコースでも浩輝の方が速いなんて考えられなかった。
清水は５年前にノービスクラスの祭典である鈴鹿４時間耐久レースに大学の２輪車部として参加し、２位に入りヤマハにスカウトされてファクトリーライダーとなった。
その後５年間このテストコースと国内のサーキットで腕を磨き、昨年は念願の２５０ｃｃクラスで年間２位に入り、今年こそは優勝と気合を入れて臨んでいた。
しかし菅生でのテストで浩輝に負け、その後このヤマハ本社で引き続きマシンのセッティングと自分のライディングトレーニングを積んで、昨日念願の平田が持っていたコースレコードを破って、新しいコースレコードを自分の手で掴んで、自信を取り戻していたからコースに出て浩輝に自分の速さを見せてやろうと考えてたのに、あっさりと浩輝に抜かれてしまった。
清水のプライド、国際Ａ級ライダーとして国内ＧＰ２５０前年ランキング２位のプライドはズタズタにされてしまった。
しかし、清水は浩輝のライディングを目の前に見ながらまだその速さを信じる事がどうしてもできなかった。
浩輝マシンを後ろから追ってぶち抜いてやろうと考えていた。
清水もまた根っからのレーサーであったのだ。
浩輝の姿を後ろから追いながら清水は浩輝のマシンに引っ張られるように同じ速度でシケインへの進入ラインに入った。
最初の右コーナーから左コーナーへの切り返しで浩輝と清水の差が出てしまった。
つまり浩輝は素早い切り返しから左コーナーのクリッピングポイントへマシンをフルバンク状態でラインに乗せたが、清水の切り返しはコンマ何秒か浩輝より遅かった。
清水のマシンは脱出ラインに乗せるためバンク角が限界を超えてしまった。
ステップが路面と接触し、後輪のグリップが低下した清水のマシン

は、リアタイアがスリップしそのまま転倒した。
転倒した場所がシケインでマシンのスピードが遅かったため、マシンにもライダーにもダメージはほとんど無い様であった。
浩輝はピット前を通過する手前で清水のマシンが追ってこない事を知ったが、シケインを通過するときにバリケードの外に運び出されようとしている清水のマシンと、メカニックマンと一緒にピットに向かって歩いている清水の姿を見てほっとした。
その後の浩輝はまさに水を得た魚であった。
２５周目に３９秒６４２という５００ｃｃのコースレコードさえも破って、その名の通りこのテストコース最速のコースレコードを作ってクールダウンのためゆっくりと１周回ってからピットロードに入って行った。
ピットでは他のチームのメカニックマンたちも押し寄せて大騒ぎであった。
マシンを自分の専属メカニックマンの吉田に預けた浩輝に和弘が抱きついてきた。
「お前は天才だ、俺は未来の世界チャンピオンのチーフメカニックだぞ！！」と叫んでヘルメットの上から浩輝の頭をバンバン叩いた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6076m/

ガーディアン　Guardian　「守護者」　誕生

2011年8月21日16時56分発行